

トヨタ財団
1987(昭和62)年度年次報告

目次

凡例	3
理事・監事	4
評議員	5
変わるもの・変わらぬもの 浅田 孝	6
5回目を迎えた研究コンクール 山岡義典	12
「固有文化」をめぐる展開と交流 若山佳子	16
I. 研究助成	21
I-0. 研究助成の概要	22
I-1. 第I種研究(個人奨励研究)	25
I-2. 第II種研究(予備的研究)	33
I-3. 第III種研究(総合研究)	40
II. 研究コンクール	47
II-0. 研究コンクールの概要	48
II-1. 第5回研究コンクール応募要項(抄)	49
II-2. 第5回研究コンクール予備研究助成対象	51
III. 活動記録助成	53
III-0. 活動記録助成の概要	54
III-1. 活動記録の作成	55
III-2. 活動記録の出版	58
IV. 国際助成	59
IV-0. 国際助成の概要	60
IV-1. 国際助成対象	62
IV-2. 国際助成インドネシア若手研究者奨励研究助成	87
V. 「隣人をよく知ろう」プログラム	89
V-0. プログラムの概要	90
V-1. 日本向け・翻訳出版促進助成	91
V-2. 東南アジア向け・翻訳出版促進助成	94
V-3. 東南アジア相互間・翻訳出版促進助成	97
VI. その他の助成	99
VI-0. その他の助成の概要	100

VI-1. フォーラム助成	101
VI-2. 民間助成活動促進プログラム	103
VI-3. 特別研究助成	104
VI-4. 東南アジア研究英訳刊行助成	105
VI-5. 成果発表助成	106
VI-6. その他助成	108
VII. 日タイ修好100周年記念特別助成・事業	109
VII-0. 特別助成と特別事業の概要	110
VII-1. 日タイ修好100周年記念特別助成	111
VII-2. 日タイ修好100周年記念特別事業	112
VIII. 会計報告・事業日誌	113
VIII-0. 事業実績の概要	114
VIII-1. 助成金支出累計	115
VIII-2. 1987(昭和62)年度会計報告	116
VIII-3. 1987(昭和62)年度事業日誌	119

凡例

1. 財団法人トヨタ財団は、1974(昭和49)年10月15日、トヨタ自動車工業株式会社及びトヨタ自動車販売株式会社(両社は1982年7月1日合併し、トヨタ自動車株式会社となりました)の出捐に基づき、総理府より設立許可を受けた民間助成財団です。
2. 当財団では、1975年度以来毎年度、和文・英文の年次報告書を作成し、広く関係者にお配りしております。
3. この年次報告書は、1988年6月16日の第48回理事会において承認されました「昭和62年度事業報告書」に基づき、当財団の1987(昭和62)年度(1987年4月1日～1988年3月31日)の事業内容をとりまとめたものです。
4. 本報告書中の助成対象一覧は、いずれも助成決定時のものであり、決定以後の変更は割愛しました。ただしこれまでの助成対象について助成金額の変更があったものについては、会計報告欄にそれを記載しました。
5. 本報告書中の助成概要は、いずれも助成決定時における計画の概要であり、助成による研究等の成果ではありません。これらの概要は、助成対象者からの提出書類に基づき、財団事務局にて作成したものであり、文責は当財団にあります。
6. 当財団では、和・英文の年次報告のほか、年4回「トヨタ財団レポート」を発行しており、これらは希望者に無料でお配りしておりますので、御希望の方は官製ハガキで当財団事務局あて、お申しこみください。

理事・監事

1988(昭和63)年3月31日現在(五十音順・敬称略)

理事長	豊田英二	トヨタ自動車株式会社取締役会長 財団法人 トヨタ財団理事長
副理事長	森 秀太郎	財団法人 トヨタ財団副理事長
専務理事	浅田 孝	財団法人 トヨタ財団専務理事
理事	天城 勲	文部省顧問
	大島正光	財団法人 医療情報システム開発センター理事長
	加藤誠之	トヨタ自動車株式会社相談役
	神尾秀雄	トヨタ自動車株式会社相談役
	草場敏郎	株式会社 三井銀行取締役会長
	富永誠美	全日本空輸株式会社顧問
	林 雄二郎	東京情報大学学長
	山口日出夫	財団法人 トヨタ財団事務局長
監事	菊池 稔	東京海上火災保険株式会社相談役
	中川 進	公認会計士

評議員

1988 (昭和63)年 3月31日現在 (五十音順・敬称略)

荒木信司	トヨタ中古自動車販売株式会社顧問
石塚直隆	名古屋大学名誉教授
岡本道雄	京都大学名誉教授
加藤誠之	トヨタ自動車株式会社相談役 財団法人 トヨタ財団理事
駒井又二	豊田工業大学学長
小山五郎	株式会社 三井銀行取締役相談役
佐伯喜一	株式会社 野村総合研究所相談役
杉浦敏介	株式会社 日本長期信用銀行取締役会長
豊田英二	トヨタ自動車株式会社取締役会長 財団法人 トヨタ財団理事長
豊田章一郎	トヨタ自動車株式会社取締役社長
永井道雄	国連大学特別顧問
沼田 真	千葉大学名誉教授
長谷川龍雄	
花井正八	トヨタ自動車株式会社相談役
林 健太郎	参議院議員 東京大学名誉教授
林 雄二郎	東京情報大学学長 財団法人 トヨタ財団理事
目比野 進	名古屋大学名誉教授
平尾 収	東京大学名誉教授
松本重治	財団法人 国際文化会館理事長
本明 寛	早稲田大学文学部教授
森 秀太郎	財団法人 トヨタ財団副理事長
盛田昭夫	ソニー株式会社取締役会長
渡辺 武	日米欧委員会日本委員会委員長

変わるもの・変わらぬもの

——新しい地平へ——

トヨタ財団専務理事

浅田 孝

はじめに

わかぬトヨタ財団も創設以来はやくも、まもなく15周年を迎える。この短い年月の間に、どうにか国の内外でも認められるようになってきた。私は昭和62年度から、理事会の指名により、前専務理事林雄二郎氏のあとをお引き受けすることになった。

トヨタ財団は、前専務理事とスタッフ、なかでも岩本女史をはじめとするオフィサーたちの果敢な開拓者精神と挑戦によって、その創設期を終え、いよいよこれから正念場に差しかかろうとしているといってもよい。

前任者同様よろしく御声援・御叱正を賜るようお願い申し上げる次第である。

I 慌てず騒がず着実に

これまでのトヨタ財団の助成活動が比較的短い年月の間に、立ち上がりが可能だったことには、いくつかの具体的な理由があった。

その主なものを挙げてみると、

- ① まず理解ある出捐者の意向で、全くといってよいほど財団当局の自主的な運営が、尊重され勇気づけられてきた
- ② そのため、少数でも意欲的なプログラム・オフィサーの、進取の気性と積極的な取組みとが、多くの困難にもかかわらず、新しい助成対象の発掘やその助成事業の成果につながった
- ③ 公募助成型と開発助成型とを使い分け、また適宜組み合わせることにより効率的な助成対象の発掘に有効な途を開くことができた
- ④ 慎重に組織・運営された選考委員会の協力を得て、対象分野の選択・助成選考・効率的な助成管理などに、よい慣習が定着した

⑤ 顧問的な立場での企画委員会の活用よろしきを得て、適時適切な大所高所からの助言を得て、大筋において誤りを避けることができ、またスタッフも次第に自信をもって事に当たることができた

以上のようなことがすべて絡み合って、全くゼロからの出発であったにもかかわらず、大過なくかつ自信をもって事を進めることができたといえる。その要因は、未経験・未開拓・未組織のこの分野に、果敢に挑戦された林雄二郎・前専務理事や岩本一恵女史の開拓者精神によるところが大きい。

また、これらにこたえて発揮された、当初の幹部スタッフの努力と工夫そして不断の精進とが、短い年月のうちに助成対象者の信頼を得て、次第に助成の質を高めてゆく契機となった。

そしてこうした礎石の上に、理事長をはじめとする理事会の全幅の信頼と鼓舞とが、これらのすべてを望ましい方向に推し進めることのできた最大の理由であったということが出来る。

II 財団の「いのち」の重みを

私がかねてから、助成財団の「いのち」は永遠であり、また絶えずそうあることを理想とすべきものである、といつてきた。

誤解を招かないようにいっておくが、これはほとんど助成財団に限って見えることと理解しておくべきだろう。

かつて、私は記念施設の開設や国際会議の開催に関連して、いくつかの事業財団の設立運営に与かったことがある。その場合いつも財団の有効性について、関係方面とその問題——つまり運営もしくは協力財団の有効存続期間の点で——議論を闘わすことが常であった。

これらのうち特に運営・事業に関するものについては、比較的限定された目的をもち、また期目的にも限られた短期間に目的の事業を達成することが要請され、またそうした短い有効時間のなかに、全エネルギーを投入することのほうが目的達成のうえからいつてはるかに望ましいという、根源的な意味からの見解をもったからである。私が設立に関与した財団はすべてこうした配慮から、全力を振るってその目的を達成し、その事業の経過と今後への展望とを報告する義務を果たした後、その後の全体の発展に邪魔にならないことに重点をおいて、可及的速やかに解散したものである。

これらは、助成財団とは違って、目的事業達成の主体であり、物事の第一

線にある以上、国家的あるいは国際的状況の変化——社会的・経済的・政治的・文化的——発展に即して、恒久的にその第一線を担わされ、また担い得るのは、きわめてまれなことであるからだ。事実こうした役割を果たし終わった多くの財団・団体が、今日のように変化の激しい時代の趨勢を、キャッチアップしていく力を失ってゆく事例は決して少なくはない。

一般助成財団はこれとは全く違った社会的使命を背負っている。それは物事の主たる目的を担うことはない。助成対象となる学術的・文化的・社会的内容の達成に自ら参与することは求められてはいない。端的に言えば助成対象となる学術的・文化的・社会的な達成のいかんは、挙げて助成対象者の責務と研鑽そして労苦と榮譽とに帰せられるべきものである。

では助成財団は何を目的として何に責任を負っているのであろうか。また何を期待して助成財団に多くの特典が用意され、何を根拠として永遠の生命が期待されているのであろうか。

III まだ姿をあらわにしない転換期の時代

これまで世界の先進国では公的私的を問わず、近代国家社会との深い関わりをもって、教育・研究・開発・実践のための社会的なシステムを築き上げてきたが、多くの後進地域でも同様にそうした努力が繰り返され始めている。世界の物質的な生産諸力は過去にその例をみないほどの水準に達し、その力を背景にこの地球世界の物理的・時間的距離の短縮は、いまなおそのテンポを速めその規模を拡げてきている。

地球世界の変貌は、あらゆる意味で再び引き返すことのできないような事柄を積み重ね続けている。人間が手に入れた知識と経験を総動員して、この現状を改善し、世界の転換期に対処しようという兆候はまだみえず、そうできるという保証はまだどこにもない。

人類史の20世紀とはなんだったのかが問われているいま、まだ私たち人類社会に残された可能性はあるのか、あるとすればどこにどのようなものがあるのか、どうすればそこに近づけるのか、まだ何ひとつ分かってはいないままに、時代はその歩みを速めている。これまでの政治・経済・社会・学術・文化・宗教などが創造してきた成果は、果たしてその理想を実現する方向に活かされているのだろうか。

こうした言わば世界の現実的かつ根本的な欠陥を実証し、それに立ち向か

うことのできるような努力に着手できるとすれば、それはどんな仕組みを通じてなのだろうか。ふくれ上がる一方の巨大な物量化と組織化とは、人間社会のすべての活動の場面から、人間の人間らしさを——喜びや哀しみや痛みや思いやりなど——人間らしい感性や理性といった、多くの根源的な特質を破壊しつくそうとしているかのように見える。

「にんげん」として生きることの尊厳性・情緒性・感受性・共感性・連帯性などなど、一人の「にんげん」であることの根源的な意味こそが、最も貴重であり最も信頼でき、最も美しく最も頼りになる、そんな時代は永遠にこの地上には再び訪れることはないのだろうか？

IV 関係の創造ということ

時代の様相が困難であればあるほど、またその困難に対応しこれを克服することが難しければ難しいほど、実社会の既存の機構や組織には無力感が漂い、人々は新たな望みをはるかな地平に託すことになる。

およそ2世紀に満たない歴史しかもたない「財団」に寄せる人々の思いには、このような願いと期待とがかけられているのではないだろうか。私は産業革命期のもろもろの困難に際して、その社会的歪みや人々の絶望感と戦った財団初期の多くの歴史をたどり、そこから多くを学んできた。フォーラム助成によるファイランソロピー研究などに学ぶことも多かったが、彼の時代とこの時代との間には、同じく困難といいながら、その困難の様相も、規模も、意味も、構造も、まるで比較にならぬほどの開きがあることに気がつく。

ようやく10年の余を経て、トヨタ財団も初期学習の時期を終えるべき段階にきているのではないか。いくつかの創造的試みもそろそろ時代の物差しに照らして秤量評価すべき時がきているように私は思う。だとしたら——私たちはこれから何をしなければならぬか、また何ができるのか、を虚心淡懐に自省し、これからの5年・10年・20年に備えねばならない。

林前専務理事の下で任意団体として始められていた「助成財団資料センター」を、助成財団共通の相互協議・総合調整・国際協調・公開広報など、新しい時代の新しい「天下の公器」とする仕事は、この4月の設立許可によって助成財団資料センターとして発足できた。後は多くの助成財団の方たちと分担協力して、時代の要請に対応する体制をつくり上げることである。その本格的活動には、なお年余を要するだろうが、文字どおり日本の助成財団

のセンターとして、欧米のセンターと広範な連携強化の道が開けることになろう。少なくとも2年目には本格的活動を開始できることを期待したい。

わがトヨタ財団としては、こうして多くの助成財団との協調体制を強化しつつ、新しい世紀に対応できるよう、内部の組織体制や人材養成の基礎を固める時期にきており、その作業を急がねばならない。

しかも一方では、現に助成対象でもある人たちやチームへの助成や援助も継続して実施していく責務があり、多くのハードワークが待っている。数少ないスタッフたちの精進・協力を得て財団一丸となって、新しい時代の要請にこたえることのできるような体制をつくり上げる仕事に取りかかる必要がある。

V 創造的関係の創出への努力を

もともと学術・芸術は基本的に文化の根幹を成すものである。成熟期に入った工業生産にしても、現代の文化事象と深く関わっており、文化に背を向けては消費者の心をとらえることは不可能となろう。

工業社会も今日のような段階を迎えると、次第に国民生活の最も深い根底にある、文化的価値の創設メカニズムと深く関わってくるだろうことはいうまでもない。

助成財団のみならず財団活動一般もまた、国家・民族の文化的価値の創造と深く関わってこざるを得ない。いまやフィランソロピー全般が優れて文化的価値の創造に加担すべき運命にあるといっても過言ではない時代がくる。

また近代社会の成熟と拡大とは、次なる世界時代においては国内のどのような活動も、世界の唯一つの独自構造「かけがえのない地球」に、地政学的規模での対応を迫られることになろう。

助成財団の活動分野のいかにかわからず、このような時代での有効な助成事業のあり方は、財団自体はもとより、その衝に当たる財団スタッフ自身にも、格段の創造的な学習努力を要請することとなろう。少数のスタッフでこの転回期の時代の要請にこたえるには、装備と人材の質の向上以外にはなく、仮に限定された分野での助成に対しても、これらスタッフ自らの幅の広い人格形成と緩むことのない不断の精進とを要請するものである。

トヨタ財団の行っている「身近な環境をみつめよう」コンクールという地域密着型の助成種目がある。コミュニティ・レベルでの壮大な試みもすでに

5回目を迎えているが、そろそろ抜本的見直しの時期にきていると判断する。私がこの試みに企画委員として賛成したのは、環境問題が優れて内包する、「関係の自覚と創造」という、時代の新しい課題への挑戦を含んでおり、そのことの意義を重くみたからだが、ここで改めてマクロ・ミクロの観点から、その成果を評価し直す必要があろう。

このレベルでの助成には初めから、子供たちを巻き込んでの「身近な科学を学ぼう」という実践はできて、市民社会での新しい「関係の創造」にはどうも限界があるようである。ところでこの「関係の創造」ほど分かりやすくそれていて実践の難しいものはない。これこそが「世界は一つ」という市民社会の命題であるにもかかわらず、それがいかに難しいことか——単なる研究や活動資金の供給という物的な相互依存の関係だけからのアプローチには、本来の限界があるように思う。

助成財団の任務が、助成申請者の研究や活動が必要とする資金についての単なる需要と供給の関係だけに止まるとすれば、こんなやさしいことはない。だがはたしてそれだけで良いといえるのだろうか？ いま新しい世紀に向けて助成財団に期待される永遠の「いのち」からは、このような安易な関係の積み重ねだけでは済まされない責任があるのではないだろうか？

多くのすぐれた学識者・経験者を選考委員に迎えて、毎度お願いする選考委員会での心苦しいまでのハードな知的・肉体的作業にしても、ただ単なる採点評価・選択決定といった御苦勞を越えた何かがあり、またあつてしかるべきものではないのだろうか、というのが私の実感である。

まれにではあるが、申請者・選考者・助成者のそれぞれに、今日という時代の要請に応えようとする動機と意志と自覚とが、三者の間でたまたま合致して発揮されたとき、私どもは互いに、ひとつの協働的な「学習創造作業」を分かち合えたという喜びを自覚することがある。このように三者のお互いの心に残るような「創造的關係」の創出こそが財団の至高の目標であり、新しい世紀という時代の要請するものでもあるのだろう、と私は思うのだがいかなるものであろう。

私たち財団界に身をおくものは深くこのことを理解し、絶えず自省自戒する必要がある。そしてみずからの心身をこの道において磨かなければならない。私はスタッフの諸君とともに、慌てずゆっくりでもいいからこの道を一步一步着実にあゆんでゆきたいものだと思う。

5 回目を迎えた研究コンクール

トヨタ財団 研究助成部門 プログラムオフィサー

山岡義典

●スタートに着いた18チーム

この4月9日の午後、全国から18のチームの代表が東京に集まった。“身近な環境をみつめよう”をテーマとする第5回目の研究コンクールで、121の応募のなかから予選を通過したチームの説明と交流の会がもたれたのだ。それぞれに個性的な、しかも多彩なメンバーを擁する市民中心の研究チームである。まず北から順に各チームを紹介しよう。

- ・明治以来の建築の色彩を下見板に塗られたペンキの層から復元し、函館の色風景の変遷を再構成しようという「函館の色彩文化を考える会」(北海道)
- ・青森の森の青さの実態を、植相との関連で科学的に明らかにしようという「青森県木材加工研究会」(青森)
- ・古くから奥会津一帯で栽培されてきた越後上布の原麻、カラムシ(植物名)にまつわる生活文化を探り、村おこしに生かそうという「昭和村生活文化研究会」(福島)
- ・川と流域の生活との関係を、それぞれの地域の人たちが参加して克明に記録しようとする「久慈川水系環境保全協議会」(茨城)
- ・船橋・市川の地先に広がる浅瀬の生態系を調査し、これを埋め立てないで保存し活用する方法を模索しようとする「三番瀬研究会」(千葉)
- ・現存する銭湯を、高齢者の在宅福祉用のサービス施設(=ケアセントウ)に転用しようとする「新宿高齢者在宅サービス研究会」(東京)
- ・60年前に建てられたかつての近代的アパートに、どう棲み続けていくかを模索する「ガンバル江戸川アパートメント」(東京)
- ・女性用の公共トイレだけがなぜ混雑するのかを、三つのチームで三つの大都市をフィールドに調べようとする「女と男のトイレ研究会」(東京・京都・大阪)
- ・都市化による川の汚染の実態を明らかにし、木炭を使うなど独自の工夫でこれを浄化しようとする「八王子・浅川地区環境を守る婦人の会」(東京)
- ・人為的に移入され再野生化したタイワンリスを、人間生活の場にどう位置づけ共存していったらいいかを探る「古都鎌倉の自然研究会」(神奈川)
- ・ムササビ、リス、ネズミ、モグラ等、ごく普通の小動物と市民の出会いの森を作ろうと構想する「都留市ムリネモ協議会」(山梨)
- ・牛乳パックの紙の再利用を、障害者の仕事に結びつけながら進めようとする「富士北麓パック再利用研究会」(山梨)
- ・住民の生活感覚によって水利用の問題を取り上げ、地下水収支の実態を自ら持続的に観測しようとする「大野盆地地下水研究グループ」(福井)
- ・自然エネルギーを利用した小規模な水力発電で、山村のお茶の生産を振興しようとする「地域ぐるみの実験に取り組む「水車むら会議」(静岡)
- ・都市化のなかで汚染してしまった湖沼の再生を凶ろうと基礎調査に取り組む「佐鳴湖環境調査会」(静岡)
- ・現代社会における親の意味と役割を、福祉の現場の視点から問い直そうとする「家庭養護研究会」(大阪)
- ・離島群の間に古くから存在した連帯の習俗を調べ、再評価しようとする「トカラ研究会」(鹿児島)
- ・八重山地方のサンゴ礁に伝わる独特の漁法と入浜慣行を、住民の眼と耳で記録しようとする「魚垣の会」(沖縄)

この日は各チームの自己紹介の後、各選考委員から忌憚のない感想が述べられた。それぞれの選考委員が、それぞれの思いを込めて選び出したその思いを語り、また今後の不安や期待についても語った。その後しばらく、各チームと委員とのやりとりが続くが、突っ込んだ個別の議論は夕方からの懇親会に持ち込まれた。そこでは自由な雰囲気の中なかでさまざまに論議が弾んだようである。それぞれの決意を胸に秘めて根拠地にもどった各チームの代表者たちは、この議論の様子などを会のメンバーと熱っぽく語り合ったのではなかろうか。

こうして、4月初めから8月末にかけての予備研究がスタートした。この間、6月末から8月初めにかけては、各委員が分担し、私たち事務局のスタッフとともに、現地インタビューにうかがうことになっている。調査や研究がどのように進められているかを、現地を踏査しながらメンバーの人たちから聞くわけだ。そして8月の末には、再び東京に全チームが集まって、2日間にわたる報告会をもつ。それまでの成果とともに、その後2年にわたって行う研究の計画内容を報告し合うのである。

この報告を基に再び選考が行われ、このうちの半数余りのチームが次のステップ、すなわち2年にわたる本研究に進むことになる。その途中、また現地インタビューがあり、中間報告会があり、2年間の終わりには最終報告会がある。もちろん、報告書も提出する。

そして3度目の選考が行われ、一つの最優秀賞と幾つかの優秀賞が決まる。昨年11月の公募開始から数えると3年4か月後のことである。

●第1回からの経緯

このような研究コンクールを最初に始めたのは1979年の秋のことであるから、もう9年近くになる。以後1年おきに実施しているので、ここでその経緯と変遷について簡単に振りかえっておこう。

最初の回は、財団設立5周年の記念事業として試行的に行ったものだ。それまでの研究助成の体験から、専門家の基礎研究だけでなく、もっと市民や住民中心の環境研究を振興するようなプログラムが必要ではないかと考えていたので、内部でいろいろと検討し、また各分野の

専門家とも相談しながら、“身近な環境をみつめよう”というテーマの内容と、「研究コンクール」というプログラムの形式に到着したのである。そして相談にもっていただいた沼田真先生（当時千葉大学教授）に選考委員長をお願いし、実施に移した。正直のところ、事前のアセスメントのしようもなく、こういうものが成り立つかどうか不安は大きかった。あまり効果がなさそうであれば、記念事業ということで単発で終わらせることも可能であった。

しかし公募してみると126件という多数の申請が全国から寄せられた。もちろんなかにはかなりの的外れなものもあるにはあったが、総体としては、内容的にも一定の水準にあったとあってよいであろう。これなら継続してやっていけるのではないかとということで、以後1年おきに実施することにした。毎年行えばよいのだが、そうすると同時に3～4回分が並行して進むことになり、とても事務局の手が回らなくなってしまうから、やむを得ず隔年実施としたのである。

第2回の内容は前回とほぼ同様であるが、このときからNHKの後援をいただくようになった。選考委員長は引き続き沼田先生をお願いした。応募数は108件とやや減ったが、第1回に準じて進行した。なおこの回には、市民の研究活動の展開していく様子を映像で記録することにし、四つのチームを2年にわたりカメラで追い続けた。その結果は「わたしたちのまち・自然・いのち」という34分の記録映画となり、1984年10月の財団設立10周年記念シンポジウムの席で発表された。

第3回と4回は、選考委員長を浅田孝理事（現・専務理事）をお願いして進めたが、第4回の実施に当たってプログラムを再検討することにした。それまでに選考委員を経験された方や新たに選考委員をお願いする方に集まっていたら、非常に熱烈な、そして実に興味深い討議を4回にわたって繰り返し、新しい方向を模索した。それまでに2回のコンクールが完了して一応全体像や問題点が見渡せるようになったこともあるが、事務局としては、第3回の応募が86件に減少したこともあって、このままでよいのだろうかという疑問もあったからである。

このような議論を踏まえて、第4回では次の点を改訂した。一つは「環境」の概念がハードに偏り勝ちなのを改め、もっと精神的な側面を重視するとともに、このコンクールをより親しみのあるものにするため、応募要項を全面的に書き改めること。もう一つは、これまでは2年間の本研究に進んだ段階で「研究奨励賞」として表彰していたが(第1, 2回はそのなかに金賞と銀賞を設けた)、この段階では単に「本研究助成」とし、表彰は2年後の研究終了時だけとすること。そしてこの終了時の表彰も従来の「研究奨励特別賞」1件と限定せず「最優秀賞」と幾つかの「優秀賞」の複数にすること。またその後のフォローアップのための助成にも幅をもたせること、などである。

選考委員の谷川俊太郎氏にお願いしたコピー「ごきぶりにも真理がひそむ」の効果もあってか、この回の応募は140件とこれまでの最高に増えた。内容的にもかなり幅広いものが集まったように思う。現在、これらのなかから選ばれた八つのチームが、この秋の最終報告会を目指して本研究の後半戦に取り組んでいる。財団の事務局には、時折これらのチームからホットな近況が伝わってくる。それは私ども財団のスタッフにとってかけがえのない楽しみでもある。

こうした経緯を経て、昨年11月から今年の1月にかけて第5回の公募が行われ、冒頭の18チームが予選進出となったわけだ。応募要項の内容は前回とほぼ同様であるが、選考委員長は新たに小原秀雄先生(女子栄養大学教授)にお願いしている。

●「身近な環境をみつめる」ということ

第1回の企画以来、いままぜ身近な環境なのかという問題意識がつきまわってきた。この経緯をみるため、次にこれまでに決まった第1回から3回までの研究奨励特別賞の受賞研究を紹介しておこう。

第1回は「岐阜県哺乳動物調査研究会」(代表:川崎立夫)の『岐阜県における哺乳類の生息状況とその環境調査及び環境教育にかかわる研究』。アンケートや聞き取り調査あるいは文献資料の検討や現地観察などによって、県下の9科15種の哺乳動物の生息状況が環境変化と

ともにどう変わりつつあるかを描き出し、そしてこれを基に、小・中・高校の環境教育プログラムを開発し、教育現場で試行したものだ。選考では幾つかの他のチームと競り合ったが、最終的に僅差でこのチームに落ち着いた。

第2回は選考委員会での熱い議論の末、意見が別れて2チーム受賞となった。一つは「十八鳴浜研究会」(代表:荒木英夫)の『宮城県気仙沼市大島十八鳴浜における鳴り砂の発音特性の変化と海および浜辺の汚染との関連について』。砂の鳴り具合の評価方法を開発し、場所や季節によってそれがどう変わるかを定量的に明らかにし、同時に鳴りの条件を模索して人工鳴り砂の製法を確立したものだ。もう一つは「子どもの遊びと街研究会 三軒茶屋ブロック」(代表:石川由喜夫)の『3世代(現在、1960年ごろ、1930年ごろ)の遊び場マップづくりによる生活空間の点検と再生——三軒茶屋における「話」の採択と実践を通して——』。子どもの戸外での遊びが3世代でどう変わってきたかを聞き取りと観察によって詳細に調べ、農村から住宅市街地へとという環境の変化と対応させて、だれにも親しまれる「遊び場マップ」、「遊び場図鑑」を作成したものである。

前者が「自然」を扱ったのに対して、後者は「生活」を扱っており、研究の方法にしてもその成果の表現の仕方にしてもきわめて対称的である。同一の尺度では評価しにくい面をもっていた。両者をめぐっての委員会での議論は、市民の環境研究とは何かを考えるうえで実に興味深いものであった。

なお、第2回で候補に上がった「インフルエンザワクチン効果に関する研究班」(代表:由上修三)の『前橋市に於けるインフルエンザの流行調査とインフルエンザワクチン効果に関する研究』は、専門研究的性格が強くてコンクールの趣旨に馴染みにくく、また審査の時点では明確な結論が出ていなかったこともあって特別賞にはならなかったが、その後もトヨタ財団の一般の研究助成に引き継がれて5年にわたる追跡調査を成し遂げ、表題のテーマに関する貴重なデータを提供して話題になった。第3回の隠れた特別賞といえるかもしれない。

第3回のコンクールでは、「都市鳥研究会」(代表:

唐沢孝一)の『東京駅・皇居周辺における都市環境下に生息する野生鳥類の生態研究』がグランプリを獲得した。カラスやツバメをはじめとする野鳥たちが、東京都心部という人工的な環境のなかでどのように生活しどのような行動を取っているかを、斬新な視点で克明に観察したものである。ある意味で、第2回で分裂した「自然」と「生活」を見事に融合したものといえる。この回の特別賞はほとんど全員一致で決まったが、「これをこの研究コンクールの目指す模範例と考えてはいけない」というコメントも、ある委員から出された。

だれもがまだ見ぬ理想の研究像——それは時代とともにダイナミックに変化するものであろうか——を永遠に求め続けるのが、この研究コンクールの宿命なのかもしれない。

研究奨励特別賞(第4回以降は最優秀賞と優秀賞)を受賞すると、その後も数年にわたる助成を受けて研究を続けることになっている。昨年(2019年)の11月29日(日)、第1、2回の特別賞受賞3チームが続けている研究のその後の経過報告を聞く機会をもった。第1回のスタート以来のさまざまな試行や模索の過程を思い巡らしながら、またかつての現地インタビューでの様子や選考委員会での議論を思い出しながら、それぞれの展開の姿に真剣に耳を傾けたものである。そして「身近な環境をみつめる」とはどういうことだろうか、またまた泥沼のような問いのなかに吸い込まれていくのであった。

このコンクールの当初の意図は、生活現場からの発想に基づく環境改善運動の基礎固め、という点にあった。そのこと自体はいまでも重要なことには違いないが、そ

れだけであればもっと効率のよい別のやり方もありそうである。「身近な環境をみつめる」というこのまどろっこしい営為のなかには、それ以上の何かがあるはずである。そしてその何かを私たちは研究コンクールを通して探求してきたのではなかったか。

その私たちが十分に言い表せなかった何かを、最近目にした中村雄二郎氏の次の言葉は、大変示唆に富む言葉で表現しているように思う。

「棲み家としての都市はたしかに一種のコスモス(有機的宇宙)ではあるが、これまでコスモスとしては正當に名づけられてこなかった。そこで私としては、都市を〈メディオ・コスモス〉と名づけたい。その意味するところは、マクロ・コスモスとミクロ・コスモスを媒介するものだということである。」(『術語集——気になることば——』(岩波新書)137ページ)

ここでの「都市」は農村に対するものとしての都市ということではなく、人の集まり住む場所のことを指している。それはそのまま「身近な環境」と置き換えてもよいだろう。そしてそれは大宇宙という外的世界(マクロ・コスモス)と人間という内的世界(ミクロ・コスモス)を媒介するもの(メディオ・コスモス)だということである。私たちが「身近な環境をみつめる」とき、ともすれば地域エゴに近い視野狭搾に陥り勝ちである。余所者に分かってたまるかという一人よがりにも陥り勝ちである。それも確かに重要なことには違いないが、しかし真に「身近な環境をみつめる」ということは、それを通して大宇宙を見つめ、同時に人間の内的世界をもみつめることでなければならないのではないだろうか。

「固有文化」をめぐる展開と交流

トヨタ財団 国際助成部門 プログラムオフィサー

若山佳子

●新規助成のなかから

1987年度に国際助成は件数が1986年度の51件と比較すると約1.4倍の71件となった。予算は1億3000万円で全く変わりが無い状況でのこの変化の原因は、円高傾向がさらに強まって現地通貨ベースでの実質的な予算額が増加したことと、1件当たりの助成金額が全体として小型化していることにある。

この傾向は1985年以来特に顕著であり、助成件数は1984年度には26件であったものが、1985年度には52件、1986年度には51件、1987年度には71件となっている。1984年度の26件と比較すると1987年度はその約3倍弱となって、数多くのプロジェクトに助成することができた。しかし助成対象のフォローアップを考慮すると、現在のスタッフの体制ではこの辺が助成件数の限界と考えられる。

助成対象者を国別にみると、フィリピン23件、インドネシア17件、タイ10件、ベトナム7件、ネパール5件、マレーシアとラオスが各4件、スリランカ1件となっている。これらのうち継続助成が45件で、新規助成は26件である。

新規助成のうち幾つかをここで紹介しておく。

フィリピンでは歴史研究がさらに多様な形で行われ始め、建築史や地方の口承文学も助成対象となっている。「18世紀におけるフィリピン聖職者の起源」は現在のフィリピン社会において重要な役割を果たしている聖職者の起源を歴史的に研究するもので、聖職者の特徴と役割を文献調査により明らかにする。その結果、フィリピン社会におけるカソリック教会の果たす役割をも歴史的に明確にしようとするものである。

「パッキングの歴史：1572年—1987年」は、フィリピンで第4番目に設立された古い町の歴史を、その地方の多

くの家に伝わっているいわゆる^{地方文書}を利用して記そうといういままでにない試みである。普通は家に伝わる古文書を部外者にみせたがらない場合が多いが、研究者はこの町の旧家で、アプローチがしやすく、^{地方文書}のなかから、何か新しい発見がなされる可能性を秘めている。

「ヴィサヤ地方とミンダナオ地方のイエズス会派教会の歴史的研究：1581年—1768年、1859年—1921年」はフィリピンでイエズス会派が布教活動を行った二つの時期に建てられた教会の建築史を書くことを目的としている。

「フィリピンの土着イスラム建築に関する写真による予備調査」はフィリピン南部にみられるフィリピンの土着的要素をもったイスラム建築の地理的分布を調べ、その民俗学的特徴を明らかにするための、写真による予備研究である。フィリピンの各モスレム・グループの土着の建築様式が明らかになると同時に、それらの建築様式が他の東南アジア諸国および中近東の建築と共通している点が明確になると期待される。

「マノボ族の叙事詩『ウラヒーガン』の記録、翻訳、編集」では、フィリピン南部の山岳少数民族の口承叙事詩を記録し、ローマ字表記したテキストと英訳の原稿を作成する。いままで知られていない地方の文学をフィリピンの国レベルで共有しようとする試みの一つである。

インドネシアでは地方の伝承文学、イスラム思想史、伝統医療関係貝葉、インドネシア語、等に関する研究が新規の助成対象となっている。

「リアウ地方の口承文学：内陸部住民のニャニィ・パンジャン」は、記録に残る最も古いマレー人の王国のあった地方の、マレー語方言による口承文学を記録し、インドネシア語に直して出版しようとするものである。こ

の口承文学はマレー系の人々の歴史、文化、価値体系などの研究に貴重な資料となる。

「スルック：ジャワのイスラム教徒の神秘詩」は、ジャワ伝統文学の重要な一部を成すイスラム宗教詩スルックの収集、アラビア文字またはジャワ文字からローマ字への翻字、インドネシア語への翻訳出版を行おうとするもので、さまざまな分野のジャワ研究に貢献するものと期待される。

「H. アブドゥル・カリム・アムルラー・アドダナウィの著作に関する研究」は、1900年頃西スマトラで起こったイスラム教の改革運動の中心的指導者の著作についての研究を行おうとするものである。埋もれた思想家の発掘により、インドネシア近代史に新しい光を当てる可能性がある。

「バリの伝統医療関係員葉文献の目録作成」は、バリに残されている員葉文献ロントルのうち伝統医療に関するものの目録づくり、重要文献の翻字、翻訳を行おうとするものである。

「インドネシアの諸民族言語との関連におけるインドネシア語の利用と発達」は、独立以降国語として定められたインドネシア語が実際にどれほどの人々に話されているのかを、国勢調査のデータを解析することによって、初めて定量的に調査しようとするものである。合わせて300以上の民族集団、250以上の言語があるといわれているインドネシアの言語地図を作成することも目指している。

タイでは1985年頃から、タイの固有文化と近隣諸国の固有文化とのつながりを考えるという、国際的な広がりをもつプロジェクトへの助成に力を入れているが、1987年度の新規助成対象にもその方向が反映されている。

「中国・広西のチュアン族とタイの関係についての研究」は、中国・広西に住む少数民族、チュアン族と東北タイに住むタイ族との関係について、双方がその起源において関連性がある、との仮説を実証することを目的として、言語、民間伝承、歴史の視点から研究する。タイ族のルーツを解明するうえでも重要な研究である。

「タイのヤオ族と中国・広西のヤオ族の比較研究」では、言語、文化、歴史の視点から二つのグループに分けられる、タイに住むヤオ族のうち、中国・広西のヤオ族

とより類似性のあるグループは、ラオスを通して広西からタイに移住した人々であるという仮説を実証することを目的としている。前述のプロジェクトとともに、このプロジェクトはタイと中国の研究者の共同プロジェクトである。両国の学術交流を促進する効果も期待される。

ヴェトナムでは1985年度に助成が開始され、すでに助成されたプロジェクトは、1985年が2件、1986年が3件であったが、1987年度には一挙に7件となった。そのうち新規に助成対象となったのは、周辺諸国と強い関係をもつ少数民族の研究と歴史・考古学の研究である。

「メコンデルタの文化的特色と人口」は、ヴェトナム南端に位置するメコンデルタに住む少数民族が長い間近隣諸国、東南アジア島嶼部、インド、中近東などの人々と、文化的・経済的交流を続けてきた点に着目して、彼らの特色、また相互間の経済・文化交流活動を調査し、適切な開発政策を策定するための知識を得るとともに、東南アジア、南アジアの隣国との相互理解を強化することを目的としている。

「ヴェトナムの古代の町」は、紀元前3世紀から紀元18世紀の間に設立された、コロア、タンロン、ホイアン等の10の町の遺跡を、考古学、歴史学、社会学、民族学などの学際的な視点から調査することにより、ヴェトナム史の研究に貢献するとともに、ヴェトナムと東南アジアの歴史と伝統的社会についての理解促進が図られることが期待される。

1987年度の国際助成で特筆すべきことは、ラオスへの助成が開始されたことである。4件の助成プロジェクトのなかでも「員葉文献の保存、記録、翻字、インヴェントリー作成、マイクロフィルム化に関するセミナー」への助成が行われたことの意義は大きい。

このセミナーはラオスの歴史、文化を研究するに当たって貴重な資料となる員葉文献が散逸している状況に対処するために、芸術・文学研究所が中心となって開催したもので、員葉文献の重要性に対する一般の認識を高めるための方策、現存する員葉文献の所在の把握の仕方、員葉文献の保存のためのフレーム・ワーク等について話し合われた。員葉文献はタイにも多くみられ、財団はこれまでに、タイの員葉文献保存のためのプロジェクトを

助成してきたが、それらの事情に詳しい日本の学者がこのセミナーに参加し大きく貢献した。

現在、ラオスとタイの関係は政治的に微妙なところがあるが、この助成は直接の学術・文化交流が行われることが困難な状況にある場合の一つの方法として評価されるであろう。

マレーシアでは歴史、文化変容等についてのプロジェクトへの助成が新たに行われた。「東南アジアのアラブ人：歴史・社会学的研究」は、商業、金融、教育、宗教、法体系、外交、政治の諸分野で、東南アジアに大きな影響を与えたアラブ人の役割について研究しようとするものである。研究者自身がアラブ系のマレーシア人で、得難い人材を得た研究である。

ネパールへの助成はすべて継続研究で、新規助成は行われなかった。スリランカは政情が不安定なため、助成は1件行われたが、今後の情勢を見きわめる必要がある。

●若手研究者奨励研究助成

1987年度から若手研究者奨励研究助成が、国際助成の枠内で新たに開始された。この助成は当面はインドネシアのみで行われる。その目的はインドネシアの社会・人文科学分野の若手研究者を対象として、比較的小規模の個人研究に助成金を提供しようとするものである。国際助成としては初めて一般公募形式を取り、インドネシアのほとんどすべての地域から申請が出され、大学の研究者ばかりでなく、民間の研究機関等からの応募もみられた。17件が助成対象となったが、助成対象者は35歳以下の研究者で、経済学、社会学、文化人類学、教育学、文学、法学などの分野の研究テーマが扱われている。

若手研究者奨励研究助成は、試行的に数年間インドネシアで実施する予定である。その他の国々については、この成果をみてから改めて考慮したい。

●日タイ修好百周年記念事業

1987年は日タイ両国が修好宣言に調印してから百周年に当たり、それを記念してさまざまな催しが両国の各方面で行われた。トヨタ財団は国際助成を1976年度に開始して以来、特に1984年度頃まで、タイで多くのプロジェク

トへの助成を行ってきた。1987年にはそれらのプロジェクトの成果が出そろったこともあって、この「日タイ修好百周年記念事業」に協力を行った。ここでは特に国際助成に関係の深い事業について述べておくこととする。

この年の秋、東京国立博物館、朝日新聞社他の主催で「タイ美術展」が東京国立博物館および大阪、名古屋の2箇所で開催されたが、トヨタ財団はこれを後援して、タイの寺院壁画の写真パネルの展示に協力した。これらの写真パネルはトヨタ財団が1978年度から1980年度までの3年間にシンラパコン大学助教授、ソン・シマトラン氏に助成して行われたプロジェクト、「北タイ寺院壁画研究」の成果の一部である。

また、この「タイ美術展」に協賛して、勸国際文化会館との共催で、「タイ美術史——寺院壁画と石造建築を中心に」をテーマとする公開シンポジウムを開催した。このシンポジウムでは、前述のソン氏の研究に基づくタイの寺院壁画に関する研究成果、およびタイの石造建築に関する研究成果が発表された。石造建築に関する研究はシンラパコン大学准教授、アヌウィット・チャレンスブクン氏が1980年度から1986年度までにトヨタ財団の助成を受けて行ったプロジェクト、「東南アジア伝統建築の歴史——6世紀から13世紀のタイにおける建築の発展」である。なおタイ美術史の概観については、シンラパコン大学元学長のスパトラディット・ディッサクン氏から報告をしていただいた。

(注) 公開シンポジウムとともに「日タイ交渉史をめぐる史料について」と題して研究ワークショップが行われた。これは1985年度研究助成対象の「日本語およびタイ語一次史料に基づく日・タイ交渉史の予備的基礎研究」（代表者：大阪外国語大学教授、吉川利治氏）等に関連して、改めて日タイ交渉史を総括しておこうというものであった。

●「隣人をよく知ろう」プログラムの問題点

日本向け・翻訳出版促進助成は東南アジアの文学作品や人文・社会科学書の日本語版の翻訳・出版を行う際の翻訳費を助成するものである。10年目を迎え、累計で117件が助成対象となった。この助成の現在の最大の課題は、

近い将来にこれらの本が財団の助成なしに翻訳・出版されてゆくような体制づくりがなされることである。この助成が開始された頃と比較すると、東南アジアへの関心は高まっていると思われるが、いまだに本はなかなか売れてはいない。商業出版として成り立つだけの出版部数がさばけないのである。一方で、これだけの数の翻訳書が出版されるようになると、翻訳書が出るだけで価値があるという状況から、翻訳書の質が高いかどうか問われる状況へと変化してきている。それぞれをいかに魅力的な本にして、読者を引き付けるかが問われてきているのである。その意味では、現在、翻訳者また出版社に対して、魅力ある本づくりについて、いっそう厳しい態度と高い水準が求められている。財団としてもこのような状況判断に基づいて、今後のプログラム運営に当たるつもりである。いずれにせよ、東南アジアの本が一定の読者を獲得し、欧米の本の翻訳書のような出版水準を保持できて、財団の助成が不要になる日が1日も早くくることを切望している。

東南アジア向け・翻訳出版促進助成は、日本の文学作

品、日本に関する人文・社会科学書および日本人による東南アジア研究の成果を、東南アジアの言語に翻訳・出版する際の翻訳費、出版費などの助成を行う。この助成は1982年にタイで開始されて以来、マレーシア、インドネシア、ネパール、ヴェトナム、スリランカ、ラオスで行われている

東南アジア相互間・翻訳出版促進助成は、東南アジアの人の書いた文学作品、人文・社会科学書を他の東南アジアの言語に翻訳・出版する際の助成を行う。この助成は1983年にタイで開始され、その後フィリピンとインドネシアでも進行中である。

これら二つの助成プログラムの問題点については1986年度の年次報告書に詳しく述べたので、ここでは繰り返さないが、日本と東南アジア諸国、また東南アジア諸国間の情報の流れを促進していくことは、現在緊急に必要とされていることである。特に今後は東南アジア諸国相互間における知識の共有が重要な課題となるであろう。そこで日本の財団が果たせる役割は何かを見きわめる必要がある。

I . 研究助成

I-0. 研究助成の概要

研究助成については、例年どおり4月1日から5月31日にかけての2か月間にわたり、一般公募を行った。基本テーマは、過去3年に続き「新しい人間社会の探求」である。研究種別も、第I種=個人奨励研究、第II種=予備的研究、第III種=総合研究となっており、その概要は表I-1に示すとおりで、前年度に準じている。なお、表中の「選考の重点」の項にある選考基準①～⑤は、それぞれ次の内容を示している。

- ① (発想の獨創性) テーマ設定や研究方法、研究体制について獨創的な発想があり、研究内容に今後の展開となるようなものが存在すること。
- ② (社会に対する先見性) 研究目的が社会に対する鋭い洞察力をもって定められており、長期的にみて、その研究を遂行すること自体の、あるいはそれによって得られる成果の社会的意義が大きいこと。
- ③ (申請の適時性) 現時点でのその研究への助成が、研究者または研究チームの今後の成長・発展にとってかけがえのない契機になると予想されること。
- ④ (民間財団の助成にふさわしい研究) 他からの資金援助(例えば政府や企業からの委託あるいは助成など)が得難い種類の研究であって、民間財団が助成することの意義が大きいこと。
- ⑤ (研究計画の実現性) 研究計画が十分に検討されており、所期の目的を達成することによって学術的にも社会的にもインパクトを与え得る可能性が大きいこと。

応募件数は737件で昨年度の777件^{*}より約5%減少した。その内訳は表I-2に示すとおりである。

選考は、研究助成選考委員会(委員長:加藤一郎ほか委員11名)において7月初めから8月末にかけ、慎重に行われ、第I種研究27件、第II種研究26件、第III種研究15件、合計68件の研究が選出された。昨年度の63件^{*}に比べ5件の増である。これらのすべては、10月開催の第46回理事会の審議を経て最終的な助成対象に決定した。なお、選考委員長による選後評は、「トヨタ財団レポート」No. 42に掲載されている。

表 I-1 研究種別と助成の概要 (応募要項より抜粋)

研究種別	個人奨励研究(第I種研究)	予備的研究(第II種研究)	総合研究(第III種研究)
研究の性格	若手研究者による萌芽的な個人研究	学際的・国際的・職際的な総合研究のための準備研究(共同研究に限る)	第II種からの展開, 第III種研究の継続, による総合研究(共同研究に限る)
1件当たり助成額	概ね50~200万円/件	概ね100~300万円/件	概ね200~2,000万円/件
助成予定総額	約4,000万円 (約25件)	約6,000万円 (約25件)	約1億円 (約15件)
助成期間	1987年11月1日より1年間	1987年11月1日より1年間	1987年11月1日より1年間または2年間
選考の重点	選考基準①③項を特に重視	選考基準①②④項を特に重視	選考基準①~⑤のすべての項目を総合して

表 I-2 1987年度研究助成申請・助成結果集計

(金額は, 万円単位)

	年度	全 体**		第I種研究		第II種研究		第III種研究**		
		申請	助成	申請	助成	申請	助成	申請	助成	
申請・助成件数	1987	737	68	310	27	396	26	31	15	
	1986	777	63	325	22	423	30	29	11	
申請・助成金額	1987	209,804	20,070	56,871	4,230	119,951	6,800	32,982	9,040	
	1986	224,181	19,780	62,072	3,630	127,895	7,800	34,214	8,350	
1件当たり平均	1987	285	295	183	157	303	262	1,064	603	
申請・助成金額	1986	289	314	191	165	302	260	1,179	759	
外国人の参加する研究	1987	236	32	22	6	201	16	13	10	
	1986	219	30	23	5	178	17	18	8	
海外および外国人からの申請*	F/F	1987	35	9	13	2	21	5	1	2
		1986	47	8	14	3	28	4	5	1
	F/J	1987	18	5	9	4	9	1	0	0
		1986	24	4	9	2	14	1	1	1
	J/F	1987	46	5	32	4	12	1	2	0
		1986	42	2	28	2	13	0	1	0
	計	1987	99	19	54	10	42	7	3	2
		1986	113	14	51	7	55	5	7	2
代表者平均年齢	1987	42.3	42.6	33.7	33.0	48.4	47.6	50.9	51.0	
	1986	43.3	44.2	32.9	33.6	48.2	49.3	48.8	50.8	

* F/Fは海外在住の外国人, F/Jは日本在住の外国人, J/Fは海外在住の日本人を示す。

** P.24 脚注参照

助成結果の特徴を簡単に述べると、次のとおりである。

- ・研究種別毎の助成件数を前年度と比較してみると、第Ⅰ種が22件から27件に、第Ⅲ種が11件から15件に増えたのに対して、その分、第Ⅱ種が30から26件へと減少した。第Ⅱ種研究は、申請数に対する採択率においても最も厳しい結果になっている（採択率6.3%）。
- ・第Ⅰ種研究については、27件中6件が外国の研究者、4件が外国にいる日本の研究者となっている。ほとんどが大学等に所属する専門の研究者であるが、フリーの写真家や小学校の教師、民間の団体に所属する者などの専門研究者以外の者も幾らか含まれている。
- ・第Ⅱ種研究については、26件中16件が国際共同研究であるが、今年度は中国（4件）や韓国（3件）との共同研究が多いのが特徴的である。いずれもそのうち2件は代表者が中国または韓国の研究者である。また、これまでに成果を上げた助成プロジェクトの新たな展開として計画されたものが3件（II-073, 160, 373）含まれているのも本年度の特徴といえよう。
- ・第Ⅲ種研究についても、15件中8件と国際共同研究の比率が高い。2国間だけでなく数か国の共同研究も幾つか含まれている。

助成研究報告会は、今年度は次の1回しかもてななかったが、初めての試みとして、第Ⅰ種研究交流会を開催した。これまでに個人奨励研究を受けた研究者のその後の研究状況を報告し合い相互交流を図るものである。

第24回研究報告会「近代日中交流史の諸相」

(1988年3月12日 於、東京六本木・国際文化会館)

第1回第Ⅰ種研究交流会

(1987年4月12日 於、東京六本木・国際文化会館)

※昨年度の年次報告では応募件数778件、助成件数64件となっているが、これには特別研究1件を含んでいる。今年度から特別研究助成を別枠としたので、それに合わせて、ここでは特別研究を除いた数値を使用する。表中の数値も同様。

I-1. 第I種研究(個人奨励研究)

助成対象一覧

助成番号下の(継2)は継続2回目を示す。無記入は新規。
助成番号下の()は研究者の国籍を示す。無記入は日本国籍。

助成番号	研究題目 代表研究者 所属	助成金額 (円)
1 87- I-001	思考と行動における言語表現とその談話構造分析 ——マレー語に根存する言語体系の談話構造的分析—— 佐藤 宏文 マラヤ大学マレー研究科 院生 26歳	1,800,000
2 87- I-007 (継2)	北極圏油田開発により変貌しようとするカリブーの季節移動とその狩猟生活に関わる アラスカ原住民の研究と記録 星野 道夫 写真家 35歳	2,000,000
3 87- I-009	有機農業運動の展開と農村コミュニティ形成に関する実証的基礎研究 青木 辰司 秋田県立農業短期大学 講師 35歳	1,800,000
4 87- I-017	近世農村社会における「間引き」・墮胎の心性史的研究 ——土佐藩領内を中心に—— 太田 素子 高知大学教育学部 講師 39歳	600,000
5 87- I-044	土地法制の総合的検討 ——総合的都市整備モデル条例の制定へ向けて—— 宇賀 克也 東京大学法学部 助教授 32歳	1,900,000
6 87- I-048	アメリカにおける「都市型」連邦補助金の展開と都市財政 川瀬 憲子 大阪市立大学経営学研究科 院生 26歳	1,400,000
7 87- I-052	バングラデシュのイスラム教徒村落社会における伝統的産婆Daiと近代化 西川 麦子 大阪大学人間科学研究科 院生 26歳	1,900,000
8 87- I-075 (インドネシア)	日本の家族の食生活における主婦の役割に関する研究 ——インドネシアの栄養改善計画立案のために—— ワティ・イフワヌディン インドネシア大学医療人類学研究科 院生 37歳	1,400,000
9 87- I-109	人間における育児のあり方に関する比較行動学的研究 ——哺乳および離乳における母子相互作用を中心として—— 根ヶ山 光一 武庫川女子大学文学部 講師 36歳	1,700,000
10 87- I-116	中南部アフリカ・ウッドランド帯、焼畑農耕民における伝統的生活様式の変容と近代化 の構造——常畑化をめぐって・とくに女性の視点から—— 杉山 祐子 筑波大学歴史・人類学研究科 院生 29歳	1,900,000

助成番号	研究題目 代表研究者 所属	助成金額 (円)
11 87- I -144	日本の対米黒字は本物か——社会統計学的見地からの一考察—— 橋本 勝 京都大学経済学研究科 院生 32歳	1,800,000
12 87- I -161	動物の行動に対するカルシウムの効果：カルシウムによる脳内神経伝達物質合成の基礎的・応用的研究 須藤 伝悦 筑波大学医学系 文部技官 35歳	1,700,000
13 87- I -185	減農薬稲作による地域農業再生のための実践的研究 中村 修 九州大学農学研究科 院生 30歳	1,300,000
14 87- I -191	ミクロネシアの還流的人口移動と多居住地的世帯戦略——カロリン群島オレイ環礁のライフ・ヒストリー・マトリクスにもとづく調査研究—— 柄木田 康之 筑波大学歴史・人類学研究科 院生 32歳	1,700,000
15 87- I -220 (ギリシア)	オーストラリア日系企業の経営管理——日本化か現地化か—— エヴァゲロス・デドウシス グリフィス大学経営学部 助手 36歳	1,600,000
16 87- I -226	日米ワーカーズ・コレクティブの比較研究 ——ポスト産業社会へむけての新しい共同事業体の可能性—— 古沢 広祐 科学史・科学教育研究所 所員 37歳	1,600,000
17 87- I -227 (中国)	企業内における人事評価制度の日中の比較 林 新生 九州大学経済学研究科 院生 37歳	1,000,000
18 87- I -231 (オランダ)	日本の祭りに関する文化人類学的研究 ——新潟県佐渡・大川部落のフィールドワーク—— ネリー・コーイ 新潟大学人文学部 研究生 32歳	1,500,000
19 87- I -236 (西ドイツ)	大気汚染物質の積雪中における反応挙動と融雪時の環境影響 ——重金属類の環境循環を中心として—— フランツヨーゼフ・エッカー 金沢大学自然科学研究科 院生 30歳	1,400,000
20 87- I -257	米国定住日本人の意識とライフ・コース ——日本人の国際化の可能性を探るケース・スタディとして—— 池上 英子 ハーバード大学社会学科 院生 35歳	1,800,000
21 87- I -259	し尿の脱窒処理施設で発生しているガス成分の検索とそのガス化機構に関する研究 ——生体に及ぼす影響に関する予備試験—— 村嶋 君代 熊本県衛生公害研究所 主任技師 40歳	1,200,000
22 87- I -266	奄美・徳之島の民俗音楽における伝統と変化の研究 ——音楽文化の創造性の原点を考える—— 酒井 正子 一橋大学社会学部 助手 40歳	1,600,000

助成番号	研究題目 代表研究者 所属	助成金額 (円)
23 87- I -269	天然記念物ニホンヤマネの保護のための生存条件の研究とそれによる森林保全への応用 および自然保護教育のための教材化 湊 秋作 町立熊野川小学校 教諭 35歳	1,600,000
24 87- I -271	アメリカ進出企業の現地人教育訓練に関する研究 ——異文化接触の視点から—— 渡辺 直登 南山大学経営学部 助教授 36歳	800,000
25 87- I -297	後期高齢者の各種居住形態とケア・サービスの現状分析 ——スウェーデン南部の一地方自治体を取り上げた事例研究—— 外山 義 スウェーデン王立工科大学 研究員 37歳	1,700,000
26 87- I -299	人間居住環境創造における企業参加の可能性 ——英国グランドワーク・システムのわが国への適用可能性に関する研究—— 小山 善彦 グランドワーク・ファウンデーション 研究生 35歳	1,800,000
27 87- I -311 (アメリカ)	『甘え』依存性に関する比較研究：日本人とアメリカ人の発想法 パトリシア・マクドナルド・スコット 統計数理研究所 外来研究員 38歳	1,800,000
小 計 (第I種研究)	27 件	42,300,000

研究概要

1. 思考と行動における言語表現とその談話構造分析

(佐藤 宏文)

ある民族の文化体系をとらえる場合、その思想の分析に主眼をおくのが一般的である。しかし当研究者は、言語そのものの分析から特定民族の思考体系をとらえる方法を試みようとしている。

当研究は、その一環としてマレー人社会に焦点を当て、過去の言語体系がマレー人の思考の枠組をしぼり、依然としてマレー的な発想の類型に取り込んでいる様相を解明しようとする。すなわち、小中学生を対象とした談話文法の解析により、マレー語のなかに、発想を導く文法のあることを解き明かすものである。

2. 北極圏油田開発により変貌しようとするカリブーの季節移動と

その狩猟生活に関わるアラスカ原住民の研究と記録(星野 道夫)

アメリカ最後のフロンティア、アラスカは、北極圏最大級の油田発見により、大きく変貌しようとしている。その開発をめぐる大論争は、人類が直面している環境問題の一つのシンボルであったが、結果として開発の方向に向かいつつあるのが現状である。

当研究は、開発によって大きな影響を受けるカリブーの季節移動と、その狩猟を生業とするエスキモーの生活を、主に写真を用いて追跡するものである。一昨年度の助成でカリブーの季節移動については多くの記録を得たので、今年度はエスキモーの生活の記録に重点をおく。

3. 有機農業運動の展開と農村コミュニティ形成に関する実証的基礎研究

(青木 辰司)

有機農業運動は、農業生産物を生産・消費する人間の生命保全という、人間にとっての根源的な価値に基づくものであり、生産者と消費者、および人間と環境との「共生運動」である点に重要な意義がある。

当研究は、消費者サイドから問題を対象化させることの多い有機農業運動を、生産者サイドからとらえ直そうとするものである。市場経済原理の浸透する現在、自らの生命保全と同時に、対価手段としての農業生産の意味を越えた「共生運動」が、農民や農村社会にとっていかなる意義を有するのかを実証的に明らかにしようとしている。

4. 近世農村社会における「間引き」墮胎の心性史的研究——土佐藩領内を中心に——

(太田 素子)

徳川後半期の人口停滞現象は、従来、うち続く天災・飢饉による人口減少と説明されることが多かった。しかし近年、歴史人口学は、宗門改帳などの統計的処理に基づいて間引きや墮胎の実証に迫り、それらが近代化を促進するような生活向上意欲と家族計画の意識に裏打ちされ実行された、という議論も生まれている。

当研究は、こうした歴史人口学および社会経済史研究の提起を踏まえて、土佐藩領内の文章史料によって、間引きの動機と選択的に残して育てた子供たちへの教育意識のありようを探ろうとするものである。

5. 土地法制の総合的検討——総合的都市整備モデル条例の制定へ向けて——

(宇賀 克也)

土地問題は、現在、わが国の内政の最重要課題といえよう。都市圏における地価暴騰は、内需拡大や社会資本の充実を著しく困難にしているばかりでなく、生活の基盤である住宅の取得・維持すら難しい事態にしている。

当研究は、この土地問題を解決するために、主として法律学の視点から、どのような制度の確立・運用が必要かを検討しようとするものである。その際、単に地価対策だけでなく、良好な都市環境の整備を可能にする方策を、併せて検討する予定である。

6. アメリカにおける「都市型」連邦補助金の展開と都市財政

(川瀬 憲子)

1960年代から70年代にかけて、アメリカ財政史上かつてみられなかったほどの重大な構造的変化が引き起こされた。つまり従来の「農村型」補助金に代わって「都市型」補助金が急増し、いわゆる「補助金依存型都市」が形成され、また一方では1975年のニューヨーク市財政破綻に象徴されるような大都市財政危機が深刻化していた。

当研究は、連邦補助金政策のこうした展開が、都市財政にいかなる影響を及ぼすのかを解明し、都市財政危機の醸成要因を探りつつ、その解決策を模索することを課題としている。

7. バングラデシュのイスラム教徒村落社会における伝統的産婆 Dai と近代化 (西川 麦子)

バングラデシュは1984年現在、672人/km²の人口密度を抱え、貧困化が進み深刻な人口問題に直面している。村落部では従来どおりの伝統的産婆が行われている一方で、政府による家族計画の普及が図られている。

当研究では、農村での長期住み込み調査を行い、村落社会の総合的理解を深め、伝統的産婆 Dai に焦点をあて、性や出産をめぐる習俗についての人類学的研究を行う。また、政府による家族計画の普及、海外からの援助活動が人々の生活にどのような変化をもたらしているか、Dai 研究を通じて観察し考察していく。

8. 日本の家族の食生活における主婦の役割に関する研究 (ワティ・イフワスディン)

インドネシアでは15年前から国民栄養改善努力計画が実施されているが、十分に成功していない。国民の栄養摂取量はそれぞれの食生活習慣によって決まるが、日本人の栄養摂取量 1日平均2,515cal に対し、インドネシア人は平均1,445cal にすぎない。

当研究は、日本の家族の食生活における主婦の役割をはじめ、社会文化環境、食物に関する伝統的な考え・教育・知識、経済力の食生活への影響を検討し、また国民の栄養改善に対する政府の役割を調査し、将来のインドネシアの国民栄養改善計画に役立てようとするものである。

9. 人間における育児のあり方に関する比較行動学的研究 (根ヶ山 光一)

他の動物に比べると、人間の育児様式の多様性は際立っている。しかしながら、それらを通して人間本来の育児のあり方を問うことは可能であるし、またそれからの逸脱がどこまで許容されるかを探ることは、人間社会の現状と今後を考えるうえできわめて重要である。

当研究は、上記の問題を究明するため、母乳哺育(自然卒乳・非自然卒乳)や人工乳哺育のさまざまな育児様式にわたって、その哺育・離乳やその後の子供の行動発達について、比較行動学的に明らかにしようと試みるものである。

10. 中南部アフリカ・ウッドランド帯、焼畑農耕民における伝統的生活様式の変容と近代化の構造 (杉山 祐子)

中南部アフリカのザンビア北東部に住むベンバ族は、広大なウッドランドを背景とした焼畑農耕によって自給用食物を確保しながら、換金作物の常畑栽培などで貨幣経済の浸透と政府の近代化政策に対応してきた。しかし、近年いっそう急激な近代化政策によって焼畑への圧力が強まり、ベンバ社会全体にも揺らぎがみえ始めている。

当研究は、伝統的焼畑農耕を中心とした諸生業の社会生態学的特性と位置づけを明らかにし、近代化がベンバ社会に与えた影響を多面的に検討して、問題の複合的構造を解明することを目的としている。

11. 日本の対米黒字は本物か——社会統計学的見地からの一考察—— (橋本 勝)

急激な円高と内外の抑制策によって最近ようやく鎮静化してきたものの、ここ数年来続いた貿易黒字の急増は、日本経済に大きな影響を及ぼし、産業間の極度の不均衡の進展に伴う失業率の急上昇といった深刻な事態を生み出している。しかしわれわれは、この日本の貿易黒字をあまりにも「うのみ」にしていないだろうか。

当研究は、従来、経済学的あるいは政治学的立場からだけ論じられてきている日米間の貿易不均衡問題に対し、社会統計学的見地から統計自体を議論の中心にもってきて、その正確性・信頼性を再検討するものである。

12. 動物の行動に対するカルシウムの効果：カルシウムによる脳内神経伝達物質合成の基礎的・応用的研究 (須藤 伝悦)

近年の急激な社会環境の変化は、ストレスを増大させ二次的にアルコール依存症患者やてんかん症患者などを増加させている。さらに、高血圧症などの老人病の増加も深刻な問題になっている。これらの現代病の予防と治療のためには、中枢神経系の研究が重要になっている。

当研究では、こうした現代病を動物の行動をとおして神経科学的に分析する。研究者は、すでに脳内の神経伝達物質の合成系がカルシウムによって調節されていることを見いだしているが、このメカニズムを用いて、上記の病気を基礎的・応用的に研究することとしている。

13. 減農薬稲作による地域農業再生のための実践的研究

(中村 修)

単位面積当たりの農薬使用量は世界中で日本が一番多い。日本で毎年使用される農薬は60万t以上で、最大の環境汚染源でもある。これに対し、消費者運動・有機農業運動が一定の成果を上げてきたが、あくまで消費者中心の運動でしかなく、農業現場を変革するには至っていない。

当研究は、農薬を多投せざるを得ない農民の立場に立ち、無理なく農薬使用を減少しようとする試みである。減農薬によって、地域ぐるみ・農協ぐるみで農薬使用を半減する方法を明らかにし、農業近代化によってもたらされた農薬大量使用状況を変革する手法を確立する。

14. ミクロネシアの還流的人口移動と多居住地的世帯戦略

(柄木田 康之)

近年の第三世界の人口移動は、最終的には起点にもどっていく還流的人口移動を特徴としている。還流的人口移動は、世帯が社会の近代・伝統部門に同時に参与するため、その成員を多様な場所に分散するという多居住地的世帯戦略の基盤となるものである。

当研究は、ライフ・ヒストリー・マトリクスに基づいて、世帯史を再構成することにより、ミクロネシアの還流的人口移動を把握し、世帯による成員移動の構造化を明らかにすることによって、地域の社会構造と社会・経済体制変換の相互作用を分析する。

15. オーストラリア日系企業の経営管理——日本化か現地化か——

(エヴァゲロス・テドウシス)

日本はすでにオーストラリアにとっての重要な資本源となっているが、将来は日本からの投資はますます増え、日系企業がオーストラリア社会できわめて重要な役割を果たすことになると思像される。しかし、同国における日系企業の経営については、ほとんど研究されていない。

当研究は、オーストラリアの日系企業が、日本の経営管理上の慣行をどのような場面で適用し、どのような場面で適用しないかを調べ、その理由を考察するものである。研究者は日本での企業就業経験をもっているので、インタビュー等も適確に進められるものと思われる。

16. 日米ワーカーズ・コレクティブの比較研究

(古沢 広祐)

ポスト産業社会を目指して、働く主体のあり方や労働組織のあり方に対する問い直しが生まれつつある。特にアメリカでは、1970年代に草の根の市民運動の事業体やラディカルな協同組合のなかから、より平等で民主的な労働や組織のあり方を目指すワーカーズ・コレクティブが生まれた。日本においても最近、特に若者や女性などが中心となって同様の活動が展開し始めている。

当研究は、日米の比較を通して、ポスト産業社会における労働や組織のあり方について、ワーカーズ・コレクティブに着目し比較研究するものである。

17. 企業内における人事評価制度の日中の比較

(林 新生)

人事評価制度は企業経営の基礎であり、企業内文化の重要な一側面でもある。日本的経営の基本的な特徴も、雇用・報酬・昇進など、人事評価に関するものが多い。日本企業の中国等への海外進出は今後とも増大すると思われるが、その企業経営が現地地で発展するためには、相互に相手国の人事評価制度を理解する必要がある。

当研究は、日本留学中の中国人研究者の目で、日本と中国の企業、中国における日中合弁会社および日本100%出資子会社を対象に、現在の人事評価制度および慣行を調査し、比較検討するものである。

18. 日本の祭りに関する文化人類学的研究——新潟県佐渡・大川部落のフィールドワーク——

(ネリー・ユーイ)

これまで多くの西欧の研究者が、日本の社会・文化に関心を持ち、その調査研究を試みてきたが、民俗宗教の領域に関しては、あまり行われてこなかった。民俗宗教としての祭りは、都市・農村を問わず広く存在し、かつ歴史的・政治的・経済的・社会的な意味と機能を集約的に備えているから、その研究は、日本文化理解のためにも大きな意味をもつことになるだろう。

当研究は、以上の観点から、佐渡の1村落の年間を通じての祭りの展開をインタビューと参与観察によって記録し、生活における意味と機能を分析するものである。

19. 大気汚染物質の積雪中における反応挙動と融雪時の環境影響 (フランツヨーゼフ・エッカー)

降雪中に含まれる大気汚染物質は、積雪の物理的状態変化に伴って、種々の化学変化や物質移動を起こし、短期間のうちに起こる融雪時には、非常に複雑な溶出現象を伴ってまとまって環境中に放出される。このような現象の解明は重要であるにもかかわらず、降雨の場合と異なり、その詳細はいまだに十分明らかにされていない。

当研究は、大気汚染物質として重金属類に着目し、石川県地方における降雪様式の特徴を生かしたフィールド調査に基づいて、積雪および融雪水の酸性化や毒性に関する化学的、物理的挙動の解析を試みるものである。

20. 米国定住日本人の意識とライフ・コース (池上 英子)

近年、アメリカに定住している日本人・日系人のなかには、戦前の農業移民等の日系移民史の角度からは測れないライフコースを取る人が多い。これらの、日本人のアイデンティティを保ちながらアメリカ社会でプロフェッショナルとして定着している人たちは、「みえない国際化した日本人」といえるのかもしれない。

本研究では、以上のような視点から、二世、三世ではなく、日本企業の短期滞在社員でもないアメリカ定住者で、日本人のアイデンティティをもつ人を対象に、インタビューや質問紙等によりその意識とライフコースを探る。

21. し尿の脱窒処理施設で発生しているガス成分の検索とそのガス化機構に関する研究 (村嶋 君代)

低希釈・生物学的脱窒素法は、し尿中の窒素除去技術として定着しつつあり、最終産物は N_2 ガスだと考えられている。しかし、実施で褐色ガス(NO_2 を検出)が大量に発生しているケースがあり、し尿の高負荷処理については、まだ多くの未解明部分があると思われる。

当研究は、まず、し尿処理施設を対象として運転状況変動と発生ガス組成変化を追試し、次に条件をコントロールしながら窒素・炭素除去速度と発生ガス組成変化を測定し、同時にこれらの最終産物が将来における環境汚染物質となる恐れがないかどうかを検討する。

22. 奄美・徳之島の民俗音楽における伝統と変化の研究 (酒井 正子)

本土の民謡が発生現場を断ち切れ、正調化の途をたどって久しい。音楽文化の創出には、洗練の一方で絶えず自生する原初的エネルギーが不可欠である。その意味で、豊かな即興性・創造性を保持する奄美・徳之島の民俗音楽は、有効な視点を提供するように思われる。

当研究は、ダイナミックな音楽的枠組みを支える「歌掛け」の口承伝統の実相と仕組みを現地調査によって明らかにし、急速に進行する現代の変容を、カセット・ビデオ等の新技術との関連を重視して実証的にとらえ、将来に向けての多様な伝承の可能性を探るものである。

23. 天然記念物ニホンヤマネの保護のための生存条件の研究と森林保全への応用・自然保護教育への教材化 (湊 秋作)

ヤマネは、樹上性の小さな哺乳類で、日本特産で1属1種のため天然記念物となっている。しかし、保護のための研究と対応はなきに等しく、保護するために生存条件を早急に解明する必要がある。それはまた森林保全の指針作りにも繋がり、自然保護教育の効果的な教材も提供するであろう。

以上のような観点から、当研究ではヤマネの行動範囲をはじめ、食べ物の種類と量やその食べ方、巣を中心とした行動・移動・繁殖行動・冬眠、ヤマネを取り囲む生物や無生物環境について実態を明らかにする。

24. アメリカ進出企業の現地人教育訓練に関する研究——異文化接触の視点から—— (渡辺 直登)

海外にある日系企業は、日本の経営風土のなかで形成されてきたさまざまな経営制度を、異なった経営的伝統をもつ国で展開するため、現地の従業員や進出先のコミュニティとくわめて日常的な文化的接触を行っている。

当研究は、個人ではなく企業という一組織が異なった文化に接触した場合、どのように現地の社会・文化に適応してゆくのかを、現地人従業員の教育訓練を通じて明らかにしようとするものである。特に、訓練状況における訓練者・被訓練者の心理的力動に焦点を当て、企業の異文化接触の問題に切り込む計画である。

25. 後期高齢者の各種居住形態とケア・サービスの現状分析 (外山 義)

高齢社会での最も切実な問題として、後期高齢者の医療・介護の問題がある。すでに1950年に老年人口比率10%を超えたスウェーデンでは、今日、医療・介護のニーズを俄に高めるこの後期高齢者の増加への対応が、高齢者住環境整備を進めてゆくうえでの基本課題となっている。

当研究は、老年後期にさしかかり心身機能の低下が著しくなった高齢者が、通常住宅から各種ケア付住居そして慢性病棟に至るさまざまな居住形態のなかで生活をこなしてゆく実態を、スウェーデン南部の1地方自治体の事例を基に、明らかにするものである。

26. 人間居住環境創造における企業参加の可能性

(小山 善彦)

最近わが国でも住民主体の環境創造の気運が高まっているが、イギリスでは「グランドワーク」と称される新しい環境創造のしくみが動き出している。専門家集団としての公益トラストが中心となり、住民・企業・自治体と連携しながら具体的プロジェクトを推進するもので、なかでも企業が重要な役割を担っている。

当研究では、このグランドワークのわが国への適用可能性をテーマに、グランドワーク導入の政治・社会的背景、地域協力の実態と企業の役割、企業参加の動機、トラストの法的性格と機能を分析する。

27. 「甘え」依存性に関する比較研究：日本人とアメリカ人の発想法 (パトリシア・マクドナルド・スコット)

「甘え」は日本独特のものとみられているが、最近はその普遍性も注目されつつある。特にアメリカでは「対人依存性」概念との類似性が注目されている。しかし、両国でのこれら概念に関する実証的比較研究はまだない。

当研究は、それぞれの社会の状況を考慮した質問群を利用し、新しい動的な方法を適用しながら、その回答パターンを分析し、依存性の現象のなかにひそむ意識構造の共通点と相違点を明らかにしようとするものである。調査対象者は、両概念が精神衛生と深く関係するところから、両国の抑うつ障害の患者とその家族としている。

I-2. 第II種研究（予備的研究）

助成番号上の※印は共同研究を示す。

助成番号下の { (継2)は継続2回目を示す。無記入は新規。
()は代表研究者の国籍を示す。無記入は日本国籍。

助成対象一覧

助成番号	研究題目 代表研究者 所属	助成金額 (円)
28 87-II-006* (韓国)	韓国における失語症患者言語機能診断・評価・治療法の開発研究 ——日本の臨床的方法の適用性の検討を中心に—— 朴 惠淑 延世大学校医科大学附属病院 研究講師 41歳 他3名	2,800,000
29 87-II-007	アイヌ語を体系的に学習するための「日本語—アイヌ語辞典」編纂にむけての予備的研究 萱野 茂 アイヌ語辞典編纂委員会 代表 61歳 他2名	2,200,000
30 87-II-029*	動物の脳活動のゆらぎ特性から人間行動の原理を学ぶ 山本 光璋 東北大学医学部 助教授 47歳 他3名	2,800,000
31 87-II-031* (イスラエル)	日本文化の中の漂泊と漂泊者：漂泊と定着の両義的な関係 ヤコブ・ラズ テルアビブ大学芸術学部 準教授 43歳 他2名	2,600,000
32 87-II-048	遺伝子紋（DNAプリント）に対する医学的・社会的要請と寛容度に関する研究 上田 國寛 遺伝子紋研究会 代表 47歳 他4名	2,300,000
33 87-II-073* (中国)	在日華僑（華人）の中日文化交流への貢献に関する総合的研究 ——福建華僑（福州幫）を中心として—— 唐 文基 福建師範大学歴史系 副教授 47歳 他5名	2,700,000
34 87-II-075* (韓国)	日本植民地統治理念の研究 ——朝鮮総督府中枢院調査資料に現われた文化政策の考察—— 崔 吉城 日本文化研究会 代表 47歳 他9名	3,000,000
35 87-II-096*	韓国経済発展に関する歴史的研究 ——日本近代経済史との比較分析を通じて—— 中村 哲 韓国近代経済史研究会 代表 57歳 他13名	2,800,000
36 87-II-123 (継2)	ストーマケアに関する研究——人工肛門・人工膀胱保有者の日常生活上多発するスキン トラブルの対策マニュアルの作成—— 高屋 通子 互療会 顧問医 50歳 他3名	2,300,000
37 87-II-147*	日本における芸術への助成システム確立のための基礎研究 市村 作知雄 山海塾 事務局長 38歳 他8名	2,700,000

助成番号	研究題目 代表研究者 所属	助成金額 (円)
38 87-II-149	外国人労働者流入の経済的・社会的影響に関する実証的研究 花見 忠 上智大学法学部 教授 57歳 他9名	3,000,000
39 87-II-152	日本各地における老人の自立的ネットワーキングに関する基礎的研究 越谷 和子 毎日新聞社世論調査部 記者 55歳 他4名	2,000,000
40 87-II-154*	在日外国人の受療状況に関する研究 泉 明美 在日外国人の保健・医療研究会 代表 49歳 他5名	2,800,000
41 87-II-160*	西太平洋温帯島嶼における海岸植生—ミズナギドリ系の変遷 ——人為の影響と関連して—— 奥富 清 海岸植生—海鳥系研究会 代表 59歳 他12名	3,000,000
42 87-II-164*	ケア提供者である女性の健康状態とソーシャルサポート・ネットワークの国際比較 ——その予備的調査—— 南 裕子 ソーシャル・サポート研究会 代表 47歳 他9名	2,700,000
43 87-II-172* (コロンビア)	ラテンアメリカ主要国における対日イメージ調査に関する予備的研究 グスタボ・アンドラーデ 上智大学イベロアメリカ研究所 所長 56歳 他9名	2,600,000
44 87-II-240	現代社会における日本人の宗教的態度と生命倫理に関する予備的研究 ——生と死の教育に関する今日的課題を探る—— 丸山 久美子 盛岡大学文学部 教授 49歳 他7名	1,600,000
45 87-II-242	精神遅滞者の進路と就労に関する指導ハンドブック作成のための基礎的研究 松矢 勝宏 東京学芸大学教育学部 助教授 47歳 他7名	2,000,000
46 87-II-245	地域社会における在宅重症患者のターミナルケアのあり方とその組織的対応に関する研究 西 三郎 在宅ケア研究会 代表 60歳 他7名	1,800,000
47 87-II-269*	日系人及び日本人の循環器疾患とリスク要因に関する疫学調査 ——予備的研究—— 行方 令 日系慢性病疫学研究会 代表 44歳 他9名	3,000,000
48 87-II-287*	西南中国少数民族の歴史と文化 ——大瑤山に住む瑤族の音楽と神話についての日中共同研究—— 長谷川 時夫 ミテイーラ美術館 代表 39歳 他14名	2,700,000
49 87-II-302	幕末から明治期における医学諸制度形成過程に重要な役割を果たした人物の事跡ならびに その影響——池田謙斎、多仲間関係文書を中心に—— 酒井 シヅ 順天堂大学医学部 助教授 52歳 他9名	2,800,000

助成番号	研究題目 代表研究者 所属	助成金額 (円)
50 87-II-361 [*]	ペルー日系社会の実態調査——20年後の変貌—— 増田 昭三 東京大学教養学部 教授 59歳 他5名	3,000,000
51 87-II-373 [*]	アジアに於ける近代建築に関する基礎研究——現存遺産調査（中国）—— 藤森 照信 アジア近代建築史研究会 代表 40歳 他18名	3,000,000
52 87-II-389 [*] (中国)	中国都市地域における循環器疾患の疫学と予防対策についての予備的研究 ——日本における体験との比較を通して—— 李 天霖 北京医科大学公共衛生学院 教授 63歳 他7名	3,000,000
53 87-II-397 (継2)	凧による1,000m レベルからの空撮手法の開発と積雪領域研究への応用 室岡 克孝 日本カイトフォトグラフィー協会 会長 46歳 他2名	2,800,000
小 計 (第II種研究)	26 件	68,000,000

研究概要

28. 韓国における失語症患者言語機能診断・評価・治療法の開発研究 (朴 恵淑)

人口の高齢化現象に伴う老人病、特に脳卒中とその後遺症患者に対するリハビリテーション中、韓国で重要な問題になっているのは失語症に対する言語治療である。

当研究は、韓国における失語症患者の言語治療対策を確立するための第1歩として、①精神文化および言語構造面に類似性の高い日本の代表的検査である失語症鑑別診断検査（老研版）と標準失語症検査（SLTA）の韓国における適用可能性を検討し、②韓国版失語症検査法（試案Ⅰ）を作成した後、③本検査（韓国版試案Ⅰ）batteryの有効性・妥当性および問題点を検討する。

29. アイヌ語を体系的に学習するための「日本語—アイヌ語辞典」編纂にむけての予備的研究 (萱野 茂)

近年、アイヌ民族のなかに自らの母語であるアイヌ語を取りもどしたいという気運が盛り上がっている。またアイヌ以外にもアイヌ語を真摯に学ぼうとする学究が出てきている。にもかかわらずアイヌ語に関する文献資料は他分野に比べて非常に少なく、出版が切望されている。

当研究は、アイヌ語を完全に理解できる最も若い世代のアイヌである代表者を中心とした辞典の編纂であり、アイヌ語の普及の観点から、日本語—アイヌ語辞典の形態をとり、見出し単語ごとに例文を豊富に載せるなどの特徴をもっている。

30. 動物の脳活動のゆらぎ特性から人間行動の原理を学ぶ (山本 光璋)

抵抗体や半導体などの無生物界から、ヤリイカの巨大神経やネコの脳細胞などの生物界に至る広い範囲において、1/f ゆらぎ現象が見いだされ、その生物物理学的意義に興味をもたれている。

当研究は、この特殊なゆらぎのもつ脳生理学的な意義を解明し、併せて、そのなかから人間行動の原理を見いだそうと計画したものである。実験は、微小電極を埋め込んだネコの脳活動を、実験室内・野外等の条件下で記録し、脳細胞活動のゆらぎ特性と動物の行動状態との相関を明らかにするもので、日・独の国際共同研究である。

31. 日本文化の中の漂泊と漂泊者：漂泊と定着の両義的な関係 (ヤコブ・ラズ)

漂泊と漂泊者の概念は、日本文化のなかで重要な位置を占めている。定着・定住民の共同体からみた場合、漂泊者は〈異人〉であり、その深層には憧れと怖れという両義的な態度があると思われる。それはまた、日本人の外国人や帰国子女に対する態度にも共通するであろう。

当研究は、以上の観点から、日本文化（民俗・宗教・芸能・文学）に表れる漂泊と定着の関係を明らかにすることを目的として、記録や文学作品を渉猟し、従来の研究を再検討するとともに、現存する個人・組織の漂泊者に直接アプローチしてその実態を調べるものである。

32. 遺伝子紋（DNAプリント）に対する医学的・社会的要請と寛容度に関する研究 (上田 國寛)

近年目覚ましく進歩した組み換えDNA技術によって、ヒトの遺伝子解析が可能となり、その検査が日常化する日が目前に迫ってきた。これは、遺伝病や遺伝素因の予知・予防などの医学的恩恵をもたらす一方、DNAパターンによる個人分類、不治遺伝病の予告、親子関係の認否など、社会的な問題を惹起する危険をはらんでいる。

当研究は、この問題の重要性に鑑み、遺伝医学研究者と法学研究者がそれぞれの研究と情報交換および討論をとおして、遺伝子紋解析の必要度と許容度に関するコンセンサスを追求することを目指している。

33. 在日華僑（華人）の中日文化交流への貢献に関する総合的研究 (唐 文基)

福建省は広東省と並ぶ中国2大僑郷の一つであり、とりわけ福州地区は在日華僑第一の故郷である。これらの在日華僑は、20世紀初頭以来、日本に大量に渡来し、各地に分散していった。

当研究は、僑郷における実地調査と日本における実態調査を通じて、具体的に彼らがどのような背景をもって来日し生活基盤を築いてきたかを明らかにし、さらに、風俗・習慣・宗教が日本の社会に及ぼした影響と在日華僑が故郷の文化に果たした役割について、可能な限り調査する予定である。

34. 日本植民地統治理念の研究——朝鮮総督府中枢院調査資料に現われた文化政策の考察—— (崔 吉城)

朝鮮総督府が日本植民地時代に残した資料は膨大である。しかし、反日・親日などの民族感情や独立運動史を中心にみる韓国学者によって、きわめて否定的に扱われるか、あるいは無視されているのが現状である。

当研究は、いわば死角地帯に放置されているこれらの資料を、民族主義的な偏見を排除して客観的な立場から分析・検討する。したがって、植民地侵略に関する価値評価ではなく、その時代の資料の客観性と韓国研究史上の資料化の可能性を追求することが主目的である。その方法は、文献資料の検討と現地調査を主としている。

35. 韓国経済発展に関する歴史的研究——日本近代経済史との比較分析を通じて—— (中村 哲)

現在、韓国経済は世界的に注目されているが、その関心は1960年代以後の時期に限定されている。しかし、韓国はかつて植民地であり、また欧米と日本以外で最初に本格的な資本主義工業国になったなど、近代世界においてきわめて特異な道を歩んできている。

当研究は、このような韓国の経済発展を、日本と韓国の研究者が協力して、歴史学的手法で解明しようとする試みである。その方法は、第1に植民地時代を軸に、その前後の時代の連続面と断絶面を析出すること、第2に日本の近代経済史と比較分析を行うことである。

36. ストーマケアに関する研究

(高屋 通子)

近年、日本においても大腸疾患が急増し、人工肛門・人工膀胱保有者（オストメイト）が、欧米並みに増加している。自分の意志では調節できない排便・排尿を、オストメイトは、粘着剤つきの装具を常時皮膚に貼布して処理しているため、スキントラブルが高頻度に生じる。

当研究は、オストメイトが人並みの日常生活を送るには、ストーマ周囲皮膚の管理が重要な関わりをもつため、スキントラブルの対策を考えることを目的とする。昨年度の助成によって全国のオストメイトから得た情報を基に、対策マニュアルを作成するのが主な内容である。

37. 日本における芸術への助成システム確立のための基礎研究

(市村 作知雄)

芸術が本来的に〈価値〉の生産とは反している限り、芸術の成立には社会的な支えが不可欠である。日本における芸術創造の貧しさは著しく、戦後日本で生まれた芸術で、世界の水準として認められているのは、わずかに舞踏のみであろう。社会的な支えと芸術創造の関係は、アメリカのポップアート等の例でも明らかである。

当研究は、その相関関係を明らかにすることで、社会的支えの必要性を強く主張するとともに、そのシステムのあり方を探り、同時に、欧米では社会構造として組み込まれている非営利組織の調種も併せて実施する。

38. 外国人労働者流入の経済的・社会的影響に関する実証的研究

(花見 忠)

わが国が経済面で国際的地位を高めるに従って、人の国際交流も急増している。入国者の内容は、観光目的をはじめ、留学、会社・団体等への就職から、単身出稼ぎ、さらにはベトナム難民など多種多様にわたっている。今後、アジア近隣諸国からの労働者が流入すれば、その増加に伴って、社会・文化面でも少なからぬ摩擦と混乱が起きることが懸念される。

当研究では、外国人労働者入国の実態を明らかにするとともに、今後の望ましい対応策を研究することを目的としている。

39. 日本各地における老人の自立的ネットワーキングに関する基礎的研究

(越谷 和子)

いま日本各地に、少数ではあるが老人の自立的ネットワーキングが現出している。これは、国や地方自治体などが提供する“老いのメニュー”に対抗する老人自らの手による“老いの計画書”であると考えられる。

当研究は、これら老人の自立的ネットワーク活動の事例を収集し、質的分析を試みることによって老人の求める老後の生き方を探ることを目的としている。そのために、まず全国に散在するこれらグループにアンケート調査を実施し、そこから得られた情報に基づき約10の特徴的なネットワークを選び、参与観察・面接調査を行う。

40. 在日外国人の受療状況に関する研究

(泉 明美)

わが国の急速な国際化に伴い、来日する外国人は増加の一途をたどっている。昭和61年の入国者は約210万人で10年前の3倍に達している。これらの外国人が疾病に罹患した際、より良い医療が受けられることは緊要である。

当研究は、これら在日外国人の疾病罹患、受療状況、受入れ側医療態勢、法的問題等の現状を把握し、言語、生活慣習、文化的・社会的背景等を含め問題点を分析する。これらの基礎調査を踏まえ、外国人が十分な医療を受けられるための態勢、例えば、外国人医療のネットワーク化等の整備・実現に向けて予備的調査研究を行う。

41. 西太平洋温帯島嶼における海岸植生—ミズナギドリ系の変遷—人為の影響と関連して— (奥富 清)

自然の保護・利用を考えるためには、人間の自然への歴史的影響の解明がまず第1に重要である。特に海洋に接する海岸生態系は、資源が豊富であったために古代より人間が集中し、現代においても最も改変しやすい地域となっている。

当研究は、人為の影響による海岸生態系の変貌を、同じ温帯島嶼に位置しながら風土・歴史・文化・産業を異にする日本・タスマニア・ニュージーランドの3地域を取り上げ、比較解析するものである。植生学、鳥類生態学、自然人類学等の多領域にわたる総合研究である。

42. ケア提供者である女性の健康状態とソーシャルサポート・ネットワークの国際比較 (南 裕子)

ソーシャルサポートのあり方は、人々の健康状態に影響を与えるといわれている。職業の有無にかかわらず、女性は多くの役割を一生の間に担い、かつ家庭のなかにおいて、第1義的なケア提供者の役割を取らざるを得ない状況におかれている。

当研究は、家庭において老人と小児のケアを行っている女性を調査対象として、彼女たちの健康状態に影響を及ぼすと考えられるソーシャルサポート・ネットワークの機能と構造を探求し、日本、アメリカ、イスラエルの実状と比較検討するものである。

43. ラテンアメリカ主要国における対日イメージ調査に関する予備的研究 (グスタボ・アンドラーデ)

日本と中南米諸国の関係はきわめて友好的である、というのが従来からの定説であるが、同地域の対日イメージについて本格的調査が行われたことはなく、最近では日本に対する失望・反感を招く事件も発生している。

当研究は、現段階で対日イメージを把握しておくことが、今後の関係を発展させていくうえで不可欠であるとの認識に立ち、同地域7か国の研究機関との協力によって総合的な調査実施に向けての予備的作業(国内・現地研究者との協議、1か国での試験調査実施等とおしてのアンケート方法・内容の検討)を行うものである。

44. 現代社会における日本人の宗教的態度と生命倫理に関する予備的研究 (丸山 久美子)

近代医学の目覚ましい技術的發展とともに、人類の生存に関する生命倫理の諸問題がたえず論議され、安楽死、遺伝子操作、人工受精などの賛否について大きく取り上げられるようになり、同時にターミナル・ケア、ガンの病名告知、脳死、生と死の教育、ホスピス病院の設立などの新しい学問分野に人々の関心が集まっている。

当研究では、日本人青年の死生観の形成過程と生命倫理の関係について詳細に分析する。生死に対する学際的研究であるサナトロジーの基礎となるのは死生観の形成要因で、各人の宗教的態度がその基底となるからである。

45. 精神遅滞者の進路と就労に関する指導ハンドブック作成のための基礎的研究 (松矢 勝宏)

このたび身体障害者雇用促進法が改正され、雇用率制度の適用をはじめとして精神遅滞者の就労援助の拡充が図られることになった。この法改正の目的を達成するためには、精神遅滞者の進路の検討から就労に至るまでの包括的なサービス体系の確立が望まれる。

当研究は、このようなサービス体系の確立に資するような進路と就労に関する指導ハンドブックを作成することを目的とし、そのために必要な基礎的調査と資料収集を、職歴的なプロジェクトチームを組織して実施するものである。

46. 地域社会における在宅重症患者のターミナルケアのあり方とその組織的対応に関する研究 (西 三郎)

医療技術の進歩に伴い、重症患者の在宅での療養が可能となり、終末期またはその近くまで在宅を希望する事例がみられている。そのような患者を在宅でケアするには、診療、看護、介護を含むチームによる医療が必要となり、地域に組織的な対応ができる体制が求められる。

当研究は、職歴的な研究会を組織し、在宅重症患者のターミナルケアの実践を通じて、医学、保健学、社会福祉学に加えて法学の立場から分析・検討を行い、理論的・実践的な在宅におけるチーム医療と、それを支える地域における組織のあり方を明らかにする。

47. 日系人及び日本人の循環器疾患とリスク要因に関する疫学調査——予備的研究—— (行方 令)

1985年以来行われてきたシアトル在住の日系人を対象とする健康習慣調査では、男性の有病率が女性に比べてほとんどの慢性疾患において高く、また日系人男性が日本人や白人より高血圧症、糖尿病等に高い有病率を示し、動脈硬化が異常に促進している可能性が推察された。

当研究は、その特異性の原因を解明し、リスク要因等に関連づけ、日米両国の動脈硬化予防に貢献するための予備調査である。脈波速度、血中コレステロール値等の諸検査の実施計画を練り、予備調査結果を本調査の裏づけにしようとするものである。

48. 西南中国少数民族の歴史と文化

(長谷川 時夫)

中国広西壮族自治区を中心とする地域には、いまなお大自然の懐で古い文化要素を守りながら生活を営む少数民族が住んでいるが、その歴史と文化を体系的にとらえる試みはいまだなされていない。

当研究は、大瑤山系に暮らす瑤族に集点を当て、男女の交際の基盤として生きている歌垣、および音の原点ともいえる古い型の楽器や音楽と深く結びついた各種の儀礼を主な対象に、その背景にある精神文化形成の根幹としての神話についても調査するものである。中国研究者との共同による新しい形の民間学術交流である。

49. 幕末から明治期における医学諸制度形成過程に重要な役割を果たした人物の事跡ならびにその影響

(酒井 シズ)

現在ほど医療社会における医師の役割等が社会から鋭く批判される時代はない。その批判を分析すると、医学教育に多くの問題があることが指摘されるが、その医学教育のルーツである幕末から明治期に至るわが国近代医学の形成過程については、いまだかなりの空白部分がある。

当研究は、池田謙齋東大医学部初代総理の子孫の家に謙齋の関与する多数の文書が発見されたことに端を発している。研究者らは、すでに二つの民間財団からの援助でそれら文書の整理に着手してきたが、今年度はさらに整理と解説を進め、目録の作成を目指している。

50. ペルー日系社会の実態調査——20年後の変貌——

(増田 昭三)

南アメリカにおける日本人の移住のなかで、ペルーにおけるそれは最も歴史が古く、移住者やその子孫は現在約8万人に達している。1989年は、移住90周年に当たり、ペルー日系人協会等が各種の記念事業を企画しているが、その最重要事業が日系人社会の実態調査となっている。

当研究は、以上の背景を踏まえ、現地研究者との協力によって、①移住の歴史、②一世のライフ・ヒストリー、③日系人社会の実態について調べるものであるが、1969年にも同様の調査が行われているため、その後の変貌を明らかにすることが可能である。

51. アジアに於ける近代建築に関する基礎研究——現存遺産調査(中国)——

(藤森 照信)

現在、アジアの諸国では急速な現代化によって多くの建築遺産が消滅しつつある。特に西洋の技術的・文化的背景をもつ近代建築の場合には、その評価も定まらず、問題が多い。日本では、当財団の助成による近代建築の全国調査やその後の体系的研究・啓蒙活動等により、保存・再利用の動きが活発になったが、アジア諸国でも同様の活動が必要になってきているといってもよい。

当研究は、そのような観点から、現地研究者との共同によって現存する近代建築遺産リストを作成することを目指し、まず中国についての調査に着手するものである。

52. 中国都市地域における循環器疾患の疫学と予防対策についての予備的研究

(李 天霖)

東アジアの農耕民族として、日中両国民の生活環境・生活習慣には共通点が多く、疾病構造のうえでも、脳卒中死亡率が虚血性心疾患死亡率よりも高い点で共通しており、欧米諸国のパターンとは異なっている。その点で、予防対策についても、日本のこれまでの地域保健活動の経験が生かされる可能性が大きい。

当研究は、予防対策の実践を前提とし、現地の実情に熟知した中国側研究者が自らの手で生活環境の実態を明らかにし、問題点を細部に至るまで解析し、疫学研究や予防対策に具体的資料を提供することを目的としている。

53. 凧による1000mレベルからの空撮手法の開発と積雪領域研究への応用

(室岡 克孝)

環境モニタリングの普及は、変化の著しい現代社会の重要な課題であり、観測対象に応じて必要時に手軽にデータの入手が可能な観測システムの開発が望まれている。

当研究は、『凧による空撮手法の開発と環境研究への応用』の研究成果に基づき、凧の性能の研究と改良により、従来は困難とされてきた高高度から広範囲の情報が収集可能なプラットフォームの開発を目的としている。具体的には、2～3kgの空撮システムと大気観測システムを1,000m上昇させて、積雪環境をモニタリングし、融雪流出予測と降雪機構を解明する。

I-3. 第III種研究（総合研究）

助成番号上の ※印は国際共同研究を示す。
 助成番号下の { (継2(3)(4)) はそれぞれ継続2(3)(4)回目を示す。
 { () は研究者の国籍を示す。無記入は日本国籍。
 助成金額上の () は助成期間を示す。無記入は1年間。

助成対象一覧

助成番号	研究題目 代表研究者 所属	助成金額 (円)
54 87-III-002 (継3)	「開かれた学校」のあり方をめぐる教育環境の分析（児童の行動分析を通して） 福富 護 杉十小学校環境研究会 代表 44歳 他9名	(2年) 4,800,000
55 87-III-003 [*] (継2) (フィリピン)	西太平洋地域における在来型沿岸漁業の比較研究 ——漁船と漁具を中心に—— エフレン・フローレス 東南アジア漁船研究会 代表 45歳 他8名	(2年) 10,000,000
56 87-III-005 [*] (継2)	フィリピン・ネグロス島における経済自立と国際協力の展望 西川 潤 日本ネグロス・キャンペーン委員会 副代表 51歳 他8名	4,700,000
57 87-III-011 [*] (継2)	ボゴール博物館と連帯して、インドネシアの自然史研究を推進する計画 吉井 良三 ボゴールと連帯する会 代表 73歳 他7名	(2年) 6,500,000
58 87-III-012 (継4)	インフルエンザ流行伝播に関する研究 ——地域流行の修飾因子について—— 由上 修三 前橋市インフルエンザ研究班 班長 62歳 他7名	(2年) 2,800,000
59 87-III-015 [*] (継2)	熱帯植物の農業活性物質の研究 ——インドネシアを中心として—— 山本 出 東京農業大学総合研究所 所長 59歳 他21名	(2年) 5,000,000
60 87-III-019 (継2)	医療におけるテクノロジー・アセスメントの研究 吉田 忠 MAT研究会 代表 47歳 他10名	(2年) 6,000,000
61 87-III-020 [*] (継3)	野生鳥類における重金属類の生体影響と非捕殺的モニタリング方式 本田 克久 野生鳥類保護研究会 代表 36歳 他7名	5,000,000
62 87-III-021 [*] (継2)	自然の一体性を重視した地域開発をめざす国際協力の研究 ——日本・ネパールにわたる実践を通して—— 川喜田 二郎 ヒマラヤ技術協力会 代表理事 67歳 他9名	(2年) 7,200,000
63 87-III-024 [*] (継2)	アメリカにおける日本製造企業の現地化をめぐる諸問題の日米共同研究 ——自動車および電機企業における「日本的経営」の現地適応可能性—— 安保 哲夫 日本多国籍企業研究グループ 代表 50歳 他12名	(2年) 11,500,000

助成番号	研究題目 代表研究者 所属	助成金額 (円)
64 87-III-025 [*] (継3)	人間関係の出発点としての母親のマザリーズと乳児の発生行動の関連 志村 洋子 埼玉大学教育学部 助教授 36歳 他11名	4,200,000
65 87-III-026 (継2)	元水銀鉱山労働者・家族の疾病史と生活史に関する労働衛生学的・社会学的研究 土井 陸雄 イトムカ水銀鉱山労働史研究会 代表 49歳 他9名	(2年) 5,800,000
66 87-III-027 (継2)	前近代の日本における職能民の社会と歴史 ——「職人歌合絵巻」「職人尽絵」「洛中洛外図」等の資料学的研究を通じて—— 網野 善彦 職人歌合研究会 代表 59歳 他5名	(2年) 4,400,000
67 87-III-028 [*] (継2)	東西技術移転の法的諸問題に関する国際共同研究 小田 博 東西技術移転研究会 代表 36歳 他7名	4,000,000
68 87-III-029 [*] (継3) (アメリカ)	母国語の拘束と国際相互理解——アラブ大学生の現地調査—— 黒田 安昌 連鎖的比較文化研究会 代表 56歳 他2名	8,500,000
小 計 (第III種研究)	15 件	90,400,000
<hr/>		
1987年度研究助成合計	68 件	200,700,000

研究概要

54. 「開かれた学校」のあり方をめぐる教育環境の分析 (児童の行動分析を通して) (福富 護)

1986年4月、杉並区立第十小学校は、学校防災公園の構想のもとに、地域に開かれた学校として社会教育との一体化を目指しながら、移転し、排気ガスや騒音、狭い校庭や暗い校舎といった劣悪な教育環境は大きく改善された。

当研究チームは、移転前2年間と移転後1年間の児童の行動観察を通して、教育環境の変化が児童にどのような影響を及ぼすのかを分析してきた。そして、単に物的環境だけでなく、人的・時間的環境との相互作用が児童の行動に作用していることを明らかにした。特に人的要因としての地域住民の影響は大きい。

こうした知見を踏まえて、当研究は、教育環境が児童の行動にどのような影響を及ぼし、地域社会といかに調和的にかつ効果的に機能していけるのかを、児童の行動や学校と地域との関わりについて追跡的な観察と記録を行いながら分析し、新しい『開かれた』学校教育施設のあり方に対する一つの提言をなそうとするものである。

55. 西太平洋地域における在来型沿岸漁業の比較研究 ——漁船と漁具を中心に——(エフレン・フローレス)

既報のごとく、東南アジア各地でみられるさまざまな様式の在来型沿岸漁業には、それぞれ顕著な地域性がある反面、共通部分も多い。この傾向は漁船船型、漁具形態において顕著で、特に東南アジア島嶼部のそれは太平洋諸島のそれとは明らかに異なっている。また例えば、「あおりいか」用の木製擬餌のように、スラウエシ島、フィリピン各地、そして沖縄県から和歌山県までの広範囲に、ほとんど同形式のものが分布している。

当研究では、これらの地域的相違と相似性をさらに明らかにするため、調査地域をパプア・ニューギニアまで拡大し、またフィリピン南部とスラウエシ、モルッカ諸島における種族による漁船漁具の相違について調査する。また、この地域に古くから伝わったアラブ、インドあるいは中国など外来文化の影響については、マレー半島を対象として調査する。

56. フィリピン・ネグロス島における経済自立と国際協力の展望 (西川 潤)

植民地時代以来の大農園による土地集中と、砂糖モノカルチャー経済が存続しているフィリピン・西ネグロス州では、近年の砂糖価格の低落に伴い、広範な失業と飢餓が発生している。他方で、アキノ新政権のもとでの土地改革政策は、この州においても、農民運動の高揚、地主層の拒否、軍の介入など、新しい政治的・社会的条件を生み出している。

当研究は、1986年2月に発足した日本ネグロス・キャンペーン委員会のNGO協力の一環として構想されたもので、昨年度の子備研究に引き続き、①砂糖経済と大農園構造の経済社会的分析、②飢えの現状の評価、③土地改革の遅延とその経済社会的影響の検討、を行うことにしている。同時に、地元NGOとの協力のもとに進めている農業研修センター等の活動を通じ、農民・都市スラム街住民の農業多角化や自立活動を支援する諸計画を立案し、貧困と飢えの状態からの住民自立の方向を探る。

57. ボゴール博物館と連帯して、インドネシアの自然史研究を推進する計画 (吉井 良三)

ボゴール博物館は、オランダ時代からの歴史をもつインドネシア自然史研究の中心になっていたが、現在の研究活動は必ずしも活発でない。将来を期待される少壮の研究者はいるものの、研究を進める方法的基礎の蓄積がなく、文献や研究資材が不足しているためである。

当研究は、このような状況を打開することを目的に代表者が現地を長期滞在し、必要な器材を整えて現地の研究者とフィールド調査を行い、資料の採集から論文執筆、成果の発表までをともに行うことによって、新しい研究態勢を確立しようとするものである。研究内容としては、土壤生物によってウォーレス・ラインとウェーバー・ラインを再検討することである。昨年度の子備研究では、必要な資材と文献をボゴール博物館に整備するとともに、ジャバのほか、バリとロンボクで土壤昆虫を採取した。本年度はさらにアンボン、ハルマヘラの調査を目指し、次年度に総合した結論を出す予定である。

58. インフルエンザ流行伝播に関する研究——地域流行の修飾因子について—— (由上 修三)

インフルエンザの流行状況は、年度・地域により、大きく異なる。また個人においても、感染しやすい人、しにくい人、また感染して重症化する人と、ほとんど無症状に経過する人とがある。さらに、年齢、職業、既往症などが強い影響を与える場合もある。そこで、こうした変動に寄与する因子を把握することにより、インフルエンザの被害を最小に抑制する方策を探ることが重要になる。

当研究チームは、1980年以来、インフルエンザ流行調査を続けてきた。今回の研究は、そのなかで得られた資料を、以上の観点から再吟味することから始め、同一児童を5年間追跡調査した際に得られた血清約6000検体を用いて同一ウイルス株による一斉測定を実施し、NP抗体その他の測定を行う。これによって、抗体保有状況と流行の関係、感染既往と再感染との関係、5年間の抗体価カーブからみた免疫持続、感染しても発病しない児童の免疫状態等が解明されるであろう。

59. 熱帯植物の農薬活性物質の研究——インドネシアを中心として—— (山本 出)

熱帯地域は潜在的に有用な植物の宝庫であるが、近年の有機化学の進歩を踏まえて、これまでの用途とは異なる資源の活用が考えられ、その一つとして、熱帯植物の農薬活性物質、すなわち病害虫、雑草といった有害生物の防除がある。

当研究は、インドネシアの熱帯植物について、新規植物の探索と興味ある生理・生態現象の発見、また害虫、病害、雑草、植物への効果の観察、さらに化学的基礎の解明、生理・生態活性物質の分離、同定、合成、構造改変、利用研究を現地研究者と協力して組織的に展開する。これにより、自然の制御機構を模倣した、環境への悪影響の少ない農薬を創製し、化学生態学の進歩に寄与することを目的とする。さらに共同研究を通して、発展途上国の研究者の人材養成を行い、途上国の農業科学の発展に貢献することも目指している。

60. 医療におけるテクノロジー・アセスメントの研究

(吉田 忠)

医療における人間疎外が叫ばれて久しいが、ともすれば無反省に用いられている新しい医療技術の総合的評価を、現場の医師、公衆衛生学者、医療経済学者、バイオエシックスの専門家、医学史家などを含む学際的共同チームで実施し、医療の実践に対し不断の反省を迫ることは、現代の重要な課題であろう。

当研究は、一昨年度の予備的研究の成果を継承・発展させ、大腸がんマスキング・プログラム、狭心症患者に対する冠状動脈バイパス術、核磁気共鳴イメージング(NMR-CT,MRI)、出生前診断の技術という四つの医療技術をケース・スタディとして取り上げ、医療のテクノロジーに対し、安全性、信頼性、適用性、効果や経済性とどまらず、社会的・倫理的影響をも考察するという総合的評価を行うことを目的としている。

61. 野生鳥類における重金属類の生体影響と非捕殺的モニタリング方式

(本田 克久)

これまで、申請者らは野生鳥類による重金属の取り込み・蓄積・排泄が、鳥の特異な行動や生理機能と関連することを明らかにするとともに、羽の重金属分析に際しての前処理法、羽の採取部位選択の基準、羽への金属移行過程および羽と体内蓄積の相互関係についてある程度の知見を得てきた。しかし、羽の金属蓄積が鳥の食性や生息域・生活史により、また種のもつ固有の生理機能により、どう変動するかについては未解決の部分が多い。また、数種の鳥類では、カドミウムによる腎障害発現が指摘されており、毒性発現や体調変動が羽の重金属蓄積にどう影響するかについては未検討のままであった。

当研究は、都市と農村、山林と海浜、肉食と植物食、留鳥と渡鳥など、食性や生息域・生活史を異にする鳥類を対象に、未同定元素も含めて羽と体内蓄積の関係を検討し、羽の金属蓄積の機構を明らかにするとともに、羽によるモニタリング方式の基準と具体的用途を提示する。

62. 自然の一体性を重視した地域開発をめざす国際協力の研究 (川喜多 二郎)

近代化の進行につれ、自然と人間の断絶が深まり、国際平和すら脅かされつつある。世界的に起きている山岳環境の破壊もその一環で、ネパールはその代表地域である。同国では人口が急増期に入り、乱開発を余儀なくされ、その結果住民が苦しむという悪循環に陥っている。この状況をいかに逆転したらよいのか。解決策の鍵は新しい哲学の樹立にある。こうした背景のもと、ヒマラヤ技術協力会の行ってきた技術協力活動は、ネパールの官民および国際社会から歓迎されるに至っている。

当研究は、先の問題に対しネパールという場をとおし、シンボリックな解決のモデルの追求を目指している。具体的には、現地実態調査と国内研究を組み合わせ進めていく。この研究の特徴は、①問題解決型研究、②野外科学的・総合的な実態把握、③住民との相互参画方式、日ネ両国各層との横断的協力、④単純で現実的な適正技術の発見、⑤住民の自力更正の道、の発見にある。

63. アメリカにおける日本製造企業の現地化をめぐる諸問題の日米共同研究 (安保 哲夫)

日本的経営は、同質的内向き社会の特性と戦後の経済諸条件を背景に形成された、経営の現場主義的方法であり、製造行程で高い品質と効率を実現している。この文化的・人的要因に強く依存した独自の経営方法や慣行が、異質な諸文化から成るアメリカ的環境への適応 (adaptation) を迫られたとき、いかに、どこまで適用 (application) 可能であろうか。

当研究は、近年急速に活発化したわが国の電機と自動車主要企業の在米現地生産における、日本的経営の現地適用と適応の可能性の問題を、日米研究者の共同現地調査を通じて明らかにすることを目的としている。ここに、適用は日本的経営の強みの移植、適応は現地の諸条件にあわせた自己変容とすれば、この両契機はしばしば二律背反的緊張関係をはらみつつ結局一種の混成物を作り出すであろう。この理論仮説のもとに本研究では、対象、方法、研究体制を拡充しつつ課題の本格的な達成を目指す。

64. 人間関係の出発点としての母親のマザリーズと乳児の発声行動の関連 (志村 洋子)

子供のコミュニケーション能力や他者理解など、社会性の発達では母子関係を中心とする初期相互作用の重要性が指摘されている。特に、子供が言語による相互作用を始める以前より、動作、表情および母親のマザリーズに代表される前言語的音声手段などによって、情緒的交流の基礎が築かれていると仮定されている。しかし、この相互作用の性質や、発達への影響関係は十分に明確ではない。そこで昨年度の予備的研究では、実験法、観察法などを駆使し、主に音声による相互作用の特性を分析し、母児相互作用にみられる特徴を抽出してきた。

当研究では、この問題を追求するなかでマザリーズの周産期からの継続的变化を明らかにし、複数の新生児を対象にマザリーズへの反応変化の特徴を継続分析する。これらの結果から、最初期の母児関係における音声を通しての相互作用の果たす役割、およびその一般化の可能性を探り、胎教や母子関係についての基礎的検討を行う。

65. 元水銀鉱山労働者・家族の疾病史と生活史に関する労働衛生学的・社会学的研究 (土井 陸雄)

当研究チームは、過去1年間にわたって、1970年に閉山したイトムカ鉱山 (本邦最大の水銀鉱山) の元鉱夫とその家族について、水銀中毒後遺症の医学的追跡と生活史の調査を行ってきた。その結果、軽度ながら振戦や運動失調が残留する者があり、他に高血圧、肝機能障害などをもつ者が相当数いること、また閉山に伴って転職・移転した家族が生活上の多くの困難に遭遇したこと、などが明らかになってきた。水銀鉱山労働者に関するこのような追跡調査は、医学的にも社会学的にも過去に例がなく、今回の調査はその端緒に就いたにすぎない。

当研究は、さらに多数の元鉱夫とその家族の疾病史と生活史について調査し、あるいは閉山前後の経済的・社会的背景を調査し、このような大規模な社会的変動に対する従来の労働衛生学的・社会学的対策に再検討を加えようとするものである。

66. 前近代の日本における職能民の社会と歴史

(網野 善彦)

前近代の日本において農業以外の生業に携わっていた民衆の存在は、近年急速に注目を集めている。前近代の職能民相互の多様な関係のあり方は、現代の社会生活の淵源を探る一助ともなるが、この分野では、個別的な研究は種々に試みられているとはいえ、総括的にとらえるための一次資料ともいふべき、図像と和歌・判詞の密接な連携になる「職人歌合絵巻」等の網羅的な研究は十分に行われていない。

当研究チームは、これまで「職人歌合絵巻」諸本の徹底的な収集・比較と、他の絵画資料に描かれた「職人」像をも含めての、学際的な知見の総合による分析に努めてきており、すでに一定の成果を上げている。またその過程で、中世職能民の実態について新しい知見も得てきた。今後は、さらに資料の収集と分析を進め、「職人歌合絵巻」等の性格と成立を解明し、前近代の民衆生活の実態と変遷を明らかにしていく予定である。

68. 母国語の拘束と国際相互理解——アラブ大学生の現地調査——

(黒田 安昌)

日本とアラブ諸国の貿易量は、アメリカとのそれに次いで多く、モノを通しての両者の交流はすでに著しい。にもかかわらず、その文化や価値観や発想法については表面的な理解に限られているのが現状である。

当研究は、1984、86年度と2回にわたる予備研究での方法論の検討に基づき、アラブ諸国の男女大学生を対象にアラビア語と英語の調査票を用いたアンケート式調査を行うとともに、10～15人の学生を集めてアラビア語と英語で座談を行い、使用言語による発想法の違いを明らかにする計画である。当研究者等は、国民性の研究は使用する言語から出発するのが最も効果的であるとの考えから、日本語と英語を用いた場合の回答の相違について明らかにし、同時に、従来の通説に反して、中間的解答のもつ曖昧性を積極的に使用することの重要性を指摘しているが、今回の総合研究はそのような方法論上の課題についても実証的なデータを与えることになろう。

67. 東西技術移転の法的諸問題に関する国際共同研究

(小田 博)

今後の東西経済関係における大きな問題の一つに、西側諸国の高度技術の東側諸国への移転に関する法的諸問題がある。一方では、西側諸国の安全保障の観点から、移転を強く規制すべきであるという考えがあり、他方には、経済利益との調和を図り、あまり規制すべきでないという考えがある。また技術移転の規制が、実務レベルでどのように運営されるべきかについても十分論議されているとはいえない。

当研究は、このような従来の研究の空白を埋めるべく、昨年度予備研究として開始され、アメリカの議会資料や政府関係者インタビュー、イギリス経団連での調査を通じてココム規制の実態を明らかにした。本年度はこの予備研究の成果を踏まえ、アメリカとイギリスの東側諸国に関する研究者や貿易実務者と共同して、国際的規制の実態をより詳細に明らかにしていくとともに、各国の国内法による東西技術移転の規制についても比較検討する。

II. 研究コンクール

II-0. 研究コンクールの概要

研究コンクールは“身近な環境をみつめよう”のテーマにより、1年おきに公募を行っている。これは、それぞれの地域で生活する住民と専門の研究者とが一体となって、地域に密着した長期的な研究活動を行うことを目指したものである。

今年度は1985年に始まった第4回の継続事業と、本年度に始まった第5回の事業が実施されたが、それぞれの事業は次のような段階によって進められている。

〈項目〉	〈第4回〉	〈第5回〉
●研究計画の公募	1985年11月～86年1月	1987年11月～88年1月
●予備研究助成対象 の決定	1986年3月	1988年3月
●予備研究実施	1986年4月～同年8月	1988年4月～同年9月
●本研究助成対象 の決定	1986年10月	1988年10月
●本研究実施	1986年11月～88年10月	1988年11月～90年10月
●最優秀賞・優秀賞 の決定	1989年3月	1991年3月
●研究奨励基金、フォロー アップ助成金の決定	1989年10月	

本年度は、第4回研究コンクールについては、選考委員による本研究チームの現地インタビューと、各チームが一堂に会しての研究経過報告会が行われた。

第5回研究コンクールについては、公募を行い、121件の研究計画の応募を受け付け、このうち18件を予備研究助成対象として選出し、各チームに予備研究実施のための助成金（合計955万円）を贈呈した。

なお、第5回の選考委員の構成は次のとおりである。

委員長：小原秀雄，委員：赤瀬川原平，有馬真喜子，岡部昭彦，小川信子，鈴木継美，高野公男，播磨靖夫，日高敏隆，本間義人

II-1. 第5回研究コンクール応募要項（抄）

研究コンクールの主旨

私たちの日常生活は、環境との様々なかかわりのなかで成り立っています。この環境という概念には、自然や、人間が造り出した物や、周囲の人間など、ありとあらゆる形あるものを含むことはもとより、制度、文化、情報、人間関係など、形のないものまで含めて考えることができます。このような環境の概念を幅広くとらえると、環境を考えることは、すなわち私たちの生き方を考えることにほかならないといえます。

環境については、これまでも多くの研究者によって、それぞれの専門分野からの高度な研究が進められています。しかし、私たちの生活に密接に結びついた「身近な環境」の様々な問題は、私たち一人一人の問題として、毎日の生活のなかで考え、そして積極的に取り組んでいくべき課題なのではないでしょうか。

身近な環境のなかで、何がどう変わりつつあるのかを知り、それがなぜかを探求し、あるいは望ましい環境のあり方を問い、そのために何が必要かを実践的に試みる——トヨタ財団はこのような研究が全国で一層活発に行われることを期待して、研究コンクールを行います。

生活の場にある人々と、専門の研究者とが一体となって、毎日の暮らしのなかから身近な環境をじっとみつめ、未来の兆しを読み取り、いままで見過ごされていた問題を発見し、それに新しい方法で取り組んでいく、そのような研究の計画が全国各地から多数寄せられることを期待いたします。

こんな研究を求めています

このコンクールは上の図（略）のように、「身近な環境」を対象とする研究のアイデアに対してまず助成を行い、その助成による研究成果について賞を差し上げるものです。

〈研究テーマ〉（抄）

・研究テーマは、応募される方が「身近な環境」と思わ

れるものならばなんでもかまいません。毎日の暮らしのなかから、重要だけれど見過ごされている問題や、これからの課題の芽などを見つけ出してください。

・これらの環境を断片的にみつめるのではなく、様々な要素のからみ合った全体としてみつめるような研究テーマを期待します。

〈研究対象区域〉（略）

〈研究期間〉（略）

〈研究費用〉（略）

〈研究体制〉（抄）

・地域の住民を中心に、地域の生活とつながりの深い施設に勤めている人や、専門的な研究活動に従事する人が加わった形が望まれます。小・中・高校生・大学生などの参加も歓迎します。

〈研究方法〉（抄）

・テーマに見合った、だれでも日常生活のなかで取り組めるような独創的な方法を見つけ出してください。

・課題への取り組みを通じて、参加者が、専門的な研究方法を理解し、使いこなせるようになることも重要です。そのような学習の可能性についても配慮してください。

助成金や賞金を贈呈します

〈予備研究助成金〉（抄）

・研究計画に基づき選ばれた約20チームに対して、予備研究助成金50万円（上限）を贈呈します。

〈本研究助成金〉（抄）

予備研究の成果に基づく本研究の実施計画書などを基に選考を行い、7～8チームに対して、本研究助成金400万円（上限）を贈呈します。

〈賞および賞金〉（抄）

・2か年にわたる本研究の成果を基に選考が行われ、最優秀賞1件、優秀賞数件が選出されます。

・最優秀賞には、賞牌ならびに賞金100万円、優秀賞にはそれぞれ賞牌ならびに賞金50万円を贈呈します。

〈研究奨励金，フォローアップ助成金〉（抄）
・賞を受賞したチームのなかから，特に今後の活動の展開が期待されるチームには，その活動のための研究奨励基金またはフォローアップ助成金を贈呈します。助成金額は最高で1件2,000万円を予定しています。

このように選考します（略）
助成金費目一覧（略）
応募方法（略）
その他のご案内（略）
選考委員名簿（略，48ページ参照）——以上——

II-2. 第5回研究コンクール予備研究助成対象

助成対象一覧

コード番号	研究題目 応募団体名 (代表者・氏名)	対 象 都道府県 人 数	助成金額 (円)
1 5C-014	佐鳴湖の再生をめざして ——都市化の中で、残された自然環境をどのように護れば良いか—— 佐鳴湖環境調査会 (藤森 文臣)	静 岡 33	500,000
2 5C-026	富士北麓における牛乳パック再利用研究 ——福祉事業への研究実践—— 富士北麓紙パック再利用研究会 (平井 初美)	山 梨 12	500,000
3 5C-032	久慈川水系における流域住民と川とのかかわりについて ——事例調査から—— 久慈川水系環境保全協議会 (藤崎 信)	茨 城 41	500,000
4 5C-037	汎用ポンプを利用した小水力利用システムの開発 水車むら会議 (小池 浩一郎)	静 岡 6	500,000
5 5C-040	なぜ公共トイレの女性用だけが混雑するのか？ 女と男のトイレ研究会 (広瀬 洋子)	東 京 12ほか	500,000
6 5C-044	新宿区内における在宅福祉サービス向上のためのケアセントウ (ケア付公衆浴場) についての研究 新宿高齢者在宅サービス研究会 (石川 公也)	東 京 7	500,000
7 5C-048	エンカウンタースペース・プロジェクト ——森の町建設計画—— 都留市ムリネモ協議会 (今泉 吉晴)	山 梨 28	500,000
8 5C-054	鎌倉が「リスのいる街」であり続けるために住民は何をなすべきか 古都鎌倉の自然研究会 (木下 節子)	神奈川 8	500,000
9 5C-055	浅川流域の“汚染マップ作り”と河川浄化に木炭を利用し浄化対策を考える 八王子市・浅川地区環境を守る婦人の会 (加藤 文江)	東 京 13	500,000
10 5C-066	大野盆地における水環境の研究 大野盆地地下水研究グループ (高井 修二郎)	福 井 24	550,000

コード番号	研究題目 応募団体名 (代表者・氏名)	対 象 都道府 県数 人	助成金額 (円)
11 5C-075	サンゴ礁文化圏の自然生活誌 ——八重山・白保部落のイノーと暮らし—— 魚垣の会 (東川平 正雄)	沖 縄 11	680,000
12 5C-084	同潤会江戸川アパート半世記 (3 世代) にわたる棲み方と棲み続け方 ガンバル江戸川アパートメント (丸山 欣也)	東 京 21	500,000
13 5C-085	三番瀬の埋め立てを行なう事なく創出できる市民の親水空間を 三番瀬研究会 (小埜尾 精一)	千 葉 17	500,000
14 5C-090	港町・函館における色彩文化の研究 ——下見板のペンキ色彩の復元的考察を通して—— 函館の色彩文化を考える会 (村岡 武司)	北海道 21	580,000
15 5C-092	トカラの人々の心のつながりをさぐる トカラ研究会 (永田 康夫)	鹿児島 21	610,000
16 5C-100	親と社会の境界線を探る 家庭養護研究会 (岩崎 美枝子)	大 阪 12	550,000
17 5C-104	青い森の探訪 青森県木材加工研究会	青 森 11	580,000
18 5C-119	昭和村大芦地区における「からむし」の生産技術と、存在し続ける植物 「カラムシ」の意識を探る 昭和村生活文化研究会 (菅家 博昭)	福 島 7	500,000
合 計	18 件		9,550,000

○助成金額については、東京で行われる説明会や研究報告会への参加旅費がチームごとにより異なるため、各チームとも500,000円の申請金額だったが、遠方のチームには旅費の一部を追加し、上記の表のような結果とした。

○予備研究助成期間：1988（昭和63）年4月1日～同8月31日

III. 活動記録助成

III-0. 活動記録助成の概要

「新しい人間社会を目指した市民活動の記録」をテーマとする本助成は、記録の作成および、その成果の出版に対する助成の二つから成る。

記録の作成については、研究助成と同様4月初日から5月末日にかけて一般公募を行い、56件の申請があった。

7月から8月にかけて選考委員会（委員長縫田暉子、ほか委員4名）で下記の基準に基づき慎重に選考を行い、その推薦に基づき10月開催の第46回理事会で10件1,770万円の助成対象を決定した。助成期間は11月1日より1年間である。

- ① 活動自体が多くの人に支えられており、その体験が広く共有できるか。——（市民性）
- ② 既成の考え方にとらわれない柔軟な発想やアイデアに基づく活動であり、積極的に創造的な性格を有しているか。——（先見性）
- ③ 国際的な広がりのなかで意義ある活動か。——（国際性）
- ④ 現時点で記録を整理し公表することが、そのグループにとっても社会にとっても今後の重要な契機となるか。——（タイミング）
- ⑤ 記録の作成にかかわる適切な人材を確保できるか。——（作成能力）

また、記録の出版については、これまでの助成で作成された記録を対象に、下記の条件に基づき選考委員会で審査を行い、10月1日の第46回理事会で2件、翌年3月17日の第47回理事会で4件の助成対象を決定した。

- ① 記録作成作業が完了し、若干の手直し程度で完全原稿が入稿できる状態にあること。
- ② 出版社との間に出版計画の大筋について合意が得られていること。
- ③ 多数の読者が興味深く読めるよう十分意図されていること。
- ④ 内容的には、成功事例ばかりではなく、失敗事例もきちんと盛り込んでいること。

Ⅲ-1. 活動記録の作成

助成番号	題目 代表者 所属	助成金額 (円)
1 87-K-008	大地を守る会の活動に関する記録の作成 ——生活再創造のための新しいネットワーク形成と受け皿づくり—— 藤田 和芳 大地を守る会 40歳	2,000,000
2 87-K-010	水俣病患者家庭果樹同志会の活動に関する記録の作成 高橋 昇 水俣病患者家庭果樹同志会 38歳	1,800,000
3 87-K-012	フレンズ国際労働キャンプ（関西委員会）の活動に関する記録の作成 柳川 義雄 フレンズ国際労働キャンプ 36歳	2,000,000
4 87-K-016	薬を監視する国民運動の会の活動に関する記録の作成 高橋 暁正 薬を監視する国民運動の会 69歳	1,900,000
5 87-K-019	ハスの実の家とハスの実の会の活動に関する記録の作成 関口 昇 ハスの実の会 55歳	1,700,000
6 87-K-020	日本尊厳死協会の活動に関する記録の作成 植松 正 日本尊厳死協会 81歳	1,800,000
7 87-K-030	食べものと健康の集いの活動に関する記録の作成 緒方 俊一郎 食べものと健康の集い 46歳	1,600,000
8 87-K-035	美唄消費者協会の活動に関する記録の作成 伊藤 みえ子 美唄消費者協会 67歳	1,600,000
9 87-K-051	地域ケアへの歩みとそれを担ったインフォーマルグループの活動に関する記録の作成 ——日野市の事例を中心に—— 木下 安子 日野市地域ケア研究所 60歳	1,700,000
10 87-K-055	真間川の桜並木を守る市民の会の活動に関する記録の作成 平松 南 真間川の桜並木を守る市民の会 44歳	1,600,000
記録の作成・合計 10 件		17,700,000

助成対象概要

1. 大地を守る会の活動に関する記録の作成

(藤田 和芳)

大地を守る会は、理念をともにする生産者・メーカーと提携して安全な食べ物を作り出し、それを消費者の共同購入活動によって支えていくことを日常活動の基本として行っている。また、さらに、理念に沿った現実の受け皿を一つずつ創っていくために、他団体との提携などさまざまなテーマに沿った活動を展開している。

当記録は、共同購入活動や生産者との提携などの日常的活動から、各地域での活動や他団体とのネットワーク活動、独自の企画・イベントなど、生活再創造を目指したさまざまな取り組みの現状を記録するものである。

2. 水俣病患者家庭果樹同志会の活動に関する記録の作成

(高橋 昇)

同会は、水俣病患者が、農薬を使用することで消費者に対して加害者になってはならないとの思いから、低農薬・有機農業を始めた。販売はすべて市場を通さず消費者との産直で、互いに顔の見える関係を重視してきた。

当記録では、会員3人の個人史を軸にしながら、水俣病、甘夏との出会い、同志会の結成から現在に至るさまざまな出来事をおして、個人、同志会の考え方を明らかにしていくこととしている。消費者との交流のなかで、水俣病の救済とは何かを、甘夏生産という日常のたたかいのなかで考えていく。

3. フレンズ国際労働キャンプ(関西委員会)の活動に関する記録の作成

(柳川 義雄)

同会の34年間に及ぶ活動は、戦後の歩みのなかで絶えず抑圧され続けてきた「らい」を中心とする社会的弱者の生活環境の改善等のための労働キャンプという形での支援・協力である。そして、その過程での彼らとの人間関係作りを通じて、彼らと対立する社会的強者としての自分を認識し、自分の内に深く根を下ろす差別・偏見の克服を目指してきた。

当記録は、活動の創成期から現在までの膨大な記録の整理とキャンパーへのインタビュー取材を基に、時代との関わりをなかでの活動の軌跡といったものを目指す。

4. 薬を監視する国民運動の会の活動に関する記録の作成

(高橋 暁正)

同会は、1970年以来、薬乱用の風潮のなかでその危険性を警告し、薬害の啓発とその防止に努力してきた。活動は科学性を基軸としながら市民の要請に応じて拡大した。必要に応じて市民の工夫による実験と調査も行った。

当記録では、同会が確認した家庭薬・インフルエンザ予防接種・むし歯予防用フッ素・合成殺菌料トフロン・コバルト60照射食品などの功罪、農薬ニッソールの経皮毒性、農薬工場周辺住民における癌の増加などを記載する。また、各国の消費者団体・研究所との交流、特に中国広州市での水道水フッ素化中止との係わりを述べる。

5. ハスの実の家とハスの実の会の活動

(関口 昇)

同会は、障害者問題を通じて社会に貢献することを目的とし、「ハスの実の家」の行事や事業活動への参加・協力および障害をもつ仲間たちとの交流や福祉問題の学習会、意見交流などを行っている市民による組織である。会員は福井県を中心に全国で555名に及んでいる。

当記録は、ハスの実の家とハスの実の会をはじめとする支援組織の23年の歩みをまとめるとともに、障害をもつ仲間たちが主人公として生活できる施設づくりを地域のなかでどう展開すべきか、地域のなかでどんな役割を果たすべきかについて実践活動を踏まえて考察する。

6. 日本尊厳死協会の活動に関する記録の作成

(植松 正)

当協会は1976年、故太田典礼博士を中心に、日本安楽死協会として発足し、1983年、現在の日本尊厳死協会に改称した。ここでは、不治末期状態における過剰な延命措置を拒否する「リビング・ウィル」の登録・証明をすることにより、わが国における尊厳死思想の普及に関する活動を行っている。

当記録は、わが国に安楽死運動が始まり、尊厳死運動に転換した過程における動機と、海外事情を混じえた背景との絡みを考察するとともに、10年余にわたって継続した出版・研究会等の活動の成果をまとめるものである。

7. 食べものと健康のつどいの活動に関する記録の作成

(緒方 俊一郎)

食べものと健康のつどいは、環境と健康に関心をもつ熊本県、人吉・球磨地域の農業生産者、消費者を中心とする集まりである。ここでは、いのちとそれを維持する環境を守るために必要なことは何かを学習し、学んだことを実行に移す努力を続けている。

当記録では、過去7年余の当会の歩みをたどり、いのちの源である水・空気それを生み出す山々がいかに危機に瀕しているか、また人々の生命や生活が脅かされているか、等の実態を明らかにする。そのうえで、いのちの糧である食物の確保と環境保全の方法を探る。

8. 美唄消費者協会の活動に関する記録の作成

(伊藤 みえ子)

同協会は、昭和45年以来、食品添加物乱用に対する危機感に基づき、チクロ、AF-2、過酸化水素、プロピレングリコール、BHA、リジンや臭素酸カリウムなどの追放運動を行ってきた。一方、郷土の食文化を掘り起こし、さらに環境汚染、自然破壊、核、食糧問題を通して国際的な交流も進めている。

当記録では、現代の食の危機が、安全性、自給率の低下、文化の崩壊にあるとの認識のもとに行ってきた運動を振り返り、それをおして自己、人、町がどう変わっていったかを明らかにしていく予定である。

9. 地域ケアへの歩みとそれを担ったインフォーマルグループの活動に関する記録の作成

(木下 安子)

患者とその家族を地域で支えるには、それを囲む地域の医師・保健婦その他の関係専門職やボランティア等を構成メンバーとする、在宅ケアチームの編成と、その活動の継続を図るための、メンバーの出身母体である関係組織や機関との連携が必要である。

当記録は、わが国においてはその実現が困難視されてきた上記のシステムにつき、10年来、東京の10数市・区部で実現し、かつ、推進してきた陰の役割を担う日野市のインフォーマルグループに焦点を当て、その活動を取りまとめる。

10. 真間川の桜並木を守る市民の会の活動に関する記録の作成

(平松 南)

真間川は千葉県市川市を流れる都市中小河川であるが、その兩岸に沿った桜並木は県下の名所の一つとなっている。同会は、頻発する水害を軽減する目的で持ち上がった川の拡幅計画に伴う桜並木の伐採案に対し、治水と環境保護の両立を目指した活動を行ってきた。

当記録は、その10年に及ぶ足跡を追い、住民にとって川とは何かを考えると同時に、行政に積極的にかかわり、環境に配慮した新しい治水事業を実現させ得た住民による活動過程を取りまとめることとしている。

III-2. 活動記録の出版

母体となる 助成の番号	題目 代表者	助成金額 (円)
1 85-K-046	大野の水を考える会の活動に関する記録の出版 安土 義雄	1,000,000
2 85-K-033	財団法人ふきのとう文庫の活動に関する記録の出版 小林 静江	1,000,000
3 85-K-045	関西分譲共同住宅管理組合協議会の活動に関する記録の出版 佐藤 隆夫	1,000,000
4 86-K-002	明るい老後を考える会の活動に関する記録の出版 竹内 とき江	1,100,000
5 84-K-001	シャプラニール—市民による海外協力の会の活動に関する記録の出版 福沢 郁文	1,000,000
6 85-K-037	北九州YMCA・グループワーク研究会「のびのびキャンプ」実行委員会の活動に関する 記録の出版 山岡 浩一	1,000,000
記録の出版・合計		6 件 6,100,000

IV. 国際助成

IV-0. 国際助成の概要

国際助成の対象地域は当面の間、東南アジア諸国に焦点を絞っており、関心分野は、過去約10年間に行った国際助成の経験から、1987年現在、各地域の固有文化(indigenous culture)の保存と振興を旨とするプロジェクト等に重点をおいている。

また、助成対象の選考にあたっては、以下の諸点を満たすようなプロジェクトを重視している。

1. 東南アジア諸国の人々の発想になり、東南アジア諸国の人々によって行われるプロジェクトである。
2. 政府や国際機関のプロジェクトであるよりも、大学や民間(非営利)のプロジェクトである。
3. 具体的な成果が期待でき、社会的なインパクトの大きいプロジェクトである。

国際助成への応募方法を簡単にまとめると次のとおりである。東南アジア諸国の人々が助成を希望する場合は、助成を希望するプロジェクトについて簡単な概要を書いて、当財団の国際助成部門あてに直接送っていただきたい(当財団の事務所は東京にあるのみで海外にはない)。原則として以下のみには助成を行わない。基金の拠出、建設費、装置購入、博物館用収集品の購入、図書館用蔵書の購入、機関助成、すでに発足しているプログラムの年間経費、政治活動、宗教活動等。また、プロジェクト・リーダーおよび研究者への給料の助成は原則として行わない。申請は1年中受け付けるが、申請プロジェクトの具体性およびプロジェクトについての情報の多寡によって、審査に要する時間が異なる。通常、審査に要する期間は6か月から1年である。ほとんどの申請プロジェクトについて、審査前および審査中に財団のプログラム・スタッフが申請者を訪問し調査を行う。継続プロジェクトであっても毎年申請が必要である。助成決定は10月の理事会で行われる。

インドネシア若手研究者奨励研究は、1987年度より、国際助成の枠内で新たに開始した。その目的はインドネシアの社会・人文科学分野の若手研究者の個人研究を対象として、助成を行うものである。国際助成としては初めて

一般公募形式をとり、インドネシアのほとんどすべての地域から申請が出された。若手研究者奨励研究助成は試行的に、数年間インドネシアで実施する予定である。その他の国々については、この成果をみてから改めて考慮する。

IV-1. 国際助成対象

助成対象一覧

(継2)：継続2年目
 (継3)：継続3年目
 (継4)：継続4年目
 (継5)：継続5年目

	プロジェクト題名 代表者 所属	助成金額 (円)
1	リアウ地方の口承文学：内陸部住民のニャニイ・パンジャン トゥナス E. リアウ州立伝統文化会館事務次長 (インドネシア)	640,000
2 (継2)	スラウェシ南部の沿岸地域の社会 ムフリス ハサヌディン大学沿岸地域研究プロジェクト所長 (インドネシア)	4,170,000
3	スルック：ジャワのイスラム教徒の神秘詩 シムフ スナンカリジャガ・イスラム高等学院イスラム教義学部長 (インドネシア)	890,000
4 (継3)	バリの歴史関係貝葉文献の翻字，翻訳 A. A. G. P. アグン ウダヤナ大学文学部歴史学科長 (インドネシア)	490,000
5 (継2)	ミナンカバウ社会における近代的官僚制と伝統的権威 イムラン M. ミナンカバウ文化研究財団上級研究員 (インドネシア)	580,000
6 (継3)	ミナンカバウ語に特有の語彙，連語，表現の研究 ハイディル A. ミナンカバウ文化研究財団上級研究員 (インドネシア)	860,000
7 (継2)	ブル島の孤立した民族ワカホロ族とその世界 ムス H. パティムラ大学教員養成学部講師 (インドネシア)	880,000
8 (継2)	アチェの封建領主ウレーバランの歴史研究 ルスティ S. シャクアラ大学教員養成学部講師 (インドネシア)	450,000
9	アチェのタルサン国のスルタンのイスラム法学者ジャラルディン・ビン・カマルディンの著作に見られる裁判官についての考え方 T. モハマッド J. シャクアラ大学法学部慣習法・イスラム法研究センター事務局長	450,000
10	H. アブドウル・カリム・アムラー・アドダナウィの著作に関する研究 モハマッド S. L. 西スマトラ・イスラミックセンター所長 (インドネシア)	620,000

	プロジェクト題名 代表者 所属	助成金額 (円)
11	東南アジアのイスラム	
(継3)	タウフィック A. インドネシア科学院社会文化研究所上級研究員 (インドネシア)	790,000
12	バリの伝統医療関係貝葉文献の目録作成	
	I. K. スウィジャ グドンキルティヤ貝葉博物館館長 (インドネシア)	580,000
13	北アチェの工業開発にともなう周辺社会の文化変容	
(継3)	ダヤン D. シャクアラ大学社会科学開発センター所長 (インドネシア)	2,960,000
14	インドネシアの諸民族言語との関連におけるインドネシア語の利用と発達	
	E. K. M. マシナンボウ インドネシア大学文学部言語学科教授 (インドネシア)	3,430,000
15	スンダ地方文献のマイクロフィルム作成	
(継3)	エディ S. E. パジャジャラン大学研究センター社会文化研究プログラム副代表 (インドネシア)	3,780,000
16	19世紀ジャワの強制栽培制度に対する農村の反応	
(継2)	ジョコ S. ガジャマダ大学文学部歴史学科長 (インドネシア)	2,060,000
17	ブギス・マカッサル文字タイプライターの製作と寄贈	
(継2)	サラフディン 南スラウェシ州政府第4助役 (インドネシア)	1,360,000
18	貝葉文献の保存, 記録, 翻字, インヴェントリー作成, マイクロフィルム化に関するセミナー	
	ラタナウォン H. 芸術・文学研究所所長 (ラオス)	2,100,000
19	ラオス伝統医療のマニュアル作成	
	ソムモニ P. マホソット病院医師 (ラオス)	860,000
20	国立美術学校用の教科書の編集・印刷	
	ルク S. 国立美術学校校長 (ラオス)	400,000
21	国立音楽舞踊学校用の教科書の編集・印刷	
	ボウパチャン K. 国立音楽舞踊学校校長 (ラオス)	990,000
22	『社会科学ジャーナル』の発行	
(継5)	S. フセイン A. マレーシア社会科学会会長 (マレーシア)	2,110,000

	プロジェクト題名 代表者 所属	助成金額 (円)
23	村落社会からプランテーション労働者へ ——マレー半島東海岸のマレー人の地方レベルにおける文化変容と社会変化—— W. ザウォイル, マラヤ大学経済経営学部准教授(マレーシア)	1,910,000
24	マレー古文書トゥファット・アルナフィスのファクシミリ版作成 ジャハリル I. マラヤ大学文学部東南アジア研究学科准教授(マレーシア)	1,230,000
25	東南アジアのアラブ人：歴史・社会学的研究 オマール F. マラヤ大学文学部歴史学科講師(マレーシア)	2,220,000
26 (継3)	古典ネパール語辞書編纂 P. B. カンサカール, ネパール語辞書委員会事務局長(ネパール)	2,250,000
27 (継3)	カトマンズ盆地の美術品の写真インヴェントリー L. S. バンデル, ネパール王立アカデミー総裁(ネパール)	7,250,000
28 (継4)	ネパール諸語の古文書の保存と記録 P. R. トウラダール, ネパール古文書保存記録委員会(ネパール)	560,000
29 (継2)	ネパール文化百科事典 K. K. B. シャー, トリブヴァン大学ネパール・アジア研究センター所長(ネパール)	3,370,000
30 (継2)	中世ネパールの碑文研究 D. ヴァジラチャルヤ, トリブヴァン大学ネパール・アジア研究センター講師(ネパール)	3,720,000
31	ヴィサヤ地方とミンダナオ地方のイエズス会派教会の歴史的研究：1581年-1768年, 1859年-1921年 R. B. ハヴェリャーナ, アテネオ・デ・マニラ大学教養学部神学科講師(フィリピン)	1,830,000
32	フィリピンの土着イスラム建築に関する写真による予備調査 A. T. ティアムソン, フィリピン大学マニラ分校教養学部社会科学科准教授(フィリピン)	930,000
33	18世紀におけるフィリピン聖職者の起源 L. P. R. サンチャゴ, メディカル・シティ病院精神医学者(フィリピン)	1,380,000
34 (継2)	フィリピンの地方史に関するスペイン語古文書の調査 M. B. D. アランパイ, デ・ラ・サル大学歴史学・地域研究科准教授(フィリピン)	5,900,000

	プロジェクト題名 代表者 所属	助成金額 (円)
35	マノボ族の叙事詩『ウラヒーガン』の記録、翻訳、編集 E. G. マキノ シリマン大学研究センター(フィリピン)	1,870,000
36 (継2)	フィリピン社会の連続性と変化——南コタバトの経験：1913年—1986年 D. M. ノン ミンダナオ州立大学ジェネラル・サントス校社会科学科助教授(フィリピン)	140,000
37 (継2)	フィリピン農村社会における医療信仰とその選択 M. P. ディアス デ・ラ・サル大学行動科学科準教授(フィリピン)	1,090,000
38 (継3)	ネグロス・オキシデンタル州の社会・文化・経済史：1850年—1985年 V. L. ゴンザガ ラ・サル大学社会調査センター所長(フィリピン)	1,090,000
39 (継2)	アメリカ支配から現在に至るまでのネグロス・オリエンタル州の歴史 C. A. ロドリゲス シリマン大学歴史・政治学科教授(フィリピン)	1,300,000
40 (継2)	古典マラナオ語の語彙および句に関する辞書 B. アル・マカラヤ ミンダナオ州立大学研究センター教授(フィリピン)	2,390,000
41 (継2)	セブアノ文学選集：1801年—1985年 R. B. モハレス サン・カルロス大学セブアノ研究センター所長(フィリピン)	860,000
42 (継3)	マラナオ族の叙事詩『ダランガン』の出版 M. D. コロネル ミンダナオ州立大学研究センター教授(フィリピン)	2,910,000
43 (継3)	ワライの伝承：レイテ地域の地方史と社会変化 J. B. ポロ アテネオ・デ・マニラ大学フィリピン文化研究所研究員(フィリピン)	1,220,000
44 (継3)	フィリピン演劇の歴史とアンソロジー N. G. ティオンソン フィリピン大学文学部フィリピン語文学科準教授(フィリピン)	3,300,000
45 (継3)	異文化間交流的視点から見たダバオの3民族グループ H. K. グロリア アテネオ・デ・ダバオ大学社会科学科教授(フィリピン)	370,000
46	パッシングの歴史：1572年—1987年 C. テック 郷土史家(フィリピン)	700,000

	プロジェクト題名 代表者 所属	助成金額 (円)
47 (継2)	セブの植民地教会の歴史的研究——その建築および美術的特徴：1590年—1890年 C. S. タマヨ サン・カルロス大学セブアノ研究センタープロジェクトディレクター(フィリピン)	590,000
48 (継3)	北部フィリピン、パンガシナン州の政治・社会経済・文化史：1901年—1986年 R. M. コルテス フィリピン大学社会科学・哲学学部歴史学科教授(フィリピン)	510,000
49	マニラ社会史：1765年—1898年 M. L. T. カマガイ フィリピン大学社会科学・哲学学部歴史学科助教授(フィリピン)	870,000
50 (継2)	フィリピン諸語辞書 E. コンスタンティーノ フィリピン大学社会科学・哲学学部言語学科教授(フィリピン)	3,610,000
51 (継2)	フィリピン社会史：1663年—1765年 M. C. ゲレロ フィリピン大学社会科学・哲学学部歴史学科教授(フィリピン)	440,000
52 (継2)	イロコス地方の経済・社会史：1900年—1935年 D. B. アピラド フィリピン大学社会科学・哲学学部歴史学科助教授(フィリピン)	540,000
53 (継3)	フィリピン国立公文書館のスペイン語古文書インヴェントリー作成 R. A. コンセプション 国立公文書館主任司書(フィリピン)	1,670,000
54	ボロブドゥール寺院のジャータカ壁画研究 M. R. M. ハンドゥラカンデ ペラデニヤ大学古典言語学科教授(スリランカ)	170,000
55	東北タイ語辞書編纂・出版 プリーチャ P. 東北タイ語辞書プロジェクト(タイ)	4,000,000
56	中国・広西のチュアン族とタイの関係についての研究 プラニー K. チュラロンコン大学文学部言語学科準教授(タイ)	1,130,000
57 (継3)	東北タイの碑文：碑文学、歴史学研究 タワット P. ラムカムヘン大学人文学部タイ語東洋語学科準教授(タイ)	440,000
58 (継2)	東北タイの民衆の知恵とアイデンティティーの模索 セリ P. タマサート大学教養学部哲学科準教授(タイ)	1,000,000

	プロジェクト題名 代表者 所属	助成金額 (円)
59	タイのヤオ族と中国・広西のヤオ族の比較研究 テラパン L. T. チュラロンコン大学文学部言語研究所所長(タイ)	1,320,000
60 (継2)	北タイ、ビルマ・シャン州、インド・アッサム州のタイ語族の文化・社会比較研究 シヤラチャイ R. チェンマイ大学社会科学部社会学・人類学科教授(タイ)	2,290,000
61 (継2)	グエン時代ヴェトナム社会・経済史の予備的研究 ポーンペン H. シンラパコン大学文学部歴史学科助教授(タイ)	3,950,000
62 (継3)	北タイの文化に関する民族学・歴史学研究：儀礼と信仰のインヴェントリー作成 アナン G. チェンマイ大学芸術文化振興センター講師(タイ)	2,500,000
63 (継3)	ランナタイ研究情報プロジェクト チャヤン V. チェンマイ大学芸術文化振興センター副所長(タイ)	4,000,000
64 (継2)	「ランナタイとシブソンパンナ：文化関係の研究、連続性と変化」会議報告書の出版 M. R. ルチャヤ A. チェンマイ大学芸術文化振興センター所長(タイ)	550,000
65 (継2)	『チャム彫刻』の編集と出版 P. フウ 社会科学出版局局長(ヴェトナム)	4,830,000
66 (継2)	『大地と水の誕生』の神話の編纂、翻訳、出版 D. V. ルン 文学研究所少数民族文学部長(ヴェトナム)	1,000,000
67 (継2)	ダム・サン民話の編纂、翻訳、出版 N. V. ホアン 文学研究所副所長(ヴェトナム)	1,000,000
68 (継2)	ヴェトナムにおける仏教の歴史 N. T. トウ 哲学研究所副所長(ヴェトナム)	1,000,000
69	メコンデルタの文化的特色と人口 N. C. ビン ホーチミン市社会科学研究所所長(ヴェトナム)	1,500,000
70	ヴェトナムの古代の町 V. タオ 歴史研究所所長(ヴェトナム)	850,000

	プロジェクト題名 代表者 所属		助成金額 (円)
71	ホアビン文化 H. X. チン 考古学研究所副所長(ヴェトナム)		1,160,000
	小 計	71 件	122,160,000
1 } 17	インドネシア若手研究者奨励研究助成	別表の17名	5,030,000
	国際助成合計		127,190,000

助成対象概要

1. リアウ地方の口承文学：内陸部住民のニヤニ・パンジャン (トゥナス E.)

リアウ州はスマトラ島のマレー半島に向かい合う地域で、記録に残る最も古いマレー人の王国のあった地方である。その内陸部にはマレー語方言を話す多くの先住少数民族がいる。本プロジェクトはそのうちの一つプタラガン族

の口承文学ニヤニ・パンジャン (長い歌) を記録し、これをインドネシア語に直して出版しようとするものである。

この口承文学ではリアウ地方の諸種族の歴史、彼らの慣習法などが語られており、この地方のマレー系諸種族の歴史や古い文化、価値体系などの研究に貴重な資料となる。今日では、これらの口承文学の語り手の数も少なく年老いており、現代的娯楽が浸透するにつれ語られる機会も少なくなってきて近い将来になくなってしまおうと思われる。その前に記録に残そうとするのが本プロジェクトの目的である。

2. スラウェン南部の沿岸地域の社会

(ムフリス)

本プロジェクトは1986年度に助成したプロジェクトの第2年度である。本プロジェクトは3年間にわたってスラウェン島南部の漁村を中心とした沿岸社会をさまざまな角度、アプローチから総合的に研究しようとするものである。プロジェクトでは、毎年10名程度の研究者が個別テーマをもって研究を行い全体として総合的研究を目指している。

第1年度では「沿岸社会の社会と経済」という総合テーマの下に10名の研究者が個別研究を行っている。これらは、漁民の移動、漁村での女性の役割、養魚池の経営、雇用機会、伝統漁法にみられる資源保護のためのタブー、内陸部と沿岸部の関係、漁村の抱える現代的諸問題、漁村の生活水準と地域格差、沿岸社会での児童の教育の問題、漁民の宗教と社会経済状況の関係の10の個別テーマである。第2年度は「沿岸社会の社会史」の総合テーマの下に10名ほどの研究者が研究を行う予定である。

3. スルック：ジャワのイスラム教徒の神秘詩

(シムフ)

15世紀頃にジャワにイスラム教が入って以降のジャワの文学は、①ヒンドゥー・仏教とイスラム教の混淆により生じた詠唱詩、②短型のイスラム宗教詩であるスルック、③イスラム的に装われた長文の叙事詩の三つに大別される。本研究は、従来あまり研究のない短型宗教詩スルックについて包括的に研究しようとするものである。

本プロジェクトでは、①すでに収集されオランダ、イギリス、インドネシア国内のさまざまな図書館などに残されているスルックの目録化、および未収集のスルックの収集、②アラビア文字またはジャワ文字で書かれた文書の形で残っているスルックのローマ字への翻字、およびインドネシア語へのその一部の翻訳、③翻字したテキストの出版、④スルックに現れる重要語や難解な語彙の辞書作りを、3年間かけて行う予定である。イスラム宗教詩スルックはジャワ伝統文学の重要な一部を成し、ジャワ研究に貴重な資料を提供するものである。

4. バリの歴史関係貝葉文献の翻字、翻訳

(A. A. G. P. アグン)

本プロジェクトは1985年度、86年度に助成したプロジェクトの第3年度である。本プロジェクトは今日までバリに残るロンタルと呼ばれる貝葉文献のうち歴史関係の貝葉文献の目録を作成し、またそのなかから特に重要な何点かについて翻字と翻訳を行おうとするものである。

第1年度にはいくつかの博物館や個人所有の約200点の歴史関係貝葉文献の目録を作成した。第2年度にはバリの二つの地方の歴史に関するバリ文字で書かれた貝葉文献をローマ字に翻字し、インドネシア語に翻訳した。一つは古いジャワ語で書かれた年代記で、もう一つはバリ語で書かれオランダに対する民衆の抵抗を綴った詩である。第3年度ではバリの一地方の王朝がロンボク島に版図を拡張した17世紀から19世紀までの政治状況、宮廷生活を扱った文書、および、バリ島全体を支配した支配層の拡大、ブラフマンと下層民の括り方を扱った史書の2点の翻字と翻訳を行う。

5. ミナンカバウ社会における近代的官僚制と伝統的権威 (イムラン M.)

本プロジェクトは1986年度に助成したプロジェクトの第2年度である。母系制というユニークな社会組織をもち、ナガリと呼ばれる地域共同体が強い連繫を保持するミナンカバウ族社会に、最近になって中央政府によって導入された近代的官僚行政が、その伝統的政治文化との間にどのような相互関係を生じさせているのかを文化人類学的に研究することを目的としている。

第1年度では、(1)オランダ統治以前のミナンカバウ社会の政治体系と権威の構造、(2)オランダ統治と日本軍政が権威構造にもたらした影響、(3)近代的官僚行政導入以前の村落自治の発展、(4)近代的行政制度に基づく村落行政の施行の4点に関する文献収集を行った。第2年度ではこれに基づいて、フィールド調査を行い、伝統的権威者である慣習法首長、村レベルでの行政官、一般の村人などへのインタビューを通じて一次データを収集し、データの分析、報告書の執筆を行う。

6. ミナンカバウ語に特有の語彙、連語、表現の研究 (ハイデイル A.)

本プロジェクトは1985年度、86年度に助成を行ったプロジェクトの第3年度であり、西スマトラ州のミナンカバウ族の言語に特有の語彙、連語、表現の研究を行おうとするものである。

第1年度ではミナンカバウ語に特有の語彙の研究を行い、インドネシア語と英語の翻訳をつけた語彙集として出版した。第2年度では連語つまり必ずいっしょに使われる特定の語彙の組み合わせについて研究を行っている。ミナンカバウ語には相当多数の連語があると予想されているが、なるべく網羅的に収集することを目指している。第3年度では連語の研究を継続するのに加えて、ミナンカバウ語に非常に多い慣用表現や格言を収集し解説をつけて出版する予定である。本プロジェクトの目的とするのは急速に変化しつつあるミナンカバウ語を記録に残すこと、また人造語である国語インドネシア語の表現をより豊かにするための素材を提供することである。

7. ブル島の孤立した民族ワカホロ族とその世界 (ムス H.)

本プロジェクトは1986年度に助成を行ったプロジェクトの第2年度である。研究対象であるワカホロ族はインドネシア東部マルク諸島のブル島内陸部に住む民族で、比較的最近まで孤立した状態にあったが近年政府により定住化政策が進められている。

本プロジェクトは文化人類学研究であり、①ワカホロ族の世界観、親族・家族体系、交換体系などの研究により彼らの伝統的社会的把握に努める他、②定住化と外界との接触によってもたらされた社会変化、文化変容を研究することを目的としている。第1年度では数次にわたる住み込み調査によって、ワカホロ族の分布調査、ワカホロ族の言語の習得等の基礎的作業に加え、世界観、宇宙観、信仰、出自、親族体系などについて一定のデータを収集することができた。第2年度では、さらに突込んで栽培と狩猟の慣習、儀礼、自然環境との関わり、空間時間概念、婚姻、子供の社会化などさまざまな面について調査を継続する。

8. アチェの封建領主ウレーバランの歴史研究 (ルスデイ S.)

本プロジェクトは1986年度に助成を行ったプロジェクトの第2年度である。スマトラ島西端のアチェの伝統的社会は、貴族、民衆、イスラム指導者層の三つの有力な階層の間の力関係がその歴史変化の源動力となってきた。貴族階層は、王であるスルタンと各地方の世襲制封建領主であるウレーバランから成り、ウレーバランはその領地に対して実質的支配を及ぼしていた。本研究では、ウレーバランのアチェ史における地位と役割、およびその変遷に焦点をあて、彼らの社会経済的基盤、生活様式、教育などの歴史研究を行う。

第1年度ではオランダ統治時代の記録・文献の収集、およびアチェの知識人とウレーバランの後裔へのインタビューを行い相当量のデータを蓄積した。第2年度はジャカルタに移り住んだウレーバランの後裔へのインタビューなどのデータ収集を続けるほか、データの分析および報告書の執筆を行う。

9. アチェのタルサン國の سلطان のイスラム法学者ジャラルディン・ビン・カマルディ
ンの著作に見られる裁判官についての考え方 (T. モハマッド J.)

インドネシアの法体系は他の近代国家と同様に西歐的法概念・法体系に相当部分依拠している。この近代法体系と無数の民族の伝統的慣習法の間をどのように調整するかはインドネシア人法学者にとって現在最大の問題の一つである。しかしながら慣習法というのは通常書かれたものではないので、その研究は人々の記憶という曖昧で不安定な情報によらなければならなかった。

本研究は、1740年にアチェ地方の实在の Sultan の命令により、あるイスラム法学者が裁判官について書いた文書という貴重な文献を使って、インドネシア固有の裁判官に対する考え方を探ろうとするものである。この文書は実際にアチェの法廷で裁判官がこれに則って裁判を行っており、アチェにおける法実践を体現している。本研究では、この古文書の翻字を行い一般の人が読めるようにし、また文書に基づいて法学的な考察を行う。

10. H. アブドウル・カリム・アムルラー・アドダナウ
イの著作に関する研究 (モハマッド S. L.)

1900年から1930年の間、西スマトラ地方でイスラム教の改革運動が起こった。この運動の内容は、教義の適用をめぐって新しい時代に対応できるように改めようとしたこと、およびイスラム教育に近代学校教育的要素を取り入れたことである。このイスラム改革運動は、やがてジャワに広がり、独立前後から今日に至るまでのイスラム諸組織の成立や政治運動に多大な影響を与え、その母体となった歴史的に大変重要な宗教改革運動であった。

本プロジェクトはこの宗教改革運動の第一の中心的宗教指導者の著作について研究を行おうとするものである。彼はこのように重要な人物であるにもかかわらず、その著作の研究はおろかその多数の著作物さえ世に知られていない。そこで、彼の著作を収集、目録化することから始め、重要著作をアラビア文字からローマ字に翻字し、必要な注や解説をつけ出版する。さらに、他のイスラム指導者の思想との比較研究も行う。

11. 東南アジアのイスラム

(タウフィック A.)

本プロジェクトは1985年度、86年度に助成したプロジェクトの第3年度である。本研究ではインドネシア各地、マレーシア、シンガポール、タイ南部、フィリピン南部にまたがる東南アジアのイスラム社会の比較研究を行うことを目的としている。また、西歐の植民地支配以前にゆるやかに成立していたと考えられる『マレー・イスラム世界』が、今日までどのように継承されてきているのかを研究し、さらに東南アジアのイスラムという広い視野から各地のイスラム社会や運動をとらえ直そうとする試みでもある。

第1年度には、インドネシアのジャワ、スマトラ、スラウェシとマレーシア、タイ、シンガポールを訪れ、イスラム知識人へのインタビューを行ったほか、関連文献を相当量収集した。第2年度ではタイ南部、マレーシア北部について同様の調査を行い、第3年度にはフィリピン南部とブルネイを含め、また報告書の執筆を行う。

12. バリの伝統医療関係員葉文献の目録作成

(I. K. スウイジャ)

バリにはさまざまな事柄について書かれた員葉文献ロンタルが多数残されている。これまで財団は、歴史関係の員葉文献の目録作り、重要文献の翻字と翻訳のプロジェクトへの助成を行ってきたが、本プロジェクトは別の研究者が別の分野、すなわち伝統医療関係の員葉文献について同様のプロジェクトを行おうとするものである。

本年度は、いくつかの博物館および個人所有の伝統医療関係員葉文献を調査し、各文献の所在地、分量、使われている言語、文字、およびその内容の概略などの情報を含んだ目録作りを行う。この作業の実施に当たっては、2人の伝統医療の治療師を助手に頼んで、彼らの伝統医療に関する知識、および人間関係を活用する予定である。

13. 北アチェの工業開発にともなう周辺社会の文化変容 (ダヤン D.)

本プロジェクトは1985年度、86年度に助成したプロジェクトの第3年度である。北アチェの近代的な大規模工業プロジェクト（LNGプラントと肥料プラント）が周辺の伝統的農村社会にもたらした社会的・文化的変容過程をさまざまな角度から総合的に研究しようとするものである。

第1年度は3名の研究者が、工業化に対する住民の認識の変化、インドネシア語の変化の社会言語学研究、工業化に伴う山地民族の移住の研究を行った。第2年度では10名程度の研究者が工業地域と周辺社会の社会的文化的相互作用を総合テーマに各々個別の研究を行っている。第3年度では、①工業用地から立ち退いた人々の再定住地のコミュニティの研究、②政府の行っているコミュニティ開発プロジェクトの評価・研究、③工業化に伴う女性の労働参加形態の変化、④他地域の事例との比較研究を10名程度の研究者が参加して総合的に進める。

14. インドネシアの諸民族言語との関連におけるインドネシア語の利用と発達 (E. K. M. マシナンボウ)

無数の島々から成るインドネシアには、300以上の民族集団、250以上の言語があるといわれてはいるが、いまだかつてこれを定量的に研究した事例はない。独立以降、国語として定められたインドネシア語が実際にどれほどの人々に話されているのかについての定量的な研究もない。

本研究は1980年に行われた国勢調査中の二つの設問、①インドネシア語を日常的に使いますか、②そうでない場合何語を使っていますか、に対する全国民からの解答を基に、上述の問題に初めて答えようとする試みである。本プロジェクトでは、第1に国勢調査データの信頼性を測るために、既存の小地域を対象とした定量的言語調査、および独自に行う使用言語の変化に関する定性的調査を国勢調査のデータと比較検討する。その後、国勢調査のデータをコンピュータで解析し、既存の言語学的知見と突き合わせながら、インドネシアの言語地図を作成する。

15. スンダ地方文献のマイクロフィルム作成

(エディ S.E.)

本プロジェクトは1981年度、82年度に助成を行ったプロジェクトの第3年度である。5年前のプロジェクトでは、西ジャワ地方（スンダ地方）に残る多数の古文書の目録作りを行い、この成果はすでに高く評価されている。

本プロジェクトではこの目録をもとにして、古文書の保存のためにこれらを全てマイクロフィルムに撮影することを目的としている。西ジャワの18の地方ごとに研究協力者によってその地方の古文書を1箇所を集め、撮影機を持ち込んで集中的に撮影を行う。フィルムのポジは国立公文書館に保存され、3セットのネガが大学、中央図書館を含む3箇所に備えられ研究者の利用に供される予定である。また併せて、前回の助成により作成された目録の改訂版の編集、出版も行う。

16. 19世紀ジャワの強制栽培制度に対する農村の反応

(ジョコ S.)

本プロジェクトは1986年度に助成したプロジェクトの第2年度である。本研究は、19世紀中頃にオランダがジャワ農民に対して、納税義務の代わりにその土地の5分の1に輸出用商品作物である砂糖きびやコーヒーの栽培を強制した、悪名高い強制栽培制度を、ジャワ農村の立場からとらえ直そうとする研究である。その目的とするのは、強制栽培制度導入による灌漑や流通の革新、資本主義経済の浸透による農村の変化、農民の価値観の変化などを明らかにすることによって、農村がどのように反応し対応していったかという、ジャワ農村の側のダイナミズムを描き出すことである。

第1年度はインドネシア国内の文書館、図書館などで、オランダ統治時代の研究論文、植民地政府報告、同時代の雑誌等多くの資料を収集、読了した。第2年度は同様の作業をオランダで行うほか、報告書の執筆も行う。

17. ブギス・マカッサル文字タイプライターの製作と寄贈 (サラフディン)

本プロジェクトは1985年度に助成したプロジェクトへの追加助成である。本プロジェクトでは、南スラウェシのブギス族とマカッサル族の固有文字であり、これを使って多くの古文書も残されている文字のタイプライターを日本で製作し、研究者・研究機関に寄贈することを目的としている。現在、この種の特殊文字のタイプライターの製作のできる所は日本の1箇所の製作所だけであり、ここに依頼してタイプライターの製作を進めるとともに、日本人研究者に依頼して文字のデザイン等の作業を進めてきた。

この文字の独特の形状のため、製作上に幾つかの問題が生じ、当初の見積もりより多くの開発経費が必要となった。本助成はこのための追加助成である。

18. 貝葉文献の保存、記録、翻字、インヴェントリー作成、マイクロフィルム化に関するセミナー (ラタナウォン H.)

ラオスの歴史、文化を研究するに当たって、社会のさまざまな様子や年代記を綴った貝葉文献は貴重な資料となる。しかし、これらの貝葉文献はラオス全土に散逸し、なかには無人の寺や村に放置されていたり、盗賊に持ち去られてしまうなど、保存状況は良くない。そのうえ、貝葉文献を読める人の数も非常に少なくなっている。

本プロジェクトは、ラオスの芸術・文学研究所が中心となって、貝葉文献の保存、記録、翻字、インヴェントリー作成、マイクロフィルム化に関するセミナーを1988年3月にヴィエンチャンで開催しようというものである。セミナーには、全県の文化担当官、ヴィエンチャン所在の研究所、大学等の研究者が参加し、貝葉文献の重要性に対する一般の認識を高めるための方策、現存する貝葉文献の所在の把握の仕方、貝葉文献を保存していくためのフレームワーク等を話し合う予定である。

19. ラオス伝統医療のマニュアル作成

(ソムモニ P.)

ラオス国内では、現代医学による医薬品が不足しており、また一般民衆の伝統的医療に対する信頼度は依然として強く、現在でも伝統医療の役割は重要である。

本プロジェクトは、西欧医学を修めた医師が、ラオス伝統医療の権威である医師と共同で、近年ラオスの幾つかの組織で書かれた伝統医療に関する本を吟味し、また新たにヴィエンチャンの多くの医療センターの伝統医療専門の医師達にインタビューして伝統医療に関するデータを収集・分析し、より充実した伝統医療の本を編集して一般民衆の利用に供しようとするものである。病気の症状、分類に比重をおいたこれまでの伝統医療書に対して、編集を予定している本は、詳細な処方箋(薬草の種類、利用方法)を盛り込むことに重点をおいて執筆し、1,000部印刷する予定である。

20. 国立美術学校用の教科書の編集・印刷

(ルク S.)

ヴィエンチャンにある国立美術学校は、1958年に中等部が設立されたのに続き、1978年には高等部が作られ、卒業生はラオス各地の小・中学校の美術の教師となっている。しかし同校には、授業で使える教科書が1冊もなく、教師が口述で教授する内容すべてを生徒がノートに書きとめる方法を取っているため、授業の進み具合は非常に緩慢であり、また課外に自習することも難しい。

本プロジェクトは、同美術学校の教師が中心となって「色彩の理論」に関する教科書を執筆・編集し、4色刷で1,000部印刷して授業で利用しようというものである。また印刷した教科書は、ラオスの地方都市ルアンプラバンおよびサワンナケートにある美術学校へも配り、授業に役立ててもらおう予定である。

21. 国立音楽舞踊学校用の教科書の編集・印刷

(ボウパチャン K.)

あし笛「ケーン」と弦楽器「ソウ」はラオスの伝統的民族楽器であるが、その演奏技術は現代の若者の世代にはあまり伝えられていず、演奏できるラオス人はきわめて少なくなっている。

本プロジェクトは、ヴィエンチャンの国立音楽舞踊学校でその伝統楽器ケーンとソウの演奏方法を教えるための教科書を編集し、印刷しようというものである。これまでに同音楽舞踊学校の先生たちが、だれにでも容易に楽譜が読めてその伝統楽器が演奏できるようにと、楽譜を数字で表記する方法を考案した。この新しい教授法を利用してケーンとソウの教科書を編集し、1,000部印刷する予定である。教科書は、将来ラオス各地の学校で教員となる同校の生徒たちに伝統楽器の演奏方法を教える際の教材として利用される予定である。

22. 『社会科学ジャーナル』の発行

(S. フセイン A.)

本プロジェクトは1982年度、83年度、84年度、85年度に助成を行ったプロジェクトの第5年度である。本プロジェクトで発行される雑誌「Ilmu Masyarakat」(「社会科学」)は、マレーシア社会科学会が編集、発行する季刊の学術雑誌である。毎号とも社会科学の諸分野、経済学、社会学、文化人類学などの広い分野の論文を掲載し、用語は英語又はマレーシア語で、マレーシアのみならず東南アジアの他の国々の研究者からの投稿論文も掲載している。財団の4年間にわたる助成の結果、マレーシア国内においては最大の発行部数の学術誌に育ち、東南アジア地域全体をカバーする総合的社会科学誌という当初の目的に向かってある程度の発展をとげている。しかしながら、自立して雑誌の発行を継続できる財政的基盤はいまだ確立できず、今後さらに数年間の助成が必要な状況にある。

23. 村落社会からプランテーション労働者へ——マレー半島東海岸のマレー人の地方レベルにおける文化変容と社会変化 (W. ザワウィ L.)

本研究は、1972年から75年の間に申請者が行った、マレー半島東海岸の農村部マレー社会の近代化に伴う文化変容と社会変化についての研究を、15年後に再調査し全体で約20年間の社会変化の研究としてまとめモノグラフとして出版しようとするものである。

対象となるのは、伝統的マレー農村がプランテーション農園に変わり、それにつれ自営農民がプランテーション労働者へと変化している地方コミュニティである。本研究では、農園労働者の背景(出身村、以前の職業、村を出た理由)、社会・文化的組織および政治組織の発達(この20年間にどのような組織、リーダーシップの構造が出現したか)、プランテーションでのサブカルチャー(新しい文化的規範、社会関係の出現)、プランテーションでの労働状況と労働者の考え方の変化などの諸点につき住み込み調査に基づいて、社会学的方法および文化人類学的方法を併用して研究が行われる予定である。

24. マレー古文書トウファット・アルナフィスのファクシミリ版作成 (シヤハリル T.)

本プロジェクトの対象となる古文書トウファット・アルナフィスは、マレー人の手によってマレー社会の歴史を書いたもので、すでに本プロジェクトの版とは異なる版が編纂、出版されている名高い文書である。

本プロジェクトでは最近東海岸のトレンガス州で発見された新しいテキストを写真にとって印刷し、解説を付けて出版することを目的としている。このトレンガス版は、最も遅れてイギリスに支配されたトレンガスのスルタン家から流出したものとみられ、その内容が既存の版とかなり異なっているほか、マレー語アラビア文字の文書の書体、装飾等も大変優れたものである。この文書は、マレー史研究、マレー文学研究に新たな材料を提供するものとして史家により重要な文書と判断されている。そこで、このファクシミリ版を作成し、マレーシア国内のみならず世界中のマレー研究者に利用できるようにすることを目的としている。

25. 東南アジアのアラブ人：歴史・社会学的研究

(オマール F.)

東南アジアとアラブ世界との間の経済関係は、1,000年以上も前から存在するが、その関係が文化、美術、文学、教育、政治の分野で飛躍的に進展するのは、アラブ貿易商とイスラム伝道使節団が東南アジアのイスラム共同体に積極的に働きかけてからである。商業、金融、教育、宗教、法体系、外交、政治の諸分野でのアラブ人の役割は東南アジアに大きな影響を与えた。

本研究は、東南アジアのイスラム研究のなかでも、アラブとの関係、また東南アジア地域全体を広く扱う。

本プロジェクトでは、東南アジア各国、アメリカ、イギリスでの文献調査と、東南アジア各国のアラブ人コミュニティでのフィールド調査および中東のジェッダ、メッカ、カイロでの文献研究およびフィールド調査を行い、従来まとまった研究のない東南アジアのアラブ人の歴史、社会学的研究に先駆的業績を残そうとするものである。

26. 古典ネワール語辞書編纂

(P. B. カンサカール)

本プロジェクトは1985年度、86年度に助成を行ったプロジェクトの第3年度である。

本プロジェクトで編纂される辞書は、これ以前に3年間の助成により編纂された古典ネワール語小辞典を核に、新たに多数の分野の古文書を語彙収集の対象として編纂される古典ネワール語辞書である。第1年度では戯曲5点、物語7点、宗教および哲学的作品3点の古文書を対象に語彙の収集が行われた。第2年度では詩と歌に分類される古文書が対象となるが、これまでのところ5点の古文書が選ばれて語彙収集、編纂の作業が進められている。第3年度では歴史文献、およびその他の古文書が対象となるが、重要な歴史文献1点、碑文4点、近年編集された歴史文献集8点などを対象に語彙収集が行われる予定である。抜き出された語彙はカード化され、古典ネワール文字から現代文字に翻字され、語義が付されて、コンピュータを使った編纂作業が行われる。

27. カトマンズ盆地の美術品の写真インヴェントリー

(L. S. バンデル)

本プロジェクトは1985年度、86年度に助成したプロジェクトの第3年度である。

ネパールのカトマンズ盆地には町のそこそこに無数のヒンドゥー教や仏教の神像、仏像があり、貴重な文化遺産となっているが、近年心ない人々に盗まれ世界の美術市場で売られる事例が非常に多く、美術品保護の観点から危機的状況に瀕している。そこで、本プロジェクトでは現存の彫刻を確定し、その所在地、彫刻の内容を記した写真によるインヴェントリーを作成し、美術品保護の第一歩を踏み出すことを目的としている。第1年度、第2年度では盆地内のバクタプール、パタン、カトマンズ、および周辺の小都市での美術品確定のためのフィールド調査、写真撮影、所在地を示すための詳しい地図の作成の作業が行われ、相当程度の作業が終了している。第3年度ではこの成果を2巻本の本としてまとめ、出版する予定である。

28. ネパール諸語の古文書の保存と記録

(P. R. トウラダール)

本プロジェクトは1984年度、85年度、86年度に助成を行ったプロジェクトの第4年度である。

本プロジェクトはネパールの貴重な文化遺産である古文書の個人的収集家数名のコレクションの散逸を防ぎ、研究者に利用の便宜を図るため、小さな古文書館を設立することを目的としている。第1年度では古文書コレクションのカードとカタログ作りを行い、第2年度は古文書館用の家を購入し、第3年度では家の改装、備品の据え付けなどの作業を行い、1987年12月に古文書館はオープンした。この間に新たな古文書の寄贈者も現われ、コレクションはますます充実し、内外研究者からの問い合わせも出始めている。

本年度の助成は、今後の古文書館運営の方法、必要な資金等について見通しを立てるための1年間の運営経費の助成である。この1年間で、上記の点につき見通しを立てる予定である。

29. ネパール文化百科事典

(K. K. B. シャー)

本プロジェクトは1985年度に助成したプロジェクトの第2年度である。

中国とインドの二大文明に隣接するネパールはさまざまな民族が居住し、また両文明の古い遺産を今日まで残していると同時に、ヒマラヤ地帯独自の豊かな文化を育んできた。本プロジェクトではこのネパールの文化についてこれまでに行われてきた幾多の研究成果を集大成して、文化百科事典として出版することを目的としている。

第1年度では各国の百科事典編纂の経験に学ぶために、日本、インドネシア、タイにスタディ・ツアーを行い五つの事典編纂プロジェクト担当者にヒアリングを行った。この成果に基づいて、ネパール文化百科事典の全体構想をまとめ、収録する項目の見出し語構成の草案を作成するところまで作業を進めた。同時に広く関連文献の収集も進めている。本年度では見出し語構成草案を内外の識者の意見を集めて改訂し完成させることに重点をおく。

30. 中世ネパール碑文研究

(D. ヴァジラチャルヤ)

本プロジェクトは1986年度に助成したプロジェクトの第2年度である。

本プロジェクトはネパール中世(879年～1769年)の1,500点以上の碑文の拓本を収集し、これの翻字、翻訳、注釈、英文要約をつけて出版しようとするものである。従来ネパールの中世の碑文についてのまとまった研究、資料集がなく、本プロジェクトの成果となる出版物は多くのネパール研究者に待望されているものである。

碑文は4期に分けられ、第1年度ではそのうち、ごく初期の碑文(879年～1484年)とラリットプール王国の碑文(1482年～1768年)を扱う。これらの碑文について、既存の拓本の収集、その翻字、さらに新しい碑文の調査、拓本作り、翻字の作業がほぼ完了し、ごく初期の碑文については成果の出版が予定されている。第2年度ではカンティプール王国の碑文について、第3年度ではバクタプール王国碑文について同様の作業を行う予定である。

31. ヴィサヤ地方とミンダナオ地方のイエズス会派教会の歴史的研究：

1581年～1768年, 1859年～1921年 (R. B. ハヴェリヤーナ)

イエズス会派はフィリピンのヴィサヤ地方とミンダナオ地方の町の形成に大きな影響を与えた。イエズス会派はフィリピンから追放された期間を除いて、教会を中心とする布教活動を、当時のフロンティアであったヴィサヤ地方とミンダナオ地方で行ったのである。

本プロジェクトは、フィリピンでイエズス会派が布教活動を行った二つの時期に、セブ島、ボホール島、サマル島、レイテ島、カミギン島、ミンダナオ島に建てられ、現存するイエズス会派教会を調査対象とし、以下の3点を目的として行われる。①イエズス会派教会の建築と芸術的様式の歴史を書く。②イエズス会派教会の現存するもの、またその旧跡を写真で記録し、平面図や立面図等の実測を行う。③古文書を使った文献研究により、教会の建てられた町や教会の歴史を書く。研究成果は本として出版される予定である。

32. フィリピンの土着イスラム建築に関する写真による予備調査

(A. T. ティアムソン)

本プロジェクトは、ミンダナオとスルーにみられるフィリピン土着のイスラム建築、すなわち礼拝所(モスク)、宮殿(トロガン)、要塞(コタまたはクタ)の地理的分布を調べ、その民俗学的特徴を明らかにするための、写真による予備的研究である。これらの建築物はフィリピンのオリジナルな要素とヒンドゥー、マレー、中国、中東の影響が混在する建築的特色、美術的モチーフとパターンを有する。

調査は、建築物を写真に撮り、必要な場合にはイラストレーションを作成し、建築物について知っている人をインタビューし、文献を統合して行う。写真を分類し、共通点と相違点が明らかなものを選び出し、地理的分布、影響(フィリピン土着または外国)、アクセスの難易について調べる。

33. 18世紀におけるフィリピン聖職者の起源

(L. P. R. サンチャゴ)

現在のフィリピン社会においてカソリック教会の果たす役割は大きい。国民の多数を占めるカソリック信者は、彼らの日常生活の指針および精神的支えとして、教会の聖職者達の教えを請う。したがって、現在のフィリピン社会およびそのなかでの聖職者の役割を理解するために、フィリピン人の聖職者の起源を研究することは重要なことである。フィリピン人の聖職者は、18世紀に当時宗主国であったスペインから派遣されたマニラの大司教がフィリピン人を司祭に任命したことから始まる。しかし当初のフィリピン人聖職者に関する、当時のスペイン人宣教師による記述は、歪められている。彼らは実際にはスペイン植民地権力とフィリピン人との間のピース・メーカーとしての役割を果たしていたと考えられる。

本プロジェクトは18世紀のフィリピン人聖職者に関する正しい理解を得るために、聖職者を分類し、それぞれの特徴、社会での役割を文献調査により明らかにする。

34. フィリピンの地方史に関するスペイン語古文書の調査

(M. B. D. アランパイ)

本プロジェクトは、1985年に助成したプロジェクトの第2年度である。フィリピン地方史研究促進の基盤づくりとして、歴史学者に役立つ資料の質的および量的な概要を明確にするため、主な歴史公文書館の地方史に関連する文献目録を作成する予定である。

調査は、フィリピンとスペインの公文書館において行われ、以下の内容を含むインヴェントリーを作成する。

①古文書のタイトル、②古文書が書かれた年代、③出処、④古文書のなかに含まれている特定の州、市、町、地区等に関する情報の概要と注釈。第1年度には、ドミニコ会の古文書館、マニラ大司教区古文書館、国立古文書館所蔵の古文書、および各教派から出版されている古文書コレクションの調査を行った。第2年度には、スペインのマドリッド、セヴィリヤ、バルセロナ等6都市にある各教派の古文書館で調査を行う。両年の調査結果を統合した古文書目録を作り、出版前に評価を依頼する。

35. マノボ族の叙事詩『ウラヒーガン』の記録、翻訳、編集

(E. G. マキツ)

マノボ族はミンダナオ島、北コタバト州に住む山岳少数民族で、「ウラヒーガン」という口承の叙事詩をもっている。「ウラヒーガン」は最高の神に選ばれたマノボ族の一族がさまざまな困難に直面しながらも、この神への信仰を捨てず、最終的にこの世のものとも思われない天国と不死の生を与えられるという物語である。隠喩、頭韻、対句、シンボリズム等の文学的手法が使われるこの伝承文学は古代ギリシャの叙事詩との比較にも値するものである。

本研究者はこの叙事詩の美しさに26年前から関心をもち、1977年には序言と一つの挿話を1冊の本にまとめて出版したが、資金不足のため研究は中断せざるを得なかった。今回はこの研究を続行するもので、詠唱される叙事詩をテープに記録し、それを書き取り、英語に翻訳し、編集する作業を行う。最終的にはオリジナルをローマ字表記したテキストと英訳の原稿を作成する。

36. フィリピン社会の連続性と変化——南コタバトの経験：1913年—1986年

(D. M. ノン)

本プロジェクトは1986年度に助成したプロジェクトの第2年度である。ミンダナオ島はフィリピン最後のフロンティアであり、多くのキリスト教徒が「将来の土地」を求めて移住していった。しかしそのため、ミンダナオの先住民イスラム教徒グループと山岳少数民族は混乱し、彼らの社会・文化・政治生活は絶え間ない危機に瀕した。

本プロジェクトはミンダナオへのキリスト教徒の移住が、政府によって、どのようにミンダナオの国家への統合の道具として用いられたかに焦点をあて、南コタバトの移民史に関する包括的な研究を行うことを目的としている。第1年度には、マニラにある図書館、私蔵コレクション等の資料、およびマラウイ市、ジェネラル・サントス市の図書館等所蔵資料の研究を行った。また、南コタバト州の各地でインタヴュー、地誌調査も行った。第2年度は、その研究報告書の執筆と印刷を行う予定である。

37. フィリピン農村社会における医療信仰とその選択

(M. P. ディアス)

本プロジェクトは1986年度に助成したプロジェクトの第2年度であり、フィリピンの農村コミュニティの医療信仰およびその信仰が人々の病気治療にどのように関係するかについて調査することにある。調査対象となる農村は多様なヘルス・ケア・システムを有しており、西洋医療はその一部にしかすぎない。そのほかに薬草による治療の多様性は第3世界の農村コミュニティでは一般的であり、農民は多様な治療法のなかから選択しなければならない。本プロジェクトでは、このような選択がどういう理由でなされるのかについての説明を試み、治療法選択のモデルを提示する。

第1年度は、マニラの北65kmに調査対象地を決定し、無作為抽出で65世帯を選定してインタビューを行った。また伝統的治療師等からのデータも収集した。第2年度は、フィールド調査を完了し、データ分析を行って研究報告書を執筆する予定である。

38. ネグロス・オクシデンタル州の社会・文化・経済史 ：1850年—1985年

(V. L. ゴンザガ)

本プロジェクトは、1985、1986年度に助成したプロジェクトの第3年度である。フィリピンのネグロス島、ネグロス・オクシデンタル州ではサトウキビの栽培がアシエンダ（大農園）で行われており、それを所有するネグロス人は大きな権力を握っていた。しかし、世界市場における砂糖価格の下落により砂糖産業は壊滅し、現在アシエンダからは多数の失業者が出、そのなかには飢餓に直面しているものも多く、社会問題となっている。

本プロジェクトは、ネグロス島の現在の社会経済的危機の歴史的背景を明らかにすると同時に、ネグロスの社会史、文化史を補うことも目的としている。第1、2年度には、フィリピンおよびアメリカの公文書館で1850～1985年の歴史文献を収集した。第3年度は、同時代の砂糖産業に関する歴史研究、アシエンダの所有者、労働者、山岳少数民族を対象とした民族誌調査を行い、報告書にまとめる予定である。

39. アメリカ支配から現在に至るまでのネグロス・オリエンタル州の歴史

(C. A. ロドリゲス)

本プロジェクトは1986年度に助成したプロジェクトの第2年度であり、1901年のアメリカ統治下における文民政府の樹立から1986年に至るまでのネグロス・オリエンタル州の歴史研究である。本研究者は同州の地方史について、アメリカ支配以前の歴史について本を執筆しており、本プロジェクトはこの第1巻に続いて、ネグロス・オリエンタル州史を完成させるものである。

ネグロス・オリエンタル州はフィリピン中部ネグロス島に位置する州であり、ネグロス・オクシデンタル州とは同じ一つの島にありながら、高い山地によって隔てられ、異なった文化を有している。

第1年度には、フィリピンの公文書館で文献調査を行うと同時に、ネグロス・オクシデンタルの31の町でインタビューと文献調査を行った。第2年度は、アメリカの公文書館、研究センター等で文献調査を行い、第3年度に2年間の研究に基づいた報告書を執筆する予定である。

40. 古典マラナオ語の語彙および句に関する辞書

(B. アル・マカラヤ)

本プロジェクトは1986年度に助成したプロジェクトの第2年度である。本プロジェクトは、1985年度より当財団の助成対象者となっている「マラナオ族の叙事詩『ダランガン』の出版」と密接に関係しているもので、『ダランガン』の翻字・翻訳を行う過程で、古典マラナオ語辞書を編纂しようとするものである。

編纂される辞書には、1万語を超える古典マラナオ語および語句が基本的な語彙項目として含まれ、それに対応または類似する英語も記載される。語彙項目を調査する際には、マラナオ語の語源、音素、音韻、統語、意味、さらに用語法に関する調査が行われる予定である。

第1年度には、『ダランガン』等の古典マラナオ語テキストおよび古典マラナオ語で行われた公的集会・演説などからデータ収集を行い、インデックスカードへの記入、その内容のチェック、辞書原稿の作成を行った。第2年度は、これらの作業を完了させて辞書の出版を行う。

41. セブアノ文学選集：1801年—1985年

(R. B. モハレス)

本プロジェクトは1986年度に助成したプロジェクトの第2年度である。近年、フィリピン地方文学に対して高い批評的関心が寄せられてきた。これはフィリピン文化の等質化傾向に対して、地方伝統を守り、地方のアイデンティティを明確にし、そして“国民文化”の構成要素としての地方伝統を保存、振興する必要があるとの考えに基づいている。

本プロジェクトは、フィリピンで母語とする人口が最も多いセブアノ語の文学（詩、フィクション、戯曲）を歴史的に調査し、それらの作品のなかから秀逸した代表的な作品を選出し、原語と英語訳を出版することを目的としている。第1年度は詩のオリジナルとその英語、解説から成る本2巻を出版した。第2年度は、小説に関して同様のことを行う。第3年度には戯曲を扱うが、3年間で5巻出版し、各巻には所収作品の背景を解説する評論を序文につける予定である。

42. マラナオ族の叙事詩『ダランガン』の出版

(M. D. コロネル)

本プロジェクトは1985、1986年度に助成したプロジェクトの第3年度である。フィリピン、ミンダナオ島、ラナオのマラナオ族はフィリピン第2のイスラム教徒グループで、スペイン統治時代もキリスト教化されることなくその伝統を保持してきた。このマラナオ族はその民族の遺産ともいべき叙事詩『ダランガン』を有している。

『ダランガン』はマラナオ族がイスラム化される以前から口承で伝えられた叙事詩であるが、イスラムの到来とともに変形アラビア文字キリムで記録された。

本プロジェクトは、全容17巻から成る『ダランガン』について、キリム文字をローマ字表記に翻字した古典マラナオ語のテキストに、英訳をつけた形で出版することを目的としている。第1年度には、第1巻を出版し、第2年度もそれに引き続いて第2、3巻を出版した。第3年度には、第4、5、6巻を出版し、資金が許せば第7巻も出版する予定である。

43. ワライの伝承：レイテ地域の地方史と社会変化

(J. B. ポロ)

本プロジェクトは1985、1986年度に助成したプロジェクトの第3年度である。フィリピン社会は豊かな伝統文化と民俗的生活様式をもっているにもかかわらず、その現れである伝承が記録され、分析されることは少なかった。それらの伝承にはフィリピン民衆の世界観が象徴的に様式化された形で表現されている。

本プロジェクトは、ヴィサヤ地方の言語の一つであるワライ語が話されているレイテ島に伝わる伝承の総合的な記録を目指した初めての試みであり、また、レイテ島の地方史を研究して、伝承が生まれた歴史的な脈を探るものである。第1、2年度には、レイテ島の地方史と文化・伝統に関する文献目録を作成し、フィールド調査で同地域に広くみられる神話、伝説、儀礼を収集した。第3年度には、本研究者の出身地マリピビ島での農業・漁業の儀礼を観察、記録し、また15のバランガイから抽出した100人に経済・社会調査を行い、報告書にまとめる。

44. フィリピン演劇の歴史とアンソロジー

(N. G. ティオンソン)

本プロジェクトは、1985、1986年度に助成したプロジェクトの第3年度である。本プロジェクトは、過去10年間伝統演劇と現代演劇の記録を行ってきたフィリピン演劇研究の第一人者が、自身のこれまでの研究の実績を踏まえて、以下のように研究する。①フィリピン演劇の包括的な歴史を書く。②さまざまな演劇様式を、フィールド調査と文献調査により記録する。③主要な演劇様式の代表的作品の完全な脚本を原語で再現し、英訳と注釈をつける。④これらの様式の主要な作品の注釈付きの目録を作成する。

第1年度には、41の演劇の歴史と上演の側面について演劇関係者にインタビューを行った。また、さまざまな形式の演劇の概要を作成し、演劇に関する文献の目録作りも行った。第2年度には、代表的劇の記録、翻訳を行い、主要な演劇フォームについて論文を執筆した。第3年度は、原稿を最終的に編集し、出版する予定である。

45. 異文化間交流的視点から見たダバオの3民族グループ (H. K. グロリア)

本プロジェクトは1985、1986年度に助成したプロジェクトの第3年度である。フィリピン、ミンダナオ島東南のダバオ地域は、多数の民族グループの存在によって、文化変容、文化包摂、同化等が進展している。

本プロジェクトは、現在、急速に変化を遂げているこれらの文化を記録し、保存するために、三つの文化グループの相互関係を研究する。それらの3文化グループとは、①キリスト教徒（ヴィサヤ族）、②イスラム教徒（マギンダナオ族）、③非キリスト教徒、非イスラム教徒少数民族（バゴボ族）である。

第1年度には、フィリピンとアメリカの図書館や公文書館での幅広い文献調査が行われた。第2年度には、3箇所ですべて同時にフィールド調査を行い、民族誌、社会調査、オーラル・ヒストリーの手法を使ってデータを収集した。第3年度には、データ分析、統合、解釈を行い、最終報告書を執筆する予定である。

46. パッシングの歴史：1572年—1987年

(C. テック)

本プロジェクトはフィリピンで第4番目に設立された古い町、パッシングの多くの家に伝わっている古文書を利用してパッシングの歴史を書こうといういままでにない試みである。

これらの古文書は土地所有、土地境界をめぐるいさかひ、役職への任命、土地台帳、教会への土地寄進、借金の支払いなどについて書かれた、地方文書と呼ばれる古文書である。これらの古文書は湿度の高い気候、洪水、火事等のほか、家を継いだ人の不注意や関心のなさによって失われてしまうおそれがあるので、早急に調査を行う必要がある。家に伝わる古文書を部外者にみせながらない場合が多いが、幸い本研究者はこの町の古い家柄でアプローチがしやすい。

本プロジェクトは、個人の家に伝わる古文書の調査に加えて公文書館の古文書の調査を補足的に行い、パッシングの歴史を執筆することを目的としている。

47. セブの植民地教会の歴史的研究——その建築および美術的特徴：1590年—1890年 (C. S. タマヨ)

本プロジェクトは1986年度に助成したプロジェクトの第2年度である。フィリピンにおけるスペイン植民地支配勢力の最初の上陸地セブは、カソリック伝道活動から最初に影響を受け、現在もスペイン植民地期の石づくりの教会が多く残されている。しかしこれらの建物は急速に壊れつつあり、その歴史的意味や建築的様式に対する少しの配慮もなしに、現代風に改築されつつある。

本プロジェクトの目的は、セブ島の植民地教会の背景として、セブのキリスト教化について歴史的説明を行い、35の植民地教会建築について、装飾に使われている外国および土着の美術的影響の両方を評価しつつ記録し、植民地時代からの遺跡の保存に向けて、人々の認識を高めることである。第1、2年度には、セブ州の教会の記録、および文献調査を行った。第3年度には、それらの研究成果を、教会の平・立面図等の建築デザインおよび美術的装飾に関するデータを載せて出版する。

48. 北部フィリピン、パンガシナン州の政治・社会経済・文化史：1901年—1986年 (R. M. コルテス)

本プロジェクトは1985、1986年度に助成したプロジェクトの第3年度である。フィリピンの歴史研究にはあまりにも多くの欠落部分があるため、決定的なフィリピン国史はまだ完成していない。これらの欠落部分を埋めるためには、フィリピンのさまざまな地方史を再構成することが必要である。

本研究者は、地方史研究の草分け的役割を果たしており、現在までにパンガシナンの歴史について、1572～1800年までの時代と1801～1900年までの時代についての2冊の研究成果を出版している。本プロジェクトは、以上の二つの研究に続くものであり、1901～1986年までのパンガシナンの政治・社会経済・文化史を書き上げる予定である。第1年度には、フィリピンの公文書館で文献調査を行い、第2年度には、パンガシナンでの聞き取り調査が行われた。第3年度には、調査データに基づき執筆を行う。

49. マニラ社会史：1765年—1898年

(M. L. T. カマガイ)

スペイン植民地時代のマニラ社会のダイナミクス、すなわち、各社会階層間の関係、また外国人コミュニティを形成していたスペイン人、イギリス人、中国人、日本人等の外国人グループ間の相互関係について分析した全体的な研究はいまだなされていない。

本プロジェクトは金持ちと貧困層、イントラミューロス（壁に囲まれた町）の住民とその他の住民、若者と老人、男と女、等の生活を記述することによりマニラ社会の特色と多様性を明確にしようとするものである。これらのグループの不平等と対立についても記述する。またマニラ社会の全体的構造へある種の安定をもたらそうとした試みの例として、宗教と教育の効果を論じる。

方法論的には、マニラの公文書館等での文献調査を行うが、特に当時のマニラ社会の雰囲気をとらえるために、文学、歌、聖像画等の、いまだあまり使われることのなかった資料を第1次資料として使う。

51. フィリピン社会史：1663年—1765年

(M. C. ゲレロ)

本プロジェクトは1986年度に助成したプロジェクトの第2年度である。フィリピン史における1663～1765年の期間は、沈黙の1世紀とみなされることが多く、そのため、歴史学者や社会学者から、当然値すべき十分な注目を受けてきていない。この期間は、約300年にわたるスペイン支配の中間世紀であり、それ以前、およびそれ以降については詳細な研究がなされてきたが、スペイン支配の中間世紀は、目にみえる記念碑的变化がなかったため、歴史研究者から無視されてきたのである。

本研究者は、この中間世紀が、フィリピン人民の発達における形成期であると考え、この時期の社会史を研究し、1冊の本にまとめる予定である。第1年度には、フィリピン、スペイン、メキシコにおける古文書調査を行った。第2年度にはデータの照合を行い、第3年度に本を執筆する予定である。その際、「スペインおよびメキシコに存在するフィリピン資料の手引」も作成する。

50. フィリピン諸語辞書

(E. コンスタンティーノ)

本プロジェクトは1986年度に助成したプロジェクトの第2年度である。フィリピンは異なる言語を話す多くの民族グループにより構成されている。本研究者は過去20年間、さまざまなフィリピン言語の辞書を編纂してきた。本プロジェクトでは、本研究者のこれまでの蓄積を集大成し、105の言語を対象とするフィリピン諸語辞書を編纂しようとするものである。辞書の見出し語は約1万語で、各見出し語は英語で作られ、その後フィリピン諸語での同義語を示す。データ処理にはコンピュータを使い、第1年度には35言語を対象に作業を進めた。第2、3年度にも35言語ずつ同様の作業を行う予定である。

本辞書はフィリピン国語をつくり上げていく際の、身近な単語資料として役立つと同時に、この辞書をとおして得られる、フィリピンの諸民族グループの複合像によってフィリピン社会の複雑さと統一性がよりいっそう認識、理解されることも目的としている。

52. イロコス地方の経済・社会史：1900年—1935年

(D. B. アピラド)

本プロジェクトは1986年度に助成したプロジェクトの第2年度である。フィリピンのイロコス地域は、フィリピン共和国の政治リーダーや2人の大統領の出身地であるが、その歴史的研究は十分になされていない。フィリピンの歴史研究は、地方史に重点をおく時期に入っており、本プロジェクトは本研究者の出身地であるイロコス4州を一つの地域ととらえて、1900～1935年までの経済・社会史を明らかにしようとするものである。

イロカノ族が文化的多数派を形成するイロコス地方の地域的アイデンティティは1900～1935年のアメリカ植民地期に強化されたと本研究者は考える。本研究は研究者がすでに行っている1898～1901年までの米比戦争期のイロコス地方の研究の延長線上にあるものである。第1年度には、フィリピンの図書館で文献調査を行い、またイロコス地方で、コミュニティ観察、インタビューを行った。第2年度は、引き続き文献・フィールド調査を行う。

53. フィリピン国立公文書館のスペイン語古文書インヴェントリー作成 (R. A. コンセプション)

本プロジェクトは、1985、1986年度に助成したプロジェクトの第3年度である。フィリピン国立公文書館には1,000万点以上のスペイン語文書が所蔵されているといわれるが、それらの古文書は、ごく簡単に分類されているだけで、その正確な数は現在に至るまで確認されていない。それらを最大限に活用するための最善の方法は、その内容を正確にリストアップしたインヴェントリーを作成することである。この作業の必要性は明らかであったが、資金とふさわしい人材が不足していたために、長い間手がつけられずにあった。

本研究者は国立公文書館内部のスタッフであり、本プロジェクトを行う最適の人材である。第1年度には、古文書の束を年代順に整理した。第2年度には、インヴェントリーの基礎となるカタログ・カードに必要な情報をタイプする作業を進めた。第3年度には、その作業を続行し、インヴェントリーを本にして出版する。

54. ボロブドゥール寺院のジャータカ壁画研究

(M. R. M. ハンドウラカンデ)

本研究者は、永年ジャータカ物語を地道に研究しており、近年にも数あるジャータカ物語のうちの五つを選んで研究し、それを“*Five Buddhist Legends in Campu Style*”というタイトルで出版した。この五つの仏教説話の一つRsipañcakajatakaの場面が最近インドネシアのボロブドゥール寺院の彫刻を精査したアメリカの研究者によって、これまで不明とされていたボロブドゥール寺院の壁画の構図の一つと同一であるとの指摘がなされた。

本プロジェクトは、本研究者が実際に指摘されたボロブドゥールの壁画を調査し、現地の研究者および上記の指摘を行ったアメリカ人研究者と意見交換を行おうというものである。したがって本プロジェクトは、ボロブドゥール遺跡研究、特に大乘仏教のそれとテーラワーダ仏教のスリランカとの関係を解明する一助となる研究である。

55. 東北タイ語辞書編纂・出版

(プリーチャ P.)

本プロジェクトは東北タイ語の権威ある参考書となるような東北タイ語辞書を編集し出版することを目的としている。辞書の内容は、各単語の発音、中央(標準)タイ語による語義、英語による用語解、語源、そして東北タイ文学からの引用文である。また口語を豊かに彩る慣用句等も盛り込む。

この辞書編纂作業は元仏教僧であり、タイ語、ラオ語、パリー語、サンスクリット語の学者である本研究者によって20年前から進められており、現在すでにその8割が完了している。本プロジェクトでは残りの2割を完成させ、共同研究者のアメリカ人言語学者(タイ語とラオ語専門)が英語による用語解をつけ、コンピュータに入力する。

本辞書は東北タイ語の豊かな伝統を伝え、また東北タイ語とラオ語が類似性の高い言語であるため、ラオスの学者にとっても参考書となると考えられる。

56. 中国・広西のチュアン族とタイの関係についての研究

(プラニー K.)

本プロジェクトは中国・広西に住む少数民族、チュアン族とタイ族(特に東北タイ)との関係について、双方がその起源において関連性があるとの仮説を実証することを目的として、言語、民間伝承、歴史の視点から研究する。チュアン族は中国の他の少数民族と異なり、中国の雲南省とその周辺のみにはおらず、東南アジアにはみられない。このチュアン族の文化、言語等を記録、研究し、タイ族と比較することは、変化の激しい社会にチュアン族が適応する以前の文化を記録するとともに、タイ族のルーツを解明するうえでも重要である。

研究方法は文献研究、中国の資料のタイ語への翻訳、広西でのフィールドワークによるが、中国の広西少数民族研究所の研究者の協力を得る。最終的には報告書を執筆し、会議を開催し、報告書を出版する計画である。

57. 東北タイの碑文：碑文学，歴史学研究

(タワット P.)

本プロジェクトは、1984、1985年度に助成したプロジェクトの第3年度である。東北タイの碑文は、各々言語・文字の異なる3グループ、①前アンコール期(6~10世紀)、②アンコール期(10~12世紀)、③ラオス期(13~19世紀)に分類される。本プロジェクトの目的は、まだ解明の進んでいないラオス期の碑文の拓本を取り、それを現代タイ文字に翻字し、その内容を分析することにある。

第1、2年度には、東北タイの10箇所を調査を行い、82の石碑を発見し、それらすべてを写真、スライドに収め、また写本に取った。これらの碑文はタイ文字に翻字し、報告書を作成した。それは前半に、東北タイ文化の背景および碑文についての論文、後半に碑文に方言語彙集をつけたものである。第3年度は第2年度の報告書の補足として、これまでに収集した拓本を文字が明瞭に読めるような形で出版する計画である。

58. 東北タイの民衆の知恵とアイデンティティーの模索

(セリ P.)

本プロジェクトは、1986年度に助成したプロジェクトの第2年度である。近代化の波がタイの伝統的村落にまでも及びつつある現在、地方の文化的アイデンティティーへの関心が高まりつつある。しかし、タイ国内の地方文化に関する研究はこれまでほとんど行われてこなかった。

本プロジェクトでは、東北タイのなかでも特に文化的共通性の強い中部6県に焦点を当てて、同地域出身の本研究者がその地域の民衆の知恵、すなわち儀礼、行事などに反映されている伝統的世界観、認識構造を研究し体系化することを目的としている。第1年度には、タイの伝統文化、東北タイの格言、歴史、民話などに関する文献調査を行い、東北タイの三つのコミュニティに滞在し、宗教儀礼、結婚式等の参与観察を行った。また仏教僧など村の識者へインタビューを行った。第2年度は、同様の調査をより範囲を拡大して行い、最後にセミナーを開いて調査結果を討論、検討する予定である。

59. タイのヤオ族と中国・広西のヤオ族の比較研究

(テラパン L. T.)

ヤオ族はタイと中国にみられる少数民族であるが、本プロジェクトは、①タイに住むヤオ族は言語、文化、歴史の視点からみて、二つのグループに分けることができる、②そのうち、中国・広西のヤオ族とより類似性のあるグループはラオスを通して、広西からタイに移住した人々である、との仮説を実証することを目的としている。

研究方法は、①北タイと広西で話されているヤオ語を体系的に調査。特に音声学と語彙の面での比較研究、②タイのヤオ族と広西のヤオ族の民話、民謡、伝統的民族衣装の比較調査、③“ヤオ・パスポート”すなわちヤオ族が中国を離れて移住したルートと定住地の記録の収集とタイ語への翻訳、である。タイのヤオ族については、タイの研究者が北タイでフィールド調査し、広西のヤオ族については、中国とタイの研究者が協力してデータ収集を行い、最終的には研究報告書を執筆し、チェンマイでヤオ研究についてのセミナーを行う計画である。

60. 北タイ、ビルマ・シャン州、インド・アッサム州のタイ語族の文化・社会比較研究(ジャラチャイ R.)

本プロジェクトは1986年度に助成したプロジェクトの第2年度である。タイ語を話し、タイ文化を共有しているタイ族は、タイ国内のみならず、北は中国、南はマレー半島、東はヴェトナム、西はインド・アッサム地方にわたって広く分布している。またタイ国内のタイ族をみても、東北・北・中央・南部では話されている言語に違いが認められる。これらタイ諸族の研究は、言語学研究はあるものの、ほとんど行われてこなかった。

本プロジェクトでは、タイ諸族のなかでも特に、北タイ、ビルマのシャン州、および東北インドのアッサム州に住むタイ族に関し、彼らの生活スタイル、行動パターン、社会組織などを人類学的に比較研究することを目的としている。第1年度は、タイ族に関する文献調査を行い、ビルマ、インド側の研究の進め方を話し合った。第2年度にはビルマ、第3年度にはインドでセミナーを開き、各々の行った研究結果を討論する予定である。

61. グエン時代のヴェトナム社会・経済史の予備的研究

(ポーンペン H.)

本プロジェクトは1986年度に助成したプロジェクトの第2年度である。本研究者の出身地タイは、上座部仏教とインド文化の影響を強く受けているのに対し、ヴェトナムは儒教など中国の影響を受けている。他方、反植民地化闘争が展開された19世紀の両国は、類似した農村社会をその社会・経済基盤としており、タイ研究者にとってグエン時代のヴェトナムを研究することは大きな意義をもつ。しかし、タイにおいては、これまでのヴェトナム史研究の蓄積はほとんどない。

本プロジェクトでは、タイの気鋭の歴史学者がタイ人によるヴェトナム史研究を開拓すべく、ヴェトナムに関する資料の豊富な日本の大学に居を構えて、日本人のヴェトナム史研究者の指導のもと、グエン時代のヴェトナム社会・経済史の研究を行う。第1年度は、タイ、日本でのヴェトナム語習得に重点をおいた。第2年度は、日本の大学の図書館所蔵のヴェトナム文献で研究課題を研究する。

62. 北タイの文化に関する民族学・歴史学研究：儀礼と信仰のインヴェントリー作成

(アナン G.)

本プロジェクトは1985、1986年度に助成したプロジェクトの第3年度である。本プロジェクトでは、現在急速に失われつつあるが十分な研究が行われていない北タイの文化、特に儀礼とそれに関した信仰について以下の研究を行う。①フィールド調査、文献調査（特に貝葉文献の解読）を行って、北タイの儀礼と信仰に関する情報を収集する、②文書、スライド、ビデオテープによる記録等を資料とした儀礼と信仰に関するインヴェントリーを作成する、③北タイ文化の全体像と習慣の多様性を理解するために、儀礼と信仰の地域性を地図で表し、④それらの儀礼と信仰を比較分析する。第1年度には、インフォーマントの情報に基づいて北タイを三つの文化地域に分割し、各地域ごとに上記①を行った。第2年度には②を中心に行い、第3年度には③④を行って、研究成果を北タイの儀礼と信仰というシリーズで出版する予定である。

63. ランナタイ研究情報プロジェクト

(チャヤン V.)

本プロジェクトは1985、1986年度に助成したプロジェクトの第3年度である。ランナタイ研究における問題点としては、大量に収集されている文献に関する組織的な情報がない、北タイの教育機関が収集している文献の情報が定期的に外部に伝えられていない、ランナタイ研究の現状を把握し、今後の研究方針を考える評価作業が行われていない、ことなどが指摘できる。

本プロジェクトでは、こうした問題点を解決するために以下の活動を行う。①研究者、司書、研究所等と密接に連絡を取り、ランナタイ研究に関するデータベースを作る、②ランナタイに関するセミナーを開催したり、ニュースレターを発行し、ランナタイ研究に関する情報交換を促進する。第1、2年度には、ニュースレターを発行し、また各地域の専門家にインタビューして情報を収集した。第3年度も同様の作業を行い、ランナタイ研究の文献目録と研究者ディレクトリーを完成させる。

64. 「ランナタイとシブソンパンナ：文化関係の研究、連続性と変化」会議報告書の出版

(M. R. ルチャヤ A.)

本プロジェクトは1985年度に助成したプロジェクトの第2年度である。ランナタイは、ビルマのシャン州、中国雲南省のシブソンパンナ（西双版纳）、およびラオス等の近隣地域と9世紀ごろから物や人の交流が盛んで、これらの地域の思考様式や慣習は相互に影響し合っていた。しかし、こうした歴史関係が見落とされていたり、1975年まで中国と国交がなかったため、従来のランナタイ研究の対象は、ランナタイ地域のみ限定されていた。

本プロジェクトでは、このような理由で実施されてこなかったランナタイと中国雲南省のシブソンパンナの文化関係に関する研究の促進を図るために、タイ、中国および日本の研究者をタイに招待して国際会議を開催した。チェンマイで開かれたこの国際会議では、両地域の歴史、言語、生活、文化等に関する研究が発表された。第2年度には、会議の内容を編集・出版する。

65. 『チャム彫刻』の編集と出版

(P. フウ)

本プロジェクトは1985年度に助成したプロジェクトの第2年度である。

現在ヴェトナム中部に居住するチャム族は、チャンパという東南アジアでも最も古い王国の一つを造り高い文明を誇っていたが、なかでも美術とりわけ彫刻に優れていた。チャム人の建てた石造寺院の彫刻は1,000年以上を経て現在まで残っており、その美術的価値は高く評価されている。

本プロジェクトはヴェトナム各地の博物館所蔵のチャム彫刻、および現存のチャム寺院の彫刻を写真に撮影し、解説をつけて出版しようとするものである。第1年度ではフィールド調査、原稿執筆が完成し、写真も含めて出版原稿の完成に至った。本年度はこの原稿を日本で印刷し、3,000部をヴェトナムに寄贈、1,000部を日本で販売する予定である。この本ではヴェトナム語、英語、日本語が用いられる。

66. 『大地と水の誕生』の神話の編纂、翻訳、出版

(D. V. ルン)

本プロジェクトは1986年度に助成したプロジェクトの第2年度である。

ヴェトナムの少数民族ムオン族は、ヴェトナムの中心民族ヴェト族と近く、またタイ族との文化的親近性も指摘されている。ムオン族は『大地と水の誕生』という、それ自体は民話の集合体であり、全体としてみると国の成立、人間と万物の起源が首尾一貫して説明されている神話を保持している。

本プロジェクトはこの『大地と水の誕生』の神話の編纂、翻字、翻字したオリジナルにヴェトナム語訳を付けて出版することを目指し、第1年度では既刊のテキストを収集し、ビブリオグラフィーを作成した。またフィールド調査により新しく二つのテキストを収集し、データのチェックも行った。その後テキストをムオン語で編纂し、ヴェトナム語訳と英訳を作成した。本年度ではムオン語とヴェトナム語訳の出版を行う予定である。

67. ダム・サン民話の編纂、翻訳、出版

(N. V. ホアン)

本プロジェクトは1986年度に助成したプロジェクトの第2年度である。

ヴェトナム中部高原に住むエデ人は、美しい口承文学「ダム・サン民話」を有している。エデ人は、東南アジア島嶼部のマラヨ・ポリネシア語族の人々との文化的共通性が認められており、「ダム・サン民話」はヴェトナムの固有の文化遺産であるばかりでなく、東南アジアの先史研究にも貴重な手掛かりを与えてくれる。

第1年度はすでに出版されている「ダム・サン民話」のテキスト、エッセイを収集し、信頼性の高いテキストを選択し、そのテキストの比較研究により問題となる点を研究した。またフィールド調査を行い、エデ人の言語、習慣の視点からテキストをチェックした。その後、テキストのエデ語での編纂と、ヴェトナム語、英語への翻訳を行った。本年度は解説、注釈をつけて、エデ語、ヴェトナム語で「ダム・サン民話」を出版する予定である。

68. ヴェトナムにおける仏教の歴史

(N. T. トウ)

本プロジェクトは1986年度に助成を行ったプロジェクトの第2年度である。

仏教は、儒教、道教と並んでヴェトナムの主要な哲学的源泉であるが、近隣諸国の仏教と比較すると独自性を有している。ヴェトナム仏教史の研究は過去に相当の蓄積があるものの、度重なる戦火によってその成果の大半は散逸し失われてしまった。本プロジェクトは再統一後の初めての試みとしてヴェトナム仏教史の編纂を行おうとするものである。

第1年度ではセミナーを開催し12名の専門家によって仏教史編纂の方法等を話し合い、200ページに及ぶヴェトナム仏教に関するビブリオグラフィーを作成した。また6省でフィールド調査を行い、本文350ページ、ビブリオグラフィー200ページ、用語集10ページ、写真20ページから成る仏教史の執筆を行っている。本年度はこれを3,000部出版する予定である。

69. メコンデルタの文化的特色と人口

(N. C. ビン)

ヴェトナムの南端に位置するメコンデルタは11の省と市から成るヴェトナム最大の農業・工業地帯で、ヴェトナムの経済発展に大きな役割を果たしている。この地域の少数民族は先史時代から独特の伝統文化を作り上げており、これら少数民族の文化は経済生活、生活様式、宗教、慣習、祭り、言語、音楽、芸術等のなかに表現されている。彼らは長い間近隣諸国（カンブチア、ラオス、タイ）、東南アジア島嶼部、インド、中近東、地中海の人々と文化的、経済的交流を続けてきた。

本プロジェクトは、①適切な開発政策を策定するための知識を得ることを目的として、メコンデルタの少数民族の特色、また相互間の経済・文化交流活動を調査する、②研究成果を出版し、東南アジア、南アジアの隣国との相互理解を強化する、という目的で行われる。

70. ヴェトナムの古代の町

(V. タオ)

本プロジェクトはヴェトナムの古代の町について、その歴史、経済、文化について研究しようとするもので、これまでにこのような研究が十分になされたことはない。本プロジェクトが研究対象とする10の町はヴェトナム全土に散らばっており、紀元前3世紀から紀元18世紀の間に設立された。現代の町へと統合されたものは少なく、多くは地上から消え去り、遺跡となるか、村になってしまった。これらの古代の町を調査することにより、都市化、伝統、歴史、文化、商品経済、資本主義の芽生え等についての理解を深めることができる。この調査により、ヴェトナムと東南アジアの歴史と伝統的社会的理解促進が図られる。

本プロジェクトはインターディシプリナリーな研究で、考古学、歴史学、社会学、民族学、他の分野の専門家が調査を行い、古代の町の構造、経済活動、社会組織、文化生活等を記述し、その全体像を明らかにする。

71. ホアビン文化

(H. X. チン)

ホアビン文化は東南アジア全体にみられる先史時代の文化であるが、北ヴェトナムの高地にその遺跡が多く、発掘がなされている。本プロジェクトはホアビン文化についていままでに明らかにされている知識のまとめを行う。そのためには組織的に発掘を行い、現代的な機器による科学的な分析を行う必要がある。ヴェトナムではホアビン文化の遺跡が50以上発見され、発掘が行われているが、これらの発掘から得られた大量の発掘物の分類を行う。

研究の内容は、ホアビン文化に関する研究と発見の歴史をまとめ、居住地、道具、動植物、埋葬等を調査し、年表を作成し、ホアビン人の人類学的特徴と経済活動を明らかにすることである。研究成果は東南アジアの他の地域のホアビン文化との比較を行うための資料として提供し、社会科学、特に考古学の分野の学者の東南アジア地域内の協力に向けての準備を行う。

IV-2. 国際助成 インドネシア若手研究者奨励研究助成

インドネシア若手研究者奨励研究助成の概要

インドネシア若手研究者奨励研究助成は、本年度より新たに開始したプログラムである。その目的は研究資金に乏しいインドネシアの社会・人文科学分野の若手研究者に、研究費を提供しようとするものである。その趣旨に鑑み、対象となる研究は個人研究に限り、比較的小規模の助成金をなるべく多くの若手研究者に提供することとした。

応募件数はインドネシア全国から273件あり、選考の結果選ばれた17件はすべて35歳以下の若手研究者の研究

であった。うち8件は、博士または修士論文執筆のための研究である。研究テーマとしては経済学、社会学、文化人類学、教育学、文学、法学などの分野から数名ずつが選ばれる結果となった。

研究者の居住地としては、ジャカルタ、ジョグジャカルタといった学問的中心地の研究者が多いものの、地方在住の研究者もかなり選ばれている。また、特に所属のない者、また民間の研究機関の者4名が選ばれているのも一つの特徴になっている。

助成対象一覧

	研究題目 代表者 所属	助成金額 (ルピア)
1	家族労働力の配分と集中(修士論文) トリ・スチプト ジョグジャカルタ市私学調整局職員 34歳	3,000,000
2	創造力の発達の心理学的、社会文化的諸要素(博士論文) デデイ・スプリアディ バンドゥン教育大学院生 28歳	3,700,000
3	思春期情動と子の親に対する評価および両者の関係に関する、貧困売春地域と貧困非売春地域の比較研究 クンチョロ ガジャマダ大学心理学部講師 32歳	3,500,000
4	農業の近代化：農村における土地所有、土地支配の非集中化の傾向 バンバン・シガップ・スマントリ 25歳	3,000,000
5	ミナンカバウの口承文学インダン シャフルディン・スライマン アンダラス大学文学部講師 34歳	3,500,000
6	インドネシアの労働関係安定における政府の役割(修士論文) A. ウウィヨノ インドネシア大学法学部講師 35歳	3,500,000

	研究題目 代表者 所属	助成金額 (ルピア)
7	農村のイスラム共同体における宗教の方向性と社会的アスピレーションの変化(修士論文) ムハマッド・ヒシャム インドネシア科学院社会文化研究所研究員 35歳	2,250,000
8	中部アチェ, レセル山国立公園の森林の畑作と住民の意見 バンバン・リヤディ・ストリスノ API 財団スタッフ 33歳	3,600,000
9	西ジャワの農村社会における在村大商人の実態と役割 ブディ・ラジャブ 26歳	3,000,000
10	インドネシアの高等教育機関におけるイスラム知識人 1930年—1960年(博士論文) シスワント・マスルリ スナンカリジャガ・イスラム高等学院院生 34歳	1,795,000
11	水路管理体制の変化が漁村の社会経済・社会文化状況に与える影響: 南スマトラのオガン県およびコメリン・イリール県の研究 アブ・バカル ボゴール農業大学水産学部講師 30歳	3,650,000
12	ウダヤナ大学教育養成学部における, 学生の問題解決能力養成のための教育モデル, 思考形成, 行政体制(博士論文) ナスワン・スハルソノ ウダヤナ大学教員養成学部講師 29歳	3,800,000
13	南スラウェシのマンダラ族社会の慣習リパスに対する人々の認識 アリアディン・イスマイル インドネシア・イスラム大学講師 30歳	3,500,000
14	西イリアンの農村社会におけるリーダーシップの研究(修士論文) ラザルス・リヴァシー チェンドラワシ大学社会政治学部講師 35歳	3,750,000
15	スラカルタのラウイヤンの土着パティック製作者の商業的成功の展望 レフマン・バハリ 28歳	3,500,000
16	R. Ng. ロンゴワルシトのワヤン劇作品の構造主義的意味論(修士論文) アスワン・テジョウイラワン ガジヤマダ大学文学部講師 33歳	3,500,000
17	北スマトラ, ダイリ県のパバ族の焼畑の生態と社会変化 イフワン・アンシャリ メダン教育大学人口生活環境研究所研究員 26歳	4,000,000
	合 計 17 件	56,545,000 ルピア (5,030,000円)

V. 「隣人をよく知ろう」プログラム

V-0. プログラムの概要

「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成は1978年度に発足し、日本向けのプログラムは10年目を迎えるに至ったが、1982年度から東南アジア向けのプログラム、また1983年度から東南アジア相互間のプログラムが開始された。

日本向けプログラムのねらいは、日本の人々が隣人である東南アジア諸国の人々の文化・社会・歴史等についての認識を深めることを促進することである。そのために、東南アジア各国の人々が書いた文学作品や文化・社会・歴史等についての本のなかから日本の一般読者へ紹介することがふさわしいと思われる本を、東南アジアの人々の推薦を受けて選び出し、それらの本の日本語版を制作するときの翻訳料を助成する。この10年間で117件が助成対象となった。各国別の累計はインドネシア32件、シンガポール11件、タイ34件、ネパール3件、ビルマ17件、フィリピン10件、マレーシア10件である。

東南アジア向けプログラムは、東南アジアの人々の日本に関する正しい理解を促進することを目標に、日本に関する社会科学書、人文科学書、文学作品および日本人による東南アジア研究の成果を東南アジア諸国の言語に翻訳・出版する際の助成を行う。翻訳対象書の選定、翻訳者の選定、出版者の選定等の実際の運営は、助成対象となる東南アジア諸国の組織が行う。1987年度には、ネパール（第4年度）、インドネシア（第3年度）、ヴェトナム（第3年度と第1年度）、スリランカ（第3年度）、ラオス（第1年度）のグループが助成対象となった。現在、このほかに、これまでに助成を受けたタイ（1982年度）、マレーシア（1982、1983、1986年度）の各グループが本プログラムの下で活動を行っている。

東南アジア相互間のプログラムは、東南アジアの国々による相互理解を促進することをねらいとして、東南アジアの人の手になる社会科学書、人文科学書、文学作品を他の東南アジアの言語に翻訳・出版する際の助成を行う。1987年度にはフィリピン（第3年度）とインドネシア（第1年度）のグループが助成対象となった。本プログラムの下では、これまでに助成を受けたタイ（1983～1985年度）でもプロジェクトが行われている。

V-1. 日本向け・翻訳出版促進助成

助成対象一覧

	日本語仮題名 訳者名	原著名 著者・編者名 (原著国名)	出版社名	助成金額 (円)
1	タイ：独裁的後見支配の政治 玉田 芳史	Thailand : The Politics of Despotism Paternalism Thak Chaloemtiarana (タイ)	井村文化事業社	2,100,000
2	リー・クアンユー首相演説集 田中 恭子	呉俊剛・黄彬华編 (シンガポール)	井村文化事業社	3,300,000
3	クアラ・ルンプールから来た大商人 佐々木 信子	Saudagar Besar dari Kuala Lumpur Keris Mas (マレーシア)	井村文化事業社	1,800,000
4	夜明けの彗星, 虹の輪 山根 しのぶ	Lintang Kemukus Dini Hari, Jantera Bianglala Ahmad Tohari (インドネシア)	井村文化事業社	1,760,000
5	わが追憶のシャフリル 後藤 乾一 首藤 もと子 小林 寧子	Mengenang Sjahrir H. Rosihan Anwar 編 (インドネシア)	井村文化事業社	2,400,000
6	ジャワ人 染谷 臣道 宮崎 恒二	Manusia Jawa Marbangun Hardjowirogo (インドネシア)	めこん	900,000
7	空はさえぎらず 星野 龍夫	Fa Bo Kan Lao Khamhawm (タイ)	めこん	1,200,000
8	神の乙女クマリ 寺田 鎮子	Kumari sobha Vijaya Bahadur Malla (ネパール)	新宿書房	1,000,000
	合 計	8冊 [インドネシア3冊, タイ2冊, シンガ ポール1冊, ネパール1冊, マレーシア1冊]		14,460,000

助成対象概要

1. タイ：独裁的後見支配の政治

本書は、1958年から1963年にかけてタイの首相を務めたサリット元帥が、タイの現代政治において果たした役割を分析したものである。これまでのタイ政治研究によるサリットの評価と異なり、著者は、彼が独自の政治哲学、すなわち①タイ式民主主義、②政府—官僚—人民の3層から成る理想社会秩序、③家の父・国の父の原理に基づいた家族主義的支配、という哲学をもち、それを実践することにより、タイ政治のパターンを設定するうえで現代史上最大の役割を果たした、と結論づけている。

2. リー・クアンユー首相演説集

シンガポールの首相リー・クアンユーが、1959年から1985年の期間に行った演説、講演、談話、記者会見などの草稿、速記録約50編を集めたものである。その内容は、政治、外交、経済、社会等、広い分野にわたり、植民地移民社会から国民国家形成へ、さらにアジア NIES の最優等生としての繁栄に至る、変動期のシンガポールにおける国づくりという困難な仕事を舵取りしてきた首相の、その時々々の厳しい姿勢が臨場感をもって伝わってくる。

3. クアラ・ルンプールから来た大商人

主人公ムハマッドは、華人商人と共同出資で会社を急成長させているマレー人実業家。新たに鉱山経営への着手を狙っている。地元出身の代議士と手を組んで開発予定地から住民を立ち退かせ、彼の鉱山会社が買い取るという計画である。目的のためには手段を選ばず、あらゆる策略をめぐらすムハマッド。そんな彼の行動に、イギリス留学中の長男と若きイスラム教徒指導者が立ち向かう。マレー人商人が次々と台頭するマレーシア社会に、民族・宗教に価値をおいた開発の必要性を訴えた小説である。

4. 夜明の彗星、虹の輪

『パルック村の踊り子』を第1部とする3部作の第2部と第3部である。舞台は、旧い風俗因習を受け継ぐ中部ジャワの寒村パルック村。踊り子であり娼妓である村の人気者スリンティルを主人公に、彼女と幼馴染のラスストとの恋愛感情のもつれを縦糸として、スリンティル中心の舞踏団をはじめとした無知蒙昧なパルック村の人々が政争に巻き込まれ、役人に翻弄される姿が描かれている。現在のインドネシアの農村に通じる、諸層の人々の生活を象徴的に描いた作品である。

5. わが追憶のシャフリル

インドネシアの初代首相であり、また著名な政治思想家でもあったスタン・シャフリルの生誕70周年を記念して、彼を識る各界の関係者が寄せた追憶エッセイ集である。独立後約10年間、インドネシアの政治、外交そして政治思想の分野で常に指導的役割を演じてきたシャフリルだけに、その交友関係は多岐にわたり、本書にも政界、軍部、労界、ジャーナリズム等を代表する25名の人々が寄稿している。インドネシア独立革命に一定の方向を与えたシャフリルが、さまざまな角度・距離から描かれている。

6. ジャワ人

多民族国家インドネシアの主要民族であるジャワ人についての概説書である。ジャワ文化は、長い歴史をもち、諸文明の文化的要素を含み込み、東南アジア島嶼部一帯にさまざまな影響を与え、いまだ独自性を確立していないインドネシア文化形成に大きな影響力を及ぼしている。本書は、このように広大、複雑なジャワ文化に規定されたジャワ人の思考＝行動様式、特にそのタテ関係思考をはじめ、宗教的態度、運命主義的態度その他ジャワ人の民族性がさまざまな角度から手短かにまとめられている。

7. 空はさえぎらず

現代タイの高名な作家・社会評論家であるラーオ・カムホームが、1958年から1974年にかけて発表した17編から成る短編小説集である。これらの作品が書かれた時期は、タイ社会が独裁的軍事政権、外国からの投資の急増、近代化の進展といった要素に色濃く彩られた時代であり、そこに存在する不公平がユーモアとペーソスを交えて風刺されている。その風刺で著者の名を一躍高めた本書所収の「金色足の青蛙」「政治家」「天上人」等は、他のアジア、欧米でも翻訳され紹介されている。

8. 神の乙女クマリ

カトマンズのインドラ祭に出る山車行列の主役であるクマリ女神は、ネパール王国の守護神で、その役には童女が選ばれる。その役を果たした女性と結ばれる最初の男は死ぬという古い言い伝えがあり、本書は、このクマリ女神に選ばれた主人公が、恋人とともにその呪縛にがんじがらめにされながらも、古い因習を乗り越えようと奮闘する姿を描いている。カトマンズ旧市街の歴史と文化を色濃く残す中心地域を背景に、ネパールの精髓を凝縮した現代小説である。

V-2. 東南アジア向け・翻訳出版促進助成

助成対象一覧

(継2)：継続2年目
(継3)：継続3年目
(継4)：継続4年目

	プロジェクト題名 代表者 所属	助成金額 (円)
1 (継3)	インドネシア向け「隣人をよく知ろう」翻訳出版共同プロジェクト M. サストラプラテジャ カルティサラナ財団 (インドネシア)	8,160,000
2	ラオス向け「隣人をよく知ろう」翻訳出版共同プロジェクト ウサ S. 芸術文化研究所 (ラオス)	1,220,000
3 (継4)	ネパール向け「隣人をよく知ろう」翻訳出版共同プロジェクト M. L. カルマチャルヤ 日本文学翻訳委員会 (ネパール)	2,540,000
4 (継3)	スリランカ向け「隣人をよく知ろう」翻訳出版共同プロジェクト D. A. ラジャカルナ 日本文学翻訳委員会 (スリランカ)	2,890,000
5 (継3)	日本の産業、経済、経営に関する本のヴェトナム語への翻訳と出版 V. D. ルオック 世界経済研究所 (ヴェトナム)	6,220,000
6	日本の伝説、民話、文化史、社会科学の本のヴェトナム語への翻訳と出版 P. フウ 社会科学出版局 (ヴェトナム)	4,100,000
	合 計 6 件	25,130,000

助成対象概要

1. インドネシア向け『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト (M. サストラプラテジャ)

本プロジェクトは1983年度、85年度に助成を行ったプロジェクトの第3年度であり、日本に関する社会科学書、人文科学書、文学作品をインドネシア語に翻訳して出版し、インドネシアの人々の日本に対する正しい理解を促進することをねらいとしている。

第1年度では文学作品2点、社会科学書1点、古典1点の合計4点の翻訳を行い、2点はすでに出版され、残りの2点も近く出版される予定である。第2年度には、文学作品2点、人文科学書3点、社会科学書3点の合計8点の翻訳を行う予定であり、8点すべてが現在翻訳および編集の段階にある。第3年度では人文科学書、社会科学書のなかから13点を選んで翻訳・出版を行う予定である。本プロジェクトの運営は、カルティサラナ財団内におかれた委員会によって行われる。委員会には学者、知識人のほか、出版社の編集者なども加わっている。翻訳は直接日本語から翻訳される文学作品2点を除いてすべて英語から翻訳される。

2. ラオス向け『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト (ウサ S.)

本プロジェクトは、日本に関する社会科学書、人文科学書、文学作品をラオ語に翻訳して出版し、ラオスの人々の日本に対する正しい理解を促進することをねらいとしている。

第1年度には、近年ラオス国内で、日本の経済発展の背景、内容、活力を研究し理解することによって自国の経済発展にその経験をいかそうという考えが高まっていることに鑑み、*Japanese Economic Development* (K. Yoshihara 著) を翻訳し出版する予定である。

3. ネパール向け『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト (M. L. カルマチャルヤ)

本プロジェクトは1984年度、85年度、86年度に助成したプロジェクトの第4年度であり、日本に関する社会科学書、人文科学書、文学作品、および日本人によるネパール研究の成果をネパール語に翻訳して出版する。ネパールの人々の日本に対する正しい理解を促進することをねらいとしている。

第1年度では民話集、おとぎ話、俳句集、短編集などの入門的な日本文学紹介の作品を中心に10点の翻訳・出版を行い、約半数がすでに出版され残りも近々出版の予定である。第2年度では文学作品、文学評論、詩集などの文学に関するものと、日本の宗教、文化、芸術についての解説書などを中心に11点の翻訳・出版を行い、翻訳はかなり進んで印刷中のものも数点ある。第3年度では、日本の近・現代の代表的文学作品4点の他、日本人のネパール研究の成果4点を加え合計10点を翻訳・出版する予定である。本年度の助成は、第3年度に翻訳を行った本の印刷のための出版助成である。

4. スリランカ向け『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト (D. A. ラジャカルナ)

本プロジェクトは、1985年度、86年度に助成したプロジェクトの第3年度である。本プロジェクトは、日本の文化、歴史、社会、経済などの分野から選ばれた本をシンハラ語とタミール語に翻訳して出版することを通じて、スリランカの人々の日本に対する正しい理解を促進することを目指している。本プロジェクトは、言語や文学の専門家から成る委員会によって運営される。

第1年度には、スリランカの人々によく知られている芥川龍之介の『羅生門』と『藪の中』、および黒沢明の映画『羅生門』のシナリオと撮影用台本をシンハラ語に翻訳し、第2年度には、それを印刷・出版するよう準備を進めている。第3年度には、プロジェクトリーダーが選出・編集した日本の短編集2冊(25編)と *Higher Education in Japan: Its Take Off and Crash* (永井道雄著) をシンハラ語に翻訳し、出版する予定である。

5. 日本の産業、経済、経営に関する本のヴェトナム語
への翻訳と出版 (V. D. ルオク)

本プロジェクトは、1985年度、86年度に助成したプロジェクトの第3年度である。本プロジェクトは、日本の産業・経済・経営に関する本をヴェトナム語に翻訳して出版し、日本のこの分野に関して、ヴェトナムの研究者および関心のある人々の正しい理解促進を目的としている。

第1年度には、*Japan's Managerial System* (M. Y. Yoshino 著)、*Theory Z* (William Ouchi 著)、*Japan's Economic Policy* (G. C. Allen 著) の3冊の翻訳を行い、前者2冊は出版が完了し、あと1冊も近々出版の予定である。

第2年度には、*The Postwar Japanese Economy: Its Development and Structure* (Takafusa Nakamura 著) の翻訳・出版のための作業を進めている。

第3年度には、*Kaisha: The Japanese Corporation* (James C. Abegglen, George Stalk, Jr. 共著) と *The Developing Economies and Japan* (大来多佐武郎著) を翻訳・出版する計画である。

6. 日本の伝説、民話、文化史、社会科学の本のヴェトナム語への翻訳と出版 (P. フウ)

ヴェトナム向け「隣人をよく知ろう」プログラムとしては「日本の産業、経済、経営に関する本のヴェトナム語への翻訳と出版」が世界経済研究所によって行われているが、翻訳の対象となっているのは経済関係の本だけである。そこで人文科学、社会科学の本については社会科学出版局が、翻訳・出版を行うことを希望している。東南アジア向けのプログラムは、本来各国一組織が原則であるが、ヴェトナムの国情を考慮して特例を設けた。

第1年度には *The Tale of Heike Vol. 1* (平家物語) を英語版から、*Way of Rice* (『稲の道』、渡部忠世著) を中国語版から翻訳・出版する予定である。

第2年度には *The Tale of Heike Vol. 2* と *Japan: A Short Cultural History* (G. B. Sansom 著) を翻訳・出版する計画である。

V-3. 東南アジア相互間・翻訳出版促進助成

助成対象一覧

(継2)：継続2年目
(継3)：継続3年目

	プロジェクト題名 代表者 所属	助成金額 (円)
1	東南アジア相互間「隣人をよく知ろう」翻訳出版共同プロジェクト (インドネシア) アスワブ M 社会経済調査・教育・情報研究所 (インドネシア)	4,110,000
2 (継3)	東南アジア相互間「隣人をよく知ろう」翻訳出版共同プロジェクト (フィリピン) F. S. ホセ ソリダリティ財団 (フィリピン)	10,460,000
3 (継2)	インドネシア語-ヴェトナム語辞書編纂 P. D. ズオン 東南アジア研究所 (ヴェトナム)	3,560,000
	合 計 3 件	18,130,000

助成対象概要

1. 東南アジア相互間「隣人をよく知ろう」翻訳出版共同プロジェクト（インドネシア）（アスワブ M.）

本プロジェクトでは近隣の東南アジア諸国に対するインドネシアの人々の理解を促進するために、民間の研究所であり、かつ教育普及活動のために出版部門をもち高い質の本、雑誌の出版で定評のある社会経済調査・教育・情報研究所が、東南アジア諸国の社会科学書、人文科学書、文学書をインドネシア語に翻訳して出版しようとするものである。

本プロジェクトでは、各5冊ずつの三つのシリーズの翻訳書を企画している。第1のシリーズは、東南アジア各国のイスラム教についてのシリーズ、第2は東南アジア各国の社会・政治・経済変化を扱った社会科学書のシリーズ、第3は各国の文化や歴史を扱ったシリーズで、このなかには文学書も含まれる。

2. 東南アジア相互間「隣人をよく知ろう」翻訳出版共同プロジェクト（フィリピン）（F. S. ホセ）

本プロジェクトは、1985年度、86年度に助成したプロジェクトの第3年度である。本プロジェクトでは、近隣の東南アジア諸国に関するフィリピンの人々の理解を促進するために、東南アジア地域内に広い人脈をもつソリダリティ財団が、東南アジア諸国の社会科学書、人文科学書、文学書をフィリピンの共通語であるタガログ語等と英語に翻訳し、出版する。

第1年度では、東南アジアの短編集、シンガポールの小説、タイの仏教解説書2冊、マレーシアの女性に関する論文集がタガログ語に翻訳・出版された。さらにインドネシアの歴史書が英語に翻訳・出版され、合計6冊の本が出版された。第2年度にはシンガポールの短編集と小説、インドネシアの書簡集、タイの短編集、東南アジアのイスラムに関する論文集、等がタガログ語に翻訳・出版された。最終的には合計10冊が出版される。第3年度には合計16冊の本が出版される予定である。

3. インドネシア語—ヴェトナム語辞書編纂

（P. D. ズオン）

本プロジェクトは1986年度に助成したプロジェクトの第2年度である。本プロジェクトはヴェトナムの東南アジア研究所が行う、インドネシア語—ヴェトナム語辞書編纂・出版である。

ヴェトナムとインドネシアは、両国の独立以降絶えることなく外交関係を保ち続け、ヴェトナムでもインドネシア語文献を読み、翻訳することの需要があり、この種の辞書の必要性はかなり以前から認識されていたにもかかわらず、これまで編纂・出版が行われたことはなかった。本プロジェクトでは、すでに相当程度蓄積されているカードから使用頻度の高いインドネシア語単語を抜き出し、既存のインドネシア語—ロシア語、同中国語、同英語辞書を参照しつつ、ヴェトナム語の訳語を与えるという方法で編纂作業を行う。第1年度は約2,000ページになる辞書の編纂を行っている。第2年度はこの原稿を編集し、2巻に分けて出版する予定である。

VI. その他の助成

VI-0. その他の助成の概要

これまで報告した五つのプログラム以外に、トヨタ財団では本年度は次の五つのプログラムを実施した。すなわち、フォーラム助成、民間助成活動促進プログラム助成、特別研究助成、東南アジア研究英訳刊行助成、成果発表助成である。これらの助成案件は、企画委員会（林雄二郎、浅田孝、天城勲、大島正光の4理事で構成）にて審査・選考を行った。

フォーラム助成は、財団の今後の活動と関係深いと思われる小規模な研究会活動に助成するもので、その申請は、財団事務局と研究会との合議により作成することとしている。本年度は6件が助成対象となった。

民間助成活動促進プログラム助成は、わが国における民間助成活動の促進を目指し、そのために必要な調査や事業について助成あるいは委託するものである。本年度の助成対象は助成財団資料センターの運営費補助と中国基金会訪日団への助成の2件であった。

特別研究助成は、財団と研究チームとの共同企画によって長期的な研究プロジェクトを遂行するもので、昨年度は第Ⅲ種研究助成として扱ったものを今年度から独立扱いとしたものである。助成対象は継続2年目の「戦後科学技術の社会史に関する総合的研究」1件である。

東南アジア研究英訳助成は、「隣人をよく知ろう」プログラムと関連して新たに設けたもので、日本の東南アジア研究論文をコーネル大学から翻訳出版するのに助成するものである。

成果発表助成は、当財団の助成による成果を広く社会に発表することを目的に、報告書の印刷、出版物の刊行、シンポジウムの開催、国際学会への出席などに助成を行うものであり、申請者はこれまで5年以内にトヨタ財団の助成を受けたものに限られる。本年度は19件の助成を行った。

なお、緊急を要するもので当財団の活動趣旨から特に重要なものは、その他助成として企画委員会の議を経て理事長決裁による助成を行い得るようになっていたが、本年度はこれに関して1件の助成を行った。

VI-1. フォーラム助成

助成対象一覧

(継2)：継続2年目
(継3)：継続3年目

	テーマ 代表者 団体名	助成金額 (円)
1 (継2)	まちづくり市民活動を支える新しい協同の仕組みの一つとしてのシビック・トラストを 考える 阪上 順三 シビック・トラスト・フォーラム	2,500,000
2 (継2)	漢独辞典プロジェクトの可能性に関する検討 ——日独辞典プロジェクトと漢英字典プロジェクトの発展として—— 江沢 建之助 漢独辞典研究会	2,600,000
3	日本におけるアジア芸術の紹介 ——戦前の歴史的研究と今日の情報交流—— 峰岸 由紀 アジア芸術交流研究会	2,500,000
4 (継3)	市民活動としてのネットワーキングを考える 播磨 靖夫 ネットワーキング研究会	2,600,000
5 (継3)	現代の企業フィランソロピー 川添 登 フィランソロピー研究会	2,600,000
6	国際化と日本をとりまく法的諸問題 森島 昭夫 日本の国際化と法に関する研究会	2,500,000
	合 計 6 件	15,300,000

助成対象概要

1. まちづくり市民活動を支える新しい協同の仕組みの一つとしてのシビック・トラストを考える (シビック・トラスト・フォーラム)

最近さまざまな分野で草の根レベルの市民活動が盛んになってきつつあるが、このような活動を持続し発展させるためには、資金的基盤の整備が必要と思われる。しかし現在の日本ではまだそのような基盤は著しく弱い。

このフォーラムでは、そのような資金的基盤をシビック・トラストという形で構想し、これまで1年半にわたりその萌芽的な事例について検討を重ねてきたが、今回の助成では、理論的な検討と整理を行い、具体的な報告をまとめる予定である。

2. 漢独辞典プロジェクトの可能性に関する検討

(漢独辞典研究会)

当財団の研究助成により、日独辞典編纂プロジェクトと漢英辞典編纂プロジェクトがそれぞれ独立の経緯によって進行しつつあるが、この両者の発想を生かして新たに漢独辞典を編集しようという試みが登場し、昨年度のフォーラム助成によってその実現の可能性が検討された。

今回の助成では、具体的に漢独辞典のサンプルを試作し、これをもとに日独双方の研究者で詳細な検討を重ね、辞書編纂の課題をいっそう具体的に検討し、新しい方法論の確立を目指している。

3. 日本におけるアジア芸術の紹介——戦前の歴史的的研究と今日の情報交流—— (アジア芸術交流研究会)

これまで2年にわたり当財団の委託として実施してきた芸術文化交流調査では、明治以降現在に至るアジアとの芸術分野の交流事例と、現在の担い手が抱える問題の2点について考察してきたが、その結果、戦前の交流事業やその背景となる国際情勢の研究の重要性と、現在の担い手相互の情報交流の必要なことが明らかになった。

今回の研究会は、これらの課題に自主的な研究活動でアプローチしようとするもので、明治以降の交流史に関する試行的な研究と、情報交流のためのニュースレターの発行を主な内容としている。

4. 市民活動としてのネットワーキングを考える

(ネットワーキング研究会)

個々には小規模な市民活動でも、横につながり相互に協同し刺激し合うことによって社会的に大きな影響力をもつことができる。当研究会は、これまで2年間、そのようなネットワーキングのありかたについてさまざまな議論を重ねるとともに、全国各地の活動グループと交流を深めてきた。

今回の助成では、これまでの議論を整理し、日本型ネットワーキングの様相を具体的に明らかにしていくことを目指している。また日本ネットワーカーズ会議の開催や出版による成果の公表も予定している。

5. 現代の企業フィランソロピー

(フィランソロピー研究会)

1972年度のフォーラム助成によって始まったこの研究会は、第1、2次の研究会活動を通して広くフィランソロピー(篤志事業)全般にわたる課題を議論し、わが国近代におけるフィランソロピーの源流として大正期の企業家の社会文化事業について研究・考察してきた。

今回の第3次研究会では、これまでの基礎的な作業を踏まえて、現代企業の社会貢献活動について実態を明らかにし、問題点を抽出することとしている。特に企業活動が世界的な規模で行われていることから、社会貢献についても世界的視野からの検討を目指している。

6. 国際化と日本をとりまく法的諸問題

(日本の国際化と法に関する研究会)

国際化が進むなかで、日本をとりまく法的諸問題が急増しつつあるが、これらの問題については、当事者である各国政府の公的発言やジャーナリスティックな論評はあるものの、問題を客観的・理論的に整理し、実態に即して前向きに解決を図っていかうとする活動は十分でない。

このフォーラムの中心メンバーは、早くから環境法についてそのような国際的諸問題の研究に取り組んできたが、今回はさらに研究者の専門分野を増やし、財産権紛争問題、途上国の債務スワップ問題、中国残留孤児・難民受入問題について討論の場をもととしている。

VI-2. 民間助成活動促進プログラム

助成対象一覧

(継3)：継続3年目

	テーマ 代表者 団体名	助成金額 (円)
1	助成財団資料センターの運営 (昭和62年度)	
(継3)	林 雄二郎 助成財団資料センター理事長	12,000,000
2	中国基金会訪日団の訪日考察	
	王 笑 中国基金会訪日団代表 (国家社会科学基金会 弁公室負責人)	2,300,000
	合 計 2 件	14,300,000

助成対象概要

1. 助成財団資料センターの運営 (昭和62年度)

(助成財団資料センター)

助成・表彰・奨学などの事業を行う財団法人等の資料を収集し、その助成活動の内容を広く社会に公表していくことを目的とする「助成財団資料センター」は、わが国助成財団界初の本格的な共同事業として昭和60年11月に発足し、翌年4月から資料室を開館、閲覧等のサービスを開始するとともに広報誌『助成財団』を年4回発行してきた。さらに昭和62年度には、日本の助成財団に関するディレクトリーの編纂出版や法人化の準備に活躍してきた。本助成は、同センターのこのような活動に対する運営費の一部を補助するものである。

2. 中国基金会訪日団の訪日考察

(中国基金会訪日団)

中国においても、最近になって助成型の財団(基金会)設立の傾向が顕著である。その政治体制から、政府出資によるものが中心であるが、外国人や華僑の寄附による民間的性格の強いものもできつつある。そのようななかで、中国基金会関係者の日本の財団への関心が高まってきた。

この助成は、三つの基金会から6名のスタッフが日本の助成型財団や助成型特殊法人を訪ね、助成活動の体験や実状をインタビューするとともに、財団をとりまく諸制度について調べるためのものである。訪日は昭和63年6月、約10日間の予定である。

VI-3. 特別研究助成

助成対象一覧

(継2)：継続2年目

	テーマ 代表者	団体名	助成金額 (円)
1	戦後科学技術の社会史に関する総合的研究(2)		
(継2)※	中山 茂	科学と社会フォーラム	10,000,000
	合 計	1 件	10,000,000

※昭和61年度は第III種研究助成の対象として扱った。

助成対象概要

戦後の日本の社会は、日本の科学技術の定着と発展を抜きにしては語れない。科学技術の社会史は、政治史・経済史に劣らぬ重要な歴史分野であるが、研究者の数は少なく、研究実績も個々の問題に限定され、体系的な歴史を書くための基礎作業すらいまだ行われていない。

本研究プロジェクトは、3年にわたるフォーラム助成の検討に基づいて提案されたもので、戦後の科学技術と社会との関係に関して一次史料を収集・整理・編纂し、

解題と解説を加えて出版しようとするものである。昨年度の助成によって二つの通史グループが本格的な研究作業に着手し、精力的な活動を始めているが、本年度はその継続とともに、新たに「原子力・原子核」「食と農」をテーマとする2グループが本格的作業を開始する。同時に、次年度以降に向けて6つのグループが準備作業を行う予定である。困難ではあるが重要なテーマを対象に、長期的な展望にたって進められるプロジェクトである。

VI-4. 東南アジア研究英訳刊行助成

助成対象一覧

	プロジェクト題名 代表者 所属	助成金額 (円)
1	東南アジア研究英訳刊行 G.M. ケーヒン コーネル大学東南アジアプログラム	14,530,000
	合 計 1 件	14,530,000

助成対象概要

本プログラムは、1986年度に行った、新しい国際プログラム創設の可能性に関する調査を踏まえて、国際助成部門の活動の新しい方向性を探るための試行的な助成として本年度より開始された。

近年日本の東南アジア研究の成果は以下の2点で世界の研究者から注目を集めている。

①東南アジアの言語を習得し、西欧の東南アジア研究を踏まえたうえで、東南アジアでフィールドワークを行っている、新しい世代の日本人研究者が増えている。

②それらの研究者の研究成果は、東南アジアを非東南アジア的で、非西欧的な視点からみているためユニークな視点を持ち、また方法論が革新的である。

しかし、これらの研究成果はそのほとんどが日本語であるため、読める人は限られている。そこで、それらの成果を、アメリカのコーネル大学が英語に翻訳し、刊行する。プロジェクトの運営、翻訳される論文・本の選択は日本人を含む6人のメンバーが行う。

第1年度には東南アジアの伝統文化の変容に関する人類学、歴史学の分野の論文集と東南アジアの農村社会の経済変化に関する論文集を翻訳・出版する予定である。第2年度にはヴェトナムの歴史書、第3年度には東南アジアの近代政治史についての論文集を2冊翻訳・出版する計画である。

VI-5. 成果発表助成

助成対象一覧

	母体となる 助成の番号	助成題目 代表者	助成内容	助成金額 (円)
1	83-1-I-037	多地点同時観測による交通流の空間的挙動に関する基礎的研究 田村 洋一	④	560,000
2	85-II-024	身体障害者の意識と行動における周囲とのギャップと社会への融合対策 内野 昇	②	1,400,000
3	3C-032	愛知における産業遺跡・遺物の調査と保存, その教材化に関する研究 石田 正治	①⑤	1,000,000
4	84-III-011	華僑教育の沿革と現状に関する国際的比較研究 市川 信愛	①⑤	4,000,000
5	82-3-III-062	高等学校の進路分化機能に関する研究 天野 郁夫	①	1,820,000
6	85-K-016	「福島智君とともに歩む会」の活動に関する記録の作成 小島 純郎	②	2,310,000
7	3C-079	京都伏見における酒づくりの歴史的環境をいかした街づくりと子育ての手づくり のよさの研究 岡田 康伸	②	500,000
8	84-I-098	重度身体障害者の自立生活と日本的自立生活援助センターに関する研究 谷口 明広	①	540,000
9	85-III-015	航空における INCIDENT REPORTING SYSTEM に関する総合的研究 宮城 雅子	①②	4,800,000
10	3C-004	南部料理ごよみ ——風土性を生かした食生活の創造—— 神山 恵介	②	900,000

母体となる 助成の番号	助成題目 代表者	助成内容	助成金額 (円)
11 82-3-III-001 84-3-III-001	日本と韓国における漁村の生活文化の比較研究 益田 庄三	②③⑤	2,400,000
12 84-II-047 85-III-016	「日本語対応手話辞典」編纂・作成のための総合研究 田上 隆司	③⑤	2,000,000
13 83-1-III-046 85-III-030	伝統的サゴ生産集落における経済力向上の試み ——小規模援助の適用と村の変容—— 高谷 好一	⑤	550,000
14 86-I-107	辛亥革命をめぐる日本財界と大陸浪人 李 廷江	②	1,500,000
15 85-II-103	医療におけるテクノロジー・アセスメントの予備的研究 吉田 忠	③	1,500,000
16 83-3-II-027 84-3-III-012	アジアにおける建築遺構の修復方法の基礎的研究 中川 武	①⑤	3,820,000
17 86-II-037	ボゴール博物館と連帯して、インドネシアの自然史研究を推進する計画 吉井 良三	④	480,000
18 86-II-107	社会福祉施設における中学・高校生の福祉教育に関する研究 山本 たつ子 (山村三郎変更)	①③	1,300,000
19 85-III-001	遺伝子の領域効果にもとづく発ガン機構の研究 直良 博人	④	500,000
合 計	19 件		31,880,000

(注) 表中の助成内容欄のマル数字は下記の内訳を示す。

- ① 成果報告書の印刷
- ② 出版物の刊行
- ③ シンポジウム等の集会開催
- ④ 国際的学術研究集会への出席
- ⑤ 補足調査等の仕上げ業務

VI-6. その他の助成

助成対象

	テーマ 代表者 所属	助成金額 (円)
1	社会科学研究協議会 (SSRC)・全米学会協議会 (ACLS) の東南アジア合同委員会への 日本人研究者参加費助成 フレデリック E. ウェイクマン 社会科学研究協議会理事長	1,150,000
	合 計 1 件	1,150,000

助成対象概要

アメリカの社会科学協議会 (SSRC) および全米学会協議会 (ACLS) の東南アジア合同委員会は、東南アジア研究促進の計画を討議するために年2回の会合をもっている。この合同委員会はアメリカの組織ではあるが、メンバー構成は国際的であり、その意味でこの合同委員会は東南アジア研究の世界的動向を把握し、情報交換を促進する重要な場といえる。

日本の東南アジア研究は近年非常に活発になってきており、世界の東南アジア研究者が日本の研究者の研究活動に注目し始めているが、上記の合同委員会とはコンタクトがとれていなかった。今回の助成は、同合同委員会に日本人研究者を招待するための費用を補助するものである。

VII. 日夕イ修好100周年記念
特別助成・事業

VII-0. 特別助成と特別事業の概要

日本とタイの両国が修好宣言に調印してから、1987年9月で100周年を迎えた。これを記念して政府を中心に各種の記念事業が行われたが、トヨタ財団でもタイとは国際助成等を通じて深い関係を有するところから、特別助成と特別事業を実施することとした。

特別助成としては、東京国立博物館や朝日新聞社等の主催により東京、大阪、名古屋で開催された「タイ美術展」の費用の一部を助成した。

特別事業としては、(財)国際文化会館との共催により、タイから6名の研究者を招いて研究ワークショップ「日タイ交渉史に関する史料について」および公開シンポジウム「タイ美術史——寺院壁画と石造建築を中心にして」を開催した。これらの特別事業については、外務省、在日タイ大使館、朝日新聞社の後援をいただいた。なお、事業終了後、これらの要旨を日本語とタイ語による報告書としてとりまとめた。

VII-1. 日タイ修好100周年記念特別助成

助成対象一覧

	プロジェクト内容 代表者 所属	助成金額 (円)
1	「タイ美術展」開催費の一部を助成 谷 久光 (朝日新聞社企画総務)	20,000,000
	合 計 1 件	20,000,000

助成対象概要

「タイ美術展」開催費の一部を助成

(朝日新聞社企画総務)

日本とタイの国交樹立100周年を記念して、両国国民の友好親善をいっそう深める文化交流の一環として、『タイ美術展』が開催されることになった。これは、バンコク国立博物館をはじめとするタイ国内主要博物館の所蔵する美術工芸の名品を一堂に展示するもので、東京国立博物館、朝日新聞社等の主催で、1987年8～10月（東京国立博物館）、同11～12月（大阪市立美術館）、1988年1～2月（名古屋市立博物館）にわたって行われた。

今回の出展物はタイ美術を代表する146点で、仏教彫刻群を中心に、精緻な技術を駆使した金銀器や漆器、サワ

ンカローク窯、さらに考古学的に興味深いパンチェン遺跡の出土品なども加わっている。また、この展覧会では北タイの寺院壁画の大規模な写真パネルも併せ展示されたが、これらは当財団の国際助成によって数年にわたる研究を積み重ねてきたシンラパコン大学のソン・シマトラン助教授が研究の一環として撮影してきたもので、これまで日本ではほとんど知られていなかったものである。

今回の特別助成は、日タイ修好100周年事業に協賛するという趣旨に加え、財団による国際助成の成果を広く日本の一般の人々に知ってもらおうという意味をもつものである。

VII-2. 日タイ修好100周年記念特別事業

研究ワークショップ(9月4日(金)10:00~19:00)

「日タイ交渉史に関する史料について」

このワークショップは、日タイ双方の研究者が、これまでに行ってきた日タイ交渉史に関する1次史料や研究成果を持ち寄り、互いに情報を交換し、今後のこの分野の研究を発展させることを目標に実施されたもので、1980年度の研究助成によって進められた「日本語およびタイ語1次史料に基づく日タイ交渉史の予備的基礎的研究(代表:吉川利治)」の展開を目指したものである。

10:00	挨拶(趣旨説明)	石井 米雄(京都大学教授・東南アジア研究センター所長)
第1部 琉球史料を中心に		
10:10	報告	日タイ交渉史関連の琉球史料 小葉田 淳(京都大学名誉教授)
11:10	コメント	チャーンウィット・カセツシリ (タマサート大学副学長)
11:50	質疑応答	
12:10	昼食	
第2部 オランダ史料を中心に		
13:30	報告I	日タイ交渉史関連のオランダ史料 岩生 成一(東京大学名誉教授)
14:30	報告II	日タイ交渉史関連のオランダ史料 ティラワット・ナ・ポーンペット (チュラロンコン大学講師)
15:30	質疑応答	
16:00	コーヒー・ブレイク	
第3部 史料館史料を中心に		
16:15	報告I	日本の史料館史料について 吉川 利治(大阪外国語大学教授)* 石井 米雄(京都大学教授)
17:15	報告II	タイの史料館史料について テムスック・ヌマノン (シンラパコン大学助教授)
18:15	質疑応答	
18:45	閉会挨拶	浅田 孝(トヨタ財団専務理事)
*吉川利治氏は在タイ中で欠席のため報告は石井米雄氏が行った。		

公開シンポジウム(9月5日(土)10:00~18:00)

「タイ美術史—寺院壁画と石造建築を中心として」

この公開シンポジウムは、国際助成によって得られたタイ研究者の成果の発表を中心に企画されたものであるが、関連した研究領域を専門とする日本研究者からのコメントを加えることにより、より広い視野からそれらの成果を理解できるよう意図したもので、そのプログラムは次のとおりである。

10:00	挨拶(趣旨説明)	石澤 良昭(上智大学教授・アジア文化研究所所長)
第1部 タイ美術史の概観		
10:10	講演/報告I	タイ美術史の概観 スパトラディット・ディッサクン (シンラパコン大学元学長)
11:10	コメント	東南アジア史におけるタイ美術の 視点から 山本 達郎(東京大学名誉教授)
12:10	質疑応答	
12:20	昼食	
第2部 タイの寺院壁画		
13:30	講演/報告II	タイの寺院壁画 ソン・シマトラン (シンラパコン大学助教授)
14:30	コメント	ビルマの寺院壁画との比較の視点 から 大野 徹(大阪外国語大学教授)
15:00	質疑応答	
15:30	コーヒー・ブレイク	
第3部 タイの石造建築		
15:45	講演/報告III	タイ建築史—石造建築を中心に アヌウィット・チャレンスプクン (シンラパコン大学准教授)
16:45	コメント	クメールの石造建築との比較の視点 から 石澤 良昭(上智大学教授)
17:15	質疑応答	
17:45	閉会挨拶	前田 陽一(国際文化会館専務理事)

VIII. 会計報告・事業日誌

VIII-0. 事業実績の概要

今年度の助成事業の内訳は、次ページの表に示すとおりであり、研究助成は一般助成が68件2億70万円、今年度より独立したプログラムとした特別研究助成が1件1,000万円、活動記録助成は、記録の作成が10件1,770万円、記録の出版が6件610万円、第5回研究コンクール予備研究助成が18件955万円、国際助成は一般助成が71件1億2,216万円、一般助成のサブ・プログラムとしたインドネシア若手研究者奨励研究助成が17件503万円、「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成は日本向けが8件1,446万円、東南アジア向けが6件2,513万円、東南アジア相互間が3件1,813万円、フォーラム助成は6件1,530万円、民間助成活動促進プログラム助成は2件1,430万円、成果発表助成は19件3,188万円、その他助成は1件115万円、また今年度より開始したプログラムである東南アジア研究英訳刊行助成は1件1,453万円、日タイ修好100周年を記念した特別助成は1件2,000万円となっている。以上合計すると助成件数238件、助成金総額は5億2,612万円である。

その結果これまで13年間の助成累計は件数で1,988件、金額で58億1,825万5,880円となった。なお、以上の金額は理事会決定段階のものであり、その後の変更（一部助成金の返納等）は含んでいない。

今年度の会計状況は116ページ以降の三つの表に示すとおりである。

また今年度の当財団主催事業としては、第24回研究報告会(24ページ参照)を実施し、日タイ修好100周年を記念したワークショップ・シンポジウムを共催事業として実施した。

VIII-1. 助成金支出累計

(単位：千円)

助成種別	年度	1975～ 1983年度	1984年度	1985年度	1986年度	1987年度	累 計
研究助成金	一般研究	682 2,412,740	67 198,700	63 204,800	63 197,800	68 200,700	943 3,214,740
	特別研究	—	—	—	1 9,500	1 10,000	2 19,500
活動記録助成金	記 録	—	11 20,000	11 19,800	11 20,000	10 17,700	43 77,500
	出 版	—	—	—	5 5,000	6 6,100	11 11,100
研究コンクール助成金	第1回	35 62,000	—	—	—	—	35 62,000
	第2回	32 46,000	2 10,000	—	—	—	34 56,000
	第3回	19 9,500	10 41,000	—	1 10,000	—	30 60,500
	第4回	—	—	20 10,550	8 40,000	—	28 50,550
	第5回	—	—	—	—	18 9,550	18 9,550
国際助成金	一般助成	130 530,963	26 93,840	52 127,000	52 99,520	71 122,160	331 973,483
	若手研究	—	—	—	—	17 5,030	17 5,030
国際学術研究集会助成金	—	30 60,263	—	[当プログラムは1980年度に終了]			30 60,263
「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成金	日本向け	75 164,910	14 25,440	11 18,580	9 13,720	8 14,460	117 237,110
	東南アジア向け	4 59,630	2 7,640	5 18,140	4 24,770	6 25,130	21 135,310
	東南アジア相互間	1 1,080	2 6,070	8 19,780	4 15,550	3 18,130	18 60,610
東南アジア諸語辞書編纂出版助成金	—	3 22,500	—	—	2 12,000	—	5 34,500
東南アジア研究英訳刊行助成金	—	—	—	—	—	1 14,530	1 14,530
フェロシップ助成金	—	9 215,000	1 20,000	[当プログラムは1984年度にて終了]			10 235,000
フォーラム助成金	—	9 20,000	4 9,700	6 15,000	4 13,000	6 15,300	29 73,000
民間助成活動促進プログラム助成金	—	—	4 9,800	1 10,000	4 15,500	2 14,300	11 49,600
特別助成金*	—	—	3 40,000	—	—	1 20,000	4 60,000
その他助成金	—	—	1 1,000	1 1,500	1 1,500	1 1,150	4 5,150
成果発表助成金	—	130 157,029. ⁸⁸	30 39,850	40 48,210	27 36,260	19 31,880	246 313,229. ⁸⁸
合 計	—	1,159 3,761,615. ⁸⁸	177 523,040	218 493,360	196 514,120	238 526,120	1,988 5,818,255. ⁸⁸

(注) 金額は各年度の理事会で決定されたものであり、その後の変更については含んでいない。上段は件数を、下段は金額(千円)を示す。

※ 特別助成金は、1984年度は10周年記念特別助成金を、1987年度は日タイ修好100周年記念特別助成金を示す。

VIII-2. 1987(昭和62)年度 会計報告

1. 収支計算書(自 1987年 4月 1日～至 1988年 3月31日)

項目		金額(円)
収入	財産運用収入	863,127,559
	雑収入	8,816,000
	当期収入合計(A)	871,943,559
	前期繰越収支差額	197,996,710
収入合計 (B)		1,069,940,269
支出	事業費	694,454,539
	目夕イ修好100周年 記念特別事業費	10,145,807
	管理費	158,802,191
	退職給与引当資産支出	5,330,538
	当期支出合計(C)	868,733,075
当期収支差額(A) - (C)		3,210,484
次期繰越収支差額* (B) - (C)		201,207,194

* 次期繰越収支差額は、次年度収入予算繰入

2. 貸借対照表 (1988年 3月31日現在)

借方 科目	金額(円)	貸方 科目	金額(円)
(資産の部)		(負債の部)	
現金	63,884	未払金	234,725,152
預金	87,097,649	預り金	8,086,147
有価証券	12,015,752,087	退職給与引当金	28,906,156
前払金	2,616,526	(正味財産の部)	
立替金	15,629,803	正味財産	11,897,677,802
仮払金	1,764,700	(うち基本金)	(7,000,000,000)
固定資産	46,470,608	(うち当期正味 財産増加額)	(1,687,867)
合 計	12,169,395,257	合 計	12,169,395,257

3. 財産推移表

年度末	基本財産(円)	運用財産(円)*	正味財産計(円)
1974(昭和49)年度	3,000,000,000	133,057,559	3,133,057,559
1975(昭和50)年度	3,000,000,000	2,157,688,541	5,157,688,541
1976(昭和51)年度	3,000,000,000	3,186,517,747	6,186,517,747
1977(昭和52)年度	3,000,000,000	5,287,322,930	8,287,322,930
1978(昭和53)年度	3,000,000,000	7,399,047,725	10,399,047,725
1979(昭和54)年度	3,000,000,000	7,861,285,758	10,861,285,758
1980(昭和55)年度	7,000,000,000	4,003,621,400	11,003,621,400
1981(昭和56)年度	7,000,000,000	4,149,064,517	11,149,064,517
1982(昭和57)年度	7,000,000,000	4,287,154,437	11,287,154,437
1983(昭和58)年度	7,000,000,000	4,516,076,037	11,516,076,037
1984(昭和59)年度	7,000,000,000	4,657,945,551	11,657,945,551
1985(昭和60)年度	7,000,000,000	4,790,109,445	11,790,109,445
1986(昭和61)年度	7,000,000,000	4,895,989,935	11,895,989,935
1987(昭和62)年度	7,000,000,000	4,897,677,802	11,897,677,802

* 運用財産のなかにはその他の固定資産、積立金、次期繰越収支差額を含む。

4. 助成金変更および返納一覧

(自 1986年 4月 1日 ~ 至 1987年 3月 31日)

助成番号	助成代表者 助成金種別 事由	所属	助成決定日	上段：決定金額(円) 中段：変更および返納額(円) 下段：最終助成額(円)
1	85-B-005	井村文化事業社 翻訳出版促進助成 翻訳枚数減	61. 3. 20	1,860,000 360,000 1,500,000
2	85-S-013	本原勝彬 (社)奈良まちづくりセンター 成果発表助成 助成金残	60. 10. 3	1,780,000 270,000 1,510,000
3	85-B-002	めこん 翻訳出版促進助成 翻訳枚数減	61. 3. 20	1,180,000 92,000 1,088,000
4	85-K-013	G. D. ウィジャヤワルダナ 翻訳出版促進助成東南アジア相互間 助成金残	60. 10. 3	1,530,000 100,000 1,430,000
5	81-B-001	井村文化事業社 翻訳出版促進助成 出版中止	56. 6. 17	3,360,000 3,360,000 0
6	86-II-326	D. K. ベルサーレ ポンパール大学 研究助成 研究中止	61. 10. 2	2,900,000 2,900,000 0
7	84-B-008	井村文化事業社 翻訳出版促進助成 翻訳枚数減	59. 3. 13	1,900,000 340,000 1,560,000
8	85-S-042	片寄俊秀 長崎再発見研究会 成果発表助成 印刷中止	61. 3. 20	1,000,000 1,000,000 0

(注) この表は、各年度の年次報告書記載の助成金額(理事会で決定した額)を、後に助成対象者側において、計画変更、辞退等の理由で変更したものの一覧表です。

VIII-3. 1987(昭和62)年度 事業日誌

1987年 4月 1日	研究助成・活動記録助成公募開始	
4月 3日	第3回研究コンクール特別賞贈呈式・研究報告会(東京)	
4月12日	研究助成個人奨励研究交流会(東京)	
4月20日	トヨタ財団レポートNo.40発行	
5月31日	研究助成公募の受付締切(737件)	
	活動記録助成(記録の作成)公募の受付締切(56件)	
6月17日	第45回理事会	
	1986年度事業報告、収支決算の承認	
	専務理事、研究助成臨時選考委員、第5回研究コンクール選考委員の選任について	
	フォーラム助成、助成先決定	4件
	民間助成活動促進プログラム助成、助成先決定	1件
	その他の助成、助成先報告	1件
	成果発表助成、助成先報告	3件
	第12回評議員会	
	財団活動状況の報告	
7月15日	トヨタ財団レポートNo.41発行	
7月31日	1986(昭和61)年度年次報告(和文)発行	
	第3回研究コンクール	
	報告書“身近な環境をみつめよう”発行	
9月 4日	日タイ修好100周年記念：研究ワークショップ	
9月 5日	同：公開シンポジウム(東京)	
10月 1日	第46回理事会	
	研究助成、助成先決定	68件
	特別研究助成、助成先決定	1件
	活動記録助成(記録の作成)、助成先決定	11件
	活動記録助成(記録の出版)、助成先決定	2件
	国際助成、助成先決定	88件
	翻訳出版促進助成(日本向け)、助成先決定	8件
	翻訳出版促進助成(東南アジア向け)、助成先決定	6件
	翻訳出版促進助成(東南アジア相互)、助成先決定	3件
	東南アジア研究英訳刊行助成、助成先決定	1件

	フォーラム助成, 助成先決定	1 件
	日タイ修好100周年記念特別助成, 助成先決定	1 件
	第5回研究コンクール選考委員の選任について	
	成果発表助成, 助成先報告	6 件
10月21日	第13回助成金贈呈式	
10月31日	トヨタ財団レポートNo.42発行	
	翻訳出版促進助成・刊行物紹介(英文)No.7発行	
11月29日	研究コンクール第1・2回特別賞研究経過報告会・交流会 (東京)	
12月31日	活動記録助成(記録の出版)公募の受付締切(6件)	
1988年 1月25日	トヨタ財団レポートNo.43発行	
3月12日	第24回研究報告会(東京)	
3月17日	第47回理事会	
	活動記録助成(記録の出版), 助成先決定	4 件
	活動記録助成(記録の作成)	1 件
	(辞退承認)	
	第5回研究コンクール予備研究助成, 助成先決定	18件
	フォーラム助成, 助成先決定	1 件
	民間助成活動促進プログラム助成, 助成先決定	1 件
	役員退職慰労金について	
	1987年度収支決算見込み	
	助成財団資料センターの財団法人化に伴う寄附金の拠出 についての説明	
	1988年度事業計画, 収支予算の承認	
	理事・監事, 評議員, 企画委員, 選考委員, 専門委員の 任期について及び一部選任	
	成果発表助成, 助成先報告	10件
3月31日	翻訳出版促進助成・刊行物紹介(和文)No.8発行	

事務局員

1988年 3月31日現在

事務局長	山口日出夫
総務部	亀沢直道(部長) 伊藤勝義(係長) 渡辺 元 牧田東一(兼) 松倉康子 田村美恵子 成田真澄 星名優子 佐山弘美 土方かほる
企画調査部	山口日出夫(部長兼)
研究助成部門	山岡義典(プログラムオフィサー) 久須美雅昭 渡辺 元(兼)
国際助成部門	若山佳子(プログラムオフィサー) 牧田東一 姫本由美子

1987(昭和62)年度年次報告

発行者 財団法人 トヨタ財団
(〒163) 東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階・私書箱236
TEL.(03)344-1701~3

発行日 1988年 7月31日
制作 童夢出版株式会社
印刷 真友王芸株式会社
